

秋 田 市

湊 城 跡

—秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成19年度調査区）—

2009.3 秋田市教育委員会

序

秋田市は、秋田市土崎港中央三・五・六・丁目地内に秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）を計画したことから、周知の遺跡である「湊城跡」の保護について協議を重ね、平成17年度から工事着手前に発掘調査を実施して、遺跡を記録保存することとし、平成19年度で3年目となりました。

調査の結果、湊城に関係する遺構は発見されませんでした。江戸時代の竪穴遺構・柱列・溝跡・土坑などが検出され、当時の土地利用が判明し、地域の歴史を考える上での貴重な成果を得ることができました。

本報告書は、平成19年度調査区の調査結果をまとめたもので、文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用していただければ、幸いに存じます。

刊行にあたり、調査にご協力いただきました関係各位の皆様へ感謝申し上げますとともに、今後とも、埋蔵文化財の保護につきまして、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

平成21年3月

秋田市教育委員会
教育長 高橋 健一

例 言

- 1 本報告書は、秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う湊城跡（秋田市土崎港中央六丁目地内）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、事業主体者が秋田市建設部道路建設課、業務受託者が株式会社 本郷建設工務所、調査担当者が秋田市教育委員会文化振興室となって実施した。本発掘調査経費については、事業主体者である秋田市建設部道路建設課が負担した。なお、平成18年度に実施した確認調査は、秋田市教育委員会が調査主体となり、国庫補助金および県費補助金の交付を受けて行った。
- 3 本報告書は石郷岡誠一、安田忠市の指導のもと、執筆・編集および写真撮影は伊藤才城が行った。
- 4 出土遺物の陶磁器類について、有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に鑑定をお願いした。
- 5 本報告書刊行以前に、現地説明会資料や報道等により調査成果の一部が公表されているが、本報告書の記載内容をもって正式なものとする。
- 6 発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜った。（敬称略・順不同）
文化庁、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県立博物館、秋田城跡調査事務所、清水洋平、大野憲司、田中博光、五十嵐一治、川口良、神田和彦

凡 例

- 1 図中には下記の略記号を用いた。
SKI－竪穴遺構、SA－柱列、SD－溝跡、SE－井戸状遺構、SK－土坑、P－ピット、SX－性格不明遺構
- 2 図中の方位は、すべて真北を示す。
- 3 図中の地図には、秋田市管内図 1／50,000、同 1／25,000、都市計画図 1／2,500を使用した。
- 4 本文中の遺物については、陶磁器・土製品・瓦・木製品・金属製品・銭貨の基礎分類ごとに記述した。
- 5 実測図の中で、青磁は「青磁」の文字と 、鉄釉は「鉄釉」の文字と の網掛けで図示し、白磁は「白磁」の文字のみで示した。
- 6 本文中の陶磁器の生産地については、国内産は肥前系・瀬戸美濃系など主要な大規模生産地（地方）に関してその生産地産の製品を主とし、それに直接技術的影響を受けた周辺及び地方の窯の製品も含め「系」として示した。また、より具体的生産地として窯を限定できるものについては、秋田県の在地窯である寺内窯のように記述した。
なお、肥前系陶磁器の産地同定および年代については佐賀県有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に鑑定を依頼したが、報告文の内容についてはご教示をもとに執筆を行った担当者に責がある。

目 次

序
例 言
凡 例

第1章 調査の概要	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
(1) 周辺の遺跡	3
(2) 安東氏と湊城跡の概要	9
第3章 調査の方法と成果	12
第1節 調査の方法	12
第2節 層序	12
第3節 遺構と遺物	15
(1) 第Ⅳ層面検出の遺構・遺物	15
(2) 第Ⅴ層面検出の遺構・遺物	23
(3) 第Ⅵ層面検出の遺構・遺物	33
(4) 人骨について	39
(5) 出土遺物属性表および実測図	39
第4章 まとめ	52
第1節 検出遺構とその年代について	52
第2節 出土遺物について	53
第3節 湊城について	54

写真図版
報告書抄録

第1章 調査の概要

第1節 調査の経過

秋田市建設部道路建設課は、土崎駅前地域の利便性を図るため、秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）を秋田市土崎港中央三丁目・五丁目・六丁目地内に計画した。しかし、当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「湊城跡」の範囲内であることから、秋田市教育委員会との間で開発に伴う事前協議を行った。協議の結果、平成18年12月18日付けで秋田市教育委員会に埋蔵文化財事前調査の依頼があった。これを受けて秋田市教育委員会は、平成19年2月19日に分布調査による現況確認と試掘による範囲確認調査を実施し、江戸時代の遺構・遺物を確認した。

そして、平成19年4月26日付けで秋田市建設部道路建設課から秋田県教育委員会に土木工事等のための発掘調査に関する通知書（文化財保護法第94条）が提出された。これに対し、範囲確認調査の結果に基づき平成19年5月22日付け教生-339で秋田県教育委員会より、工事は「恒久的な建築物、道路その他の工作物を設置する場合」に該当するため、事業予定地に対して発掘調査条件の通知があった。

これらのことを踏まえて、湊城跡の保護について協議した結果、事業主体者が秋田市建設部（担当課：道路建設課）、調査担当者が秋田市教育委員会（担当課：文化振興室）となり、平成19年度に発掘調査、平成20年度に整理作業を行うこととした。また、費用負担については事業主体者が負担し、発掘調査・整理作業の調査に関わる部分以外は、業務委託することとした。発掘調査は平成19年6月22日付けで事業主体者の秋田市長と調査担当者の秋田市教育委員会、業務受託者の株式会社 本郷建設工務所の3者で、整理作業は平成20年8月7日付けで同3者で協定書を結び、事業を実施した。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査（平成19年度）

平成19年7月2日から調査を開始した。7月19日、近代造成土である第Ⅰ～Ⅲ層を除去し、第Ⅳ層上部で江戸時代の遺構・遺物を確認した。9月6日から第Ⅴ層面の遺構精査、10月17日から第Ⅵ層面の遺構精査を開始した。10月13日に市民を対象とした現地説明会を行い、134名の参加者があった。10月26日に遺構精査・記録化が終了し、全工程を終了した。

発掘調査体制

調査期間 平成19年7月2日～10月26日

調査面積 681.2㎡（調査対象面積1,136.72㎡）

事業主体者 秋田市建設部道路建設課

調査担当者 秋田市教育委員会文化振興室

調査体制 秋田市教育委員会文化振興室

文化振興室 室長 小松正夫

参事 赤川衛

室長補佐 加藤隆子

文化財担当

主席主査 西谷隆（調査担当）

主席主査 安 田 忠 市
主 事 進 藤 靖
主 事 鎌 田 英 智
主 事 小 野 隆 志
主 事 伊 藤 才 城 (調査担当・主務者)

業務受託者 株式会社 本郷建設工務所

調査作業員 伊藤弘義、伊藤満、千葉隆樹、山本峰吉、佐藤忠喜、小松田税、
星野喜一郎、加賀屋喜久雄、松田忠、佐藤兼雄、石川巖、鈴木銀一、
鈴木長司、三浦吉司、佐々木昇三、鈴木慶子、鈴木鈴子、長尾景元、
渡辺範、和田庸悦、水戸瀬厚志、加藤恪人、白幡正一、斎藤瑞穂、
佐藤定雄

第3節 整理作業の経過

整理作業（平成20年度）

平成20年10月27日から出土遺物の洗浄を開始した。11月4日から2月6日まで室内整理作業を実施した。接合（11月上旬）、注記（11月）、実測（11月中旬～12月上旬）、トレース（12月中旬～下旬）、写真撮影（1月）、版下作成（1月）、編集作業（2月）を実施し、印刷所へ入稿した。なお、12月3、4日に佐賀県有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏から陶磁器類の鑑定をしていただいた。3月25日までに校正・製本を実施し、全工程を終了した。

整理作業体制

作業期間 平成20年10月27日～平成21年3月25日
事業主体者 秋田市建設部道路建設課
調査担当者 秋田市教育委員会文化振興室
調査体制 秋田市教育委員会文化振興室
文化振興室 室 長 石郷岡 誠 一
参 事 赤 川 衛
室長補佐 加 藤 隆 子
文化財担当
副参事 安 田 忠 市
主席主査 西 谷 隆
主 査 進 藤 靖
主 事 鎌 田 英 智
主 事 伊 藤 才 城 (整理担当)

業務受託者 株式会社 本郷建設工務所

整理作業員 千葉隆樹、岩谷みゆき、今野祥子、岩谷みどり、田原瑞穂

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

湊城跡は、秋田平野を流れる雄物川河口部（秋田運河）の右岸、標高4～7mの地点に位置している（第1図）。秋田市街地北部の秋田市土崎港中央三・五・六丁目地内で、北緯39°45′26″、東経140°4′16″（世界測地系：X=-26,661、Y=-65,304）の土崎神明社を中心とした東西600m、南北500mの範囲で、現在市街地となっている（第2図、図版1）。平成19年度調査区は、遺跡の中心から北東へ約200mの地点である。

遺跡は、地形分類では砂丘地にあたる（経済企画庁総合開発局国土調査課編1966、第3図）。秋田市では、このような砂丘地は海岸線と並行に幅2～4kmにわたって分布し、この延長は八郎潟南部まで続いており、ほとんどは被覆砂丘である。遺跡が所在する砂丘地は土崎砂丘地と呼ばれ、南北を旧雄物川と新城川に囲まれた土崎を中心とした砂丘地で、一部に標高20m前後の高位の砂丘はあるが、大部分は10m前後の低位の砂丘からなっている。土崎砂丘地で特徴的なことは、土崎市街地と新日本石油加工（株）秋田事業所の間に幅500～600mの旧河道がみられる。これは雄物川の旧河道と考えられ、北側は秋田市飯島穀丁の集落まで広がり、湾状の形状を呈している。土崎砂丘地の旧地形が湾状の形状を呈していることは、遺跡の立地として注意すべき点である。

第2節 歴史的環境

（1）周辺の遺跡

秋田市教育委員会が昭和61年から63年に実施した『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』（秋田市教育委員会1989）および『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書一改訂版一』（秋田市教育委員会2002）に基づいて、湊城跡周辺の遺跡について概観する。

主要な中世の遺跡としては、湊城跡から約2.3km北の新城川左岸に穀丁遺跡（15世紀代）、約1.7km南の旧雄物川下流域右岸に後城遺跡、約2.2km南に秋田城跡、約5.3km南に下夕野遺跡が所在し、雄物川下流域右岸に中世の関連遺跡が集中している（第1図）。

穀丁遺跡は、本格的な発掘調査は行われていないが、工事中に遺物が発見された（庄内1982）。中国産青磁（碗2点）、瀬戸美濃系陶器（花瓶1点）、須恵器系陶器（播鉢1点）、茶臼1点、鉄鍋1点、砥石1点などが出土した。中国産青磁は15世紀代、国内産陶器は15世紀中葉～後葉に位置づけられると考えられている（神田2006）。後城遺跡は、掘立柱建物跡・井戸跡・竪穴遺構・土壙墓・貯水施設と考えられる大型円形竪穴遺構などが検出されている（小松他1978、伊藤2003a・2005）。遺物は、中国産陶磁器（青磁・白磁・染付）、国内産陶器（瀬戸美濃系・須恵器系・越前系・肥前系）などが出土している。年代は13世紀～16世紀末に渡るが、主体は14世紀後半～16世紀末である。秋田城跡は古代城柵官衙遺跡であるが、鶴ノ木・大小路・勅使館地区で中世の遺構・遺物が確認されている。掘立柱建物跡・井戸跡・竪穴遺構・鍛冶炉跡・土壙墓などが確認され、かわらけ、中国産青磁（龍泉窯系・同安窯系）、白磁、須恵器系陶器などが出土しており、年代は12世紀末～13世紀中葉頃に位置づけられる（小松他1983・1993・1997・1998、小松1997、伊藤2003b）。下夕野遺跡は、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土坑などが検出され、須恵器系陶器、中国産青磁（龍泉窯系）・白磁などが出土し、12世紀後葉～14世紀中

葉頃の集落跡である（小松他1979、神田2003・2005）。

主要な近世の遺跡としては、湊城から約6 km南西に久保田城跡が所在する。久保田城は秋田藩主佐竹氏12代約270年間の居城で、現在の千秋公園一帯である。慶長7年（1602）に常陸国水戸城（茨城県水戸市）から秋田に転封された佐竹義宣（1570～1633）は、当初旧領主安東実季（1576～1659）の居城であった土崎湊城に入城した。しかし、湊城は狭小の平城であることから神明山（現千秋公園）に新城を築くこととなり、慶長8年（1603）に着工し、同9年（1604）に湊城を破却し、久保田城へ移ったという経緯がある。

その他、湊城跡周辺には、寺子山遺跡（2：縄文）、県立聾学校遺跡（3：縄文）、高野遺跡（6：奈良・平安）、菅江真澄墓（7：近世）、児桜貝塚（8：縄文）、寺内焼窯跡（9：近世）、神屋敷遺跡（10）、根笹山遺跡（11）などがあり、雄物川右岸の砂丘丘陵および微高地上に周知の遺跡が存在する（第4図）。

【引用文献】

秋田市教育委員会 1989 『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』

秋田市教育委員会 2002 『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書—改訂版—』

伊藤武士 2003a 「秋田市後城遺跡—中世の湊町—」『中世出羽の諸様相—寺院・生産・城館・集落—』東北中世考古学会第9回大会（秋田大会）資料集 pp.99-108

伊藤武士 2003b 「秋田市秋田城跡—中世秋田城周辺—」『中世出羽の諸様相—寺院・生産・城館・集落—』東北中世考古学会第9回大会（秋田大会）資料集 pp.224-236

伊藤武士 2005 「秋田湊と湊安東氏の城館」『海と城の中世』東北中世考古学叢書4 高志書院 pp.109-128

神田和彦 2003 「秋田市下タ野遺跡—雄物川下流域における中世前期の集落—」『中世出羽の諸様相—寺院・生産・城館・集落—』東北中世考古学会第9回大会（秋田大会）資料集 pp.212-223

神田和彦 2005 「雄物川下流域 中世前期の集落—下タ野遺跡—」『海と城の中世』東北中世考古学叢書4 高志書院 pp.195-204

神田和彦 2006 「秋田県中世考古学会の現状と課題—秋田平野における中世遺跡の展開を中心として—」『遺跡研究の方法—東北中世考古学の12年—』東北中世考古学会第12回研究大会資料集 pp.62-70

経済企画庁総合開発局国土調査課編 1966 『土地分類基本調査 秋田 地形・表層地質・土壌』

小松正夫 1997 「中世秋田城の行方—高清水岡の考古学的見地から—」『倉田芳郎先生古希記念 生産の考古学』同成社 pp.195-204

小松正夫他 1978 『後城遺跡発掘調査報告書』秋田市教育委員会

小松正夫他 1979 『下タ野遺跡発掘調査報告書』秋田市教育委員会

小松正夫他 1983 『昭和57年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

小松正夫他 1993 『平成4年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

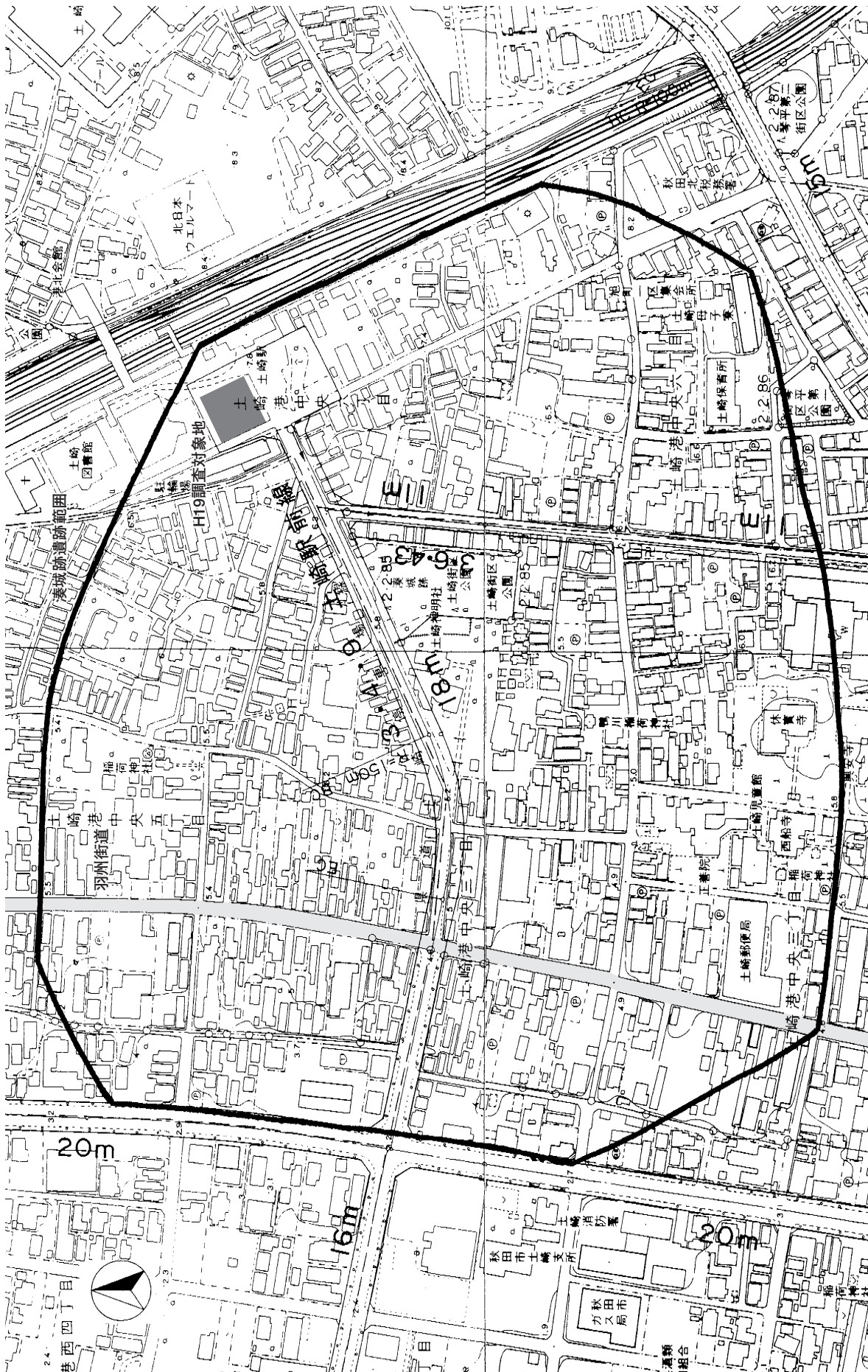
小松正夫他 1997 『平成8年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

小松正夫他 1998 『平成9年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

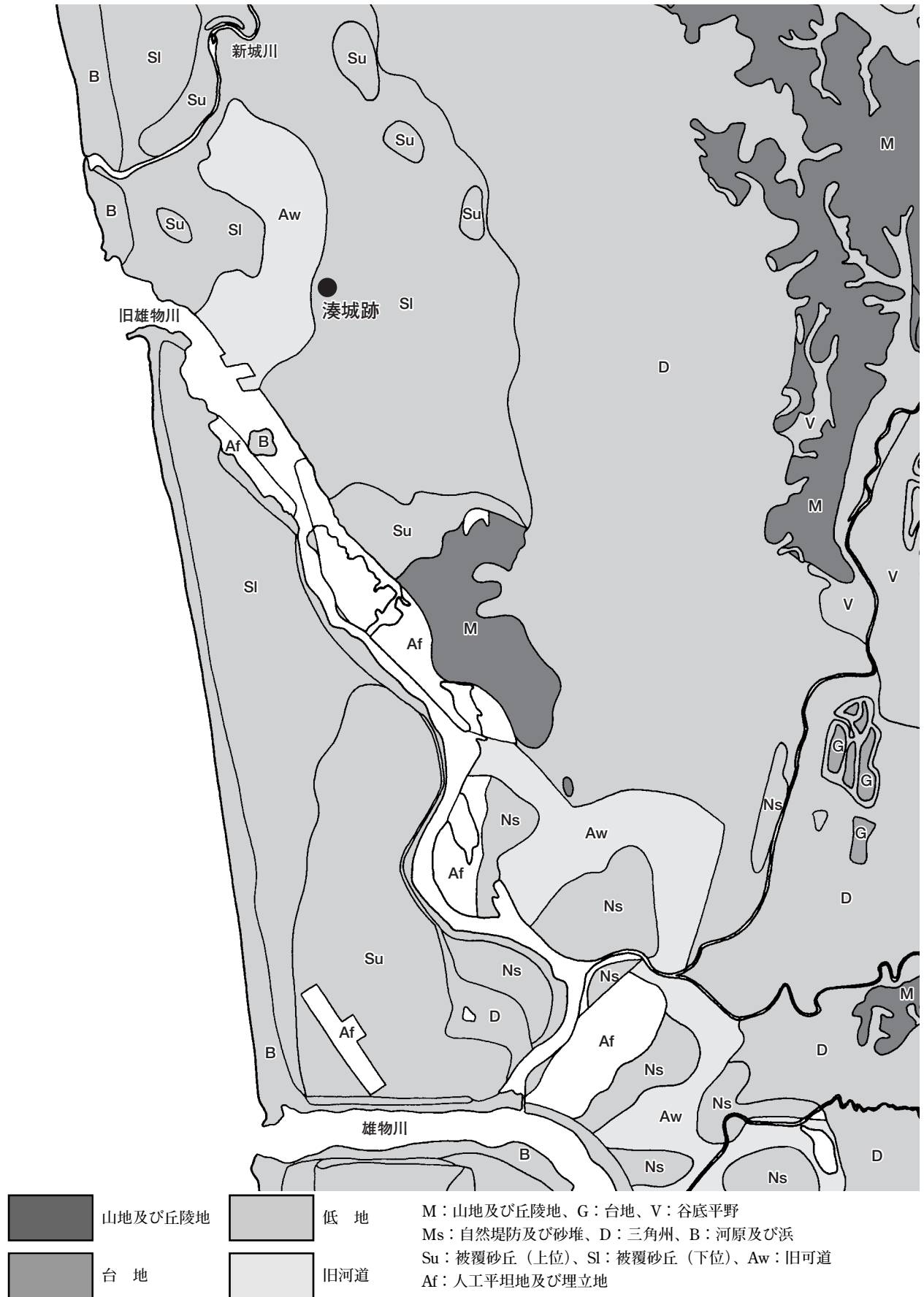
庄内昭男 1982 「秋田市飯島穀丁出土の中世遺物について」『秋田県立博物館研究報告』7 pp.95-102



第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)



第2図 湊城跡周辺区 (S=1/3,000)



第3図 地形分類図 (S=1/50,000)



第4図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	遺構・遺物
1	湊城跡	城郭	秋田市土崎港中央三丁目他	中世・近世	柱列、建物跡、溝跡、井戸跡、土坑、焼土遺構、集石遺構、敷石状遺構、ビット：土器・陶器・磁器・土製品・木製品・石製品・金属製品・瓦・銭貨・動物依存体
2	寺小山遺跡	遺物包含地	秋田市土崎港中央七丁目	縄文	石錘
3	県立聾学校遺跡	遺物包含地	秋田市土崎港北二丁目17番	縄文	縄文土器・石器
4	後城遺跡	集落跡	秋田市寺内字後城	奈良・平安・中世	土壙墓・土壙・井戸跡・住居跡：土師器・須恵器・古瀬戸・越前焼・珠洲系中世陶器・青磁・白磁・古銭・鉄製品・木製品・宝篋印塔
5	秋田城跡	城柵・城館 (国指定)	秋田市寺内字大畑他	縄文・奈良・平安・中世	掘立柱建物跡・竪穴住居跡・築地・柱列・井戸跡・鍛冶炉跡等：縄文土器・石器・石製品・土師器・須恵器・赤褐色土器・漆紙・木製品・鉄製品・木筒等
6	高野遺跡	遺物包含地	秋田市寺内字高野	奈良・平安	須恵器
7	菅江真澄墓	墓地 (市指定)	秋田市寺内字大小路	近世	
8	児桜貝塚	貝塚	秋田市寺内字児桜29	縄文	貝塚 縄文土器・石錘・刻線礫
9	寺内焼窯跡	窯跡	秋田市寺内字堂ノ沢	近世	陶器窯跡・瓦窯跡・煉瓦窯・陶器物原・磁器物原：近世陶磁器・瓦・煉瓦・木製品
10	神屋敷遺跡	古墳擬定地	秋田市寺内字神屋敷1		直径7m、高さ1.5m程度の土盛り3基
11	根笹山遺跡	古墳擬定地	秋田市寺内字神屋敷137		径6m程高さ2mの円墳状の高まり

(2) 安東氏と湊城跡の概要

安東氏と湊城跡について、文献史料や絵図などにみられる記載を整理し、概要と変遷について述べる。

『秋田家文書』所収の「秋田家系図」^(註1)によれば、安東氏は前九年の役(1051～1062)で討伐された安倍貞任の子・高星が青森県津軽地方の藤崎に逃れ、その後、子孫の貞秀が安東太郎と称し、当家の家名としたことに始まるとされる。やがて、愛秀の頃(鎌倉時代末頃か)に安東氏は十三湊を本拠とした。その後、盛季(?～1414)は下国家を興し、盛季の弟・鹿季(?～1423)は、盛季の命により、兵200余騎を率いて、秋田の湊を伐ち、湊家の元祖となったとされる。また、「南部世譜附録」によれば、応永17年(1410)に、安東鹿季は山北刈和野(現・大仙市刈和野)で南部守行と戦った記録がある。この他、秋田市山内字松原に所在する補陀寺には、「安東下国太郎守季位牌」があり、補陀寺の開基である安東盛季が応永21年(1414)に96才で死亡したと記載されている。安東氏が討ったとされる、いわゆる「秋田湊」の場所は定かではないが、以上のような記述から、鹿季の頃の応永年間(1394～1428)には、秋田平野に湊安東氏の影響が及んでいたと考えられる。

湊安東氏の居城とされる湊城の築造については、明治期に書かれた『秋田沿革史大成』に、「土崎湊城ハ百三代後花園帝永享八酉辰年、安倍康季將軍野西北ノ方へ築ク」との記述があるが、この記述自体に根拠はなく、所在・年代ともに不明と言わざるを得ない。^(註2)

その後、安東家は政季(?～1488)が河北郡を得、次代の忠季(?～1511)が檜山城(現・能代市)を居城として築き、檜山安東氏となった。秋田県内には能代の檜山安東氏と秋田の湊安東氏の両家が併存することとなる。元亀元年(1570)頃、愛季(?～1587)が弟・茂季を湊家に送り、両家の統合を図った。しかし、こうした強引な両家統合に湊安東氏側は反発し、天正17年(1589)に、『秋田家文書』の「湊檜山両家合戦覚書」に記されるように、両家の合戦であるいわゆる「湊合戦」が起こる。湊合戦の結果、檜山安東氏の実季(1576～1659)が勝利を収め、その後実季は檜山城から湊城へ居城を移していったようである。『秋田家文書』「御作事入用之目録」などに記されているように、慶長4～6年(1599～1601)に湊城が改修されていることが分かる。改修の内容は、御広間・御奏者之間・角屋倉・御門屋倉・御台所・御鷹部屋・御料理之間・御長屋の作事を行っている。また、改修にかかった費用・人数・材料・日数なども記されており、その内容は大がかりなものである。こうした改修は大規模であり、城の新築に近いとの見解もある(塩谷他1996)。

このような大改修が行われた湊城の所在については、江戸時代中期に書かれた『出羽国風土略記』に、「土崎の湊という當地に城跡あり平城にして水堀二重土手所々にあり大手は辛酉にあり搦手は北に有」と記されており、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地としての「湊城跡」はこれを参考に設定されている。

江戸時代に入り、慶長7年(1602)佐竹義宣が常陸国(現・茨城県)より秋田へ転封となり、湊城へ入城する。そして、安東実季は常陸国宍戸へ国替えとなる。慶長9年(1604)には、新築した久保田城へ移り、湊城は破却される。その後、湊城跡周辺は土崎湊として元和2年(1616)に久保田城と土崎湊をつなぐ新道(羽州街道)が整備される。それまでは、久保田城に行くには、土崎湊→八柳→天徳寺門前通り→泉→手形→久保田城というルートであったが、羽州街道が整備されたことにより、土崎湊→寺内→八橋→久保田城というルートとなったとされている(加藤編1941)。また、元和6年(1620)には、土崎神明社が湊城の跡地(現在地)に移り、土崎の総鎮守となる(秋田市教育委員会編1993)^(註3)。その後、土崎湊は日本海海運や雄物川船運による物流の要所となり湊町として栄えていく。川口家に伝わる『元文年中湊古絵図』(1730～1740)(第5図)には、江戸期の土崎湊の町割り図などが描かれている。これ

によれば、平成19年度調査区は土崎神明社北東側内堀の外側の一画にあたる。

以上のような、安東氏と湊城跡の概要について年表にまとめると表2のようになる。

表2 湊城跡関係年表

年号	西暦	内容
応永年間	1394～1428	津軽十三湊の安東鹿季が秋田の湊を伐つ。 「鹿季 安東二郎 盛季 鹿季に兵二百余の騎を附け、秋田之湊を伐令む、是れ湊家之元祖也、応永三十年六月十六日卒、・・・」 『秋田家文書』『秋田家系図』
永享8年	1436	湊城が築城される？ 「土崎湊城は百三代花園帝永享八西辰年、安倍鹿季將軍野西北の方へ築く。」 『秋田沿革史大成 下』
天正17年	1589	湊合戦がおこる。 『秋田家文書』『湊檜山両家合戦覚書』
慶長4年 ～6年	1599～1601	安東実季が湊城の大改修をおこなう。 御広間・御奏者之間、角屋倉・御門屋倉・御台所・御鷹部屋・御料理之間・御長屋を工事した費用・人数・日数等の記述がある。 『秋田家文書』『御作事入用之目録』など 「土崎の湊という當地に城跡あり平城にして水堀二重土手所々にあり大手は辛酉にあり搦手は北に有」『出羽国風土略記』
慶長7年	1602	佐竹義宣が常陸より湊城へ入城。安東実季は常陸国宍戸へ。
慶長9年	1604	佐竹義宣が久保田城へ移り、湊城は破却。
元和2年	1616	久保田城と土崎湊をつなぐ新道（羽州街道）が完成。
元和6年	1620	神明社が湊城の跡地（現在地）に移り、土崎の総鎮守となる。

(註1) 安東氏に関する家系図はこの他に様々あるが、ここでは、実季の死去の前年（1658）に完成されたとされる秋田家に伝わる「秋田家系図」を参考した。文献としては、塩谷編1996に所収されたものを参照した。

(註2) 原文に「永享八西辰年」とあるが、実際は永享8年は「丙辰」であり、この記述自体の信憑性が問われる。

(註3) 土崎神明社では大正2年（1913）に300年祭、昭和38年（1963）に350年祭を行っており、土崎神明社の根本の創建が慶長18年（1613）、湊城跡地に社殿等が整ったのが元和6年（1620）とする説もある。（秋田市教育委員会編2002）

【引用・参考文献】

塩谷順耳他 1996 『秋田市史 第八巻 中世 史料編』 秋田市

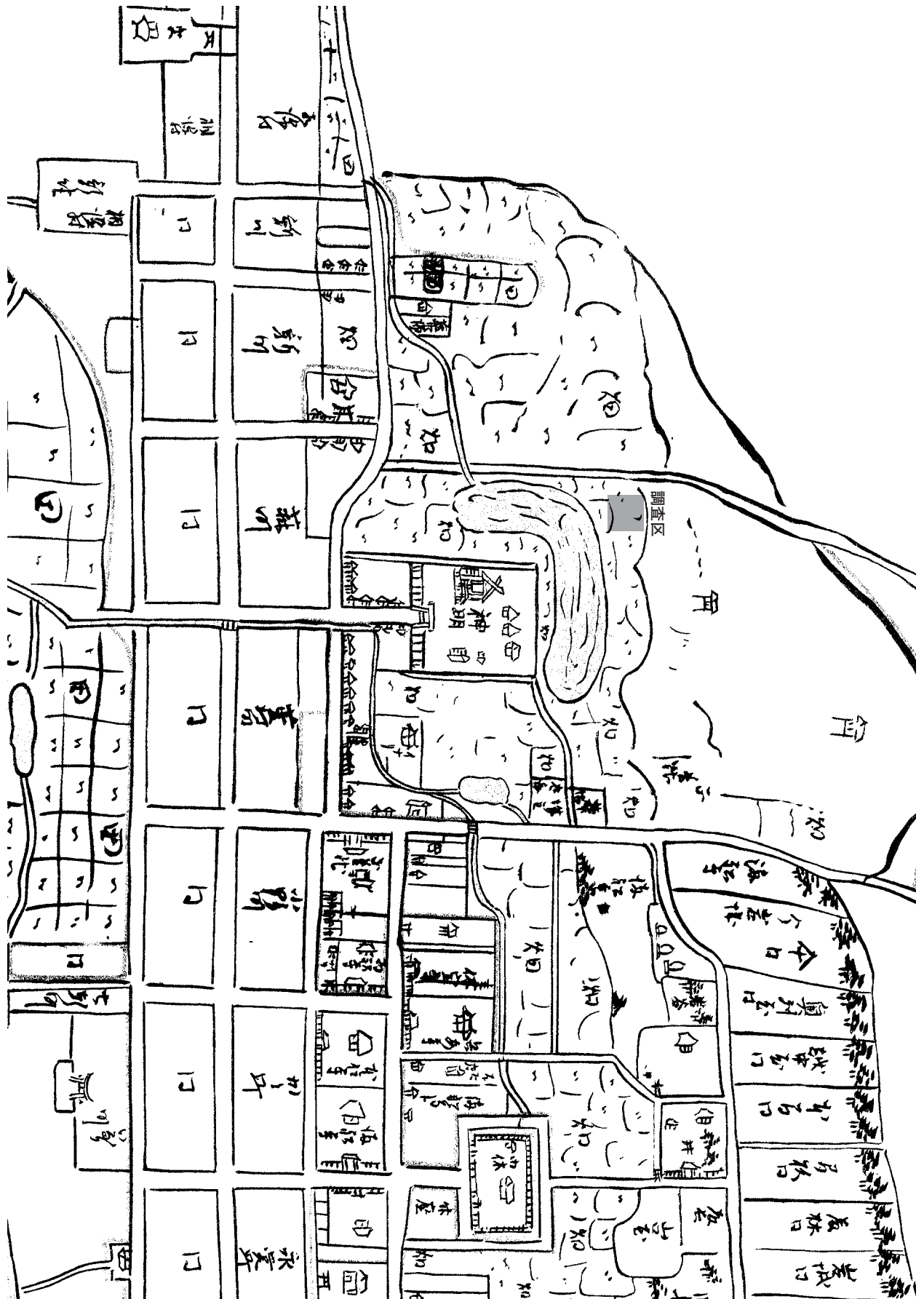
秋田市教育委員会編 1993 『土崎港祭りの曳山行事』

秋田市教育委員会編 2002 『土崎神明社の曳山行事伝承活用テキスト』

加藤助吉 1941 『土崎港町史』 秋田市役所土崎出張所

橋本宗彦 1898 『秋田沿革史大成 下』（復刻版 橋本宗彦 1973 『秋田沿革史大成 下』 加賀谷書店 所収）

進藤重記 1762 『出羽国風土略記』（進藤重記 1974 『出羽国風土略記』 歴史図書 所収）



第5図 元文年中湊古絵図（『土崎港町史』より転載）

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区に一区画4×4 mのグリッドを設定した(第7図)。グリッドの南北軸および東西軸は世界測地系に基づいている。グリッド南北軸に算用数字、グリッド東西軸に2文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の交点で両者を組み合わせてグリッド名とした。世界測地系に基づいた座標杭は5点設置し、各座標杭は下記のとおりである。

A : (X = -26,530.000 Y = -65,146.000)、B : (X = -26,526.000 Y = -65,146.000)

C : (X = -26,530.000 Y = -65,142.000)

調査区設定にあたっては、周辺への影響を考慮して境界線から約2 m離れた。また、調査区の南端に土砂運搬作業スペースを確保した。

遺物の取り上げは、グリッド名・層位名等を記録したグリッド上げを基本とし、適宜、出土地点を記録して取り上げた。遺構平面図・断面図・土層断面図は、1/20の縮尺で作成した。遺構写真は35mm版および6×7ブローニー版を使用し、モノクロフィルムおよびリバーサルフィルムで記録した。遺物は調査終了時で、55×34×15cmのコンテナ20箱で、その他一部コンテナに収容できない木製遺物がある。遺物は洗浄・接合・注記作業を行い、実測図を1/1で作成した。遺物写真は6×7ブローニー版を使用し、モノクロフィルムおよびリバーサルフィルムで撮影した。

第2節 層序 (第6、8図、図版4)

調査区の層序は下記のとおりである。

第I層(表土) 灰白色砂(2.5Y7/1)と碎石が混じる駐車場整備の造成土。

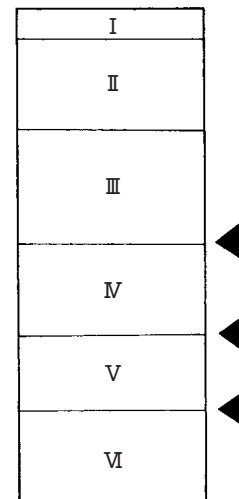
第II層(近代造成土) 黒褐色砂質土(2.5Y3/1)。

第III層(近代造成土) オリーブ褐色砂(2.5Y4/3)層、暗オリーブ褐色砂(2.5Y3/3)に炭化物が混じる層、黄褐色砂(2.5Y4/3)に黒褐色砂質土(2.5Y3/1)が混じる層、黄褐色砂(2.5Y5/3)に浅黄色砂(2.5Y7/4)が混じる層が重なり合って第III層を形成している。ガラス製品などの近代製品が混じっていることから、奥羽本線土崎駅が開業した明治30年代の大規模造成と考えられる。

第IV層(江戸時代以降の整地層) 灰黄褐色砂(10YR4/2)に炭化物が混じる。江戸時代以降の遺物が出土している。

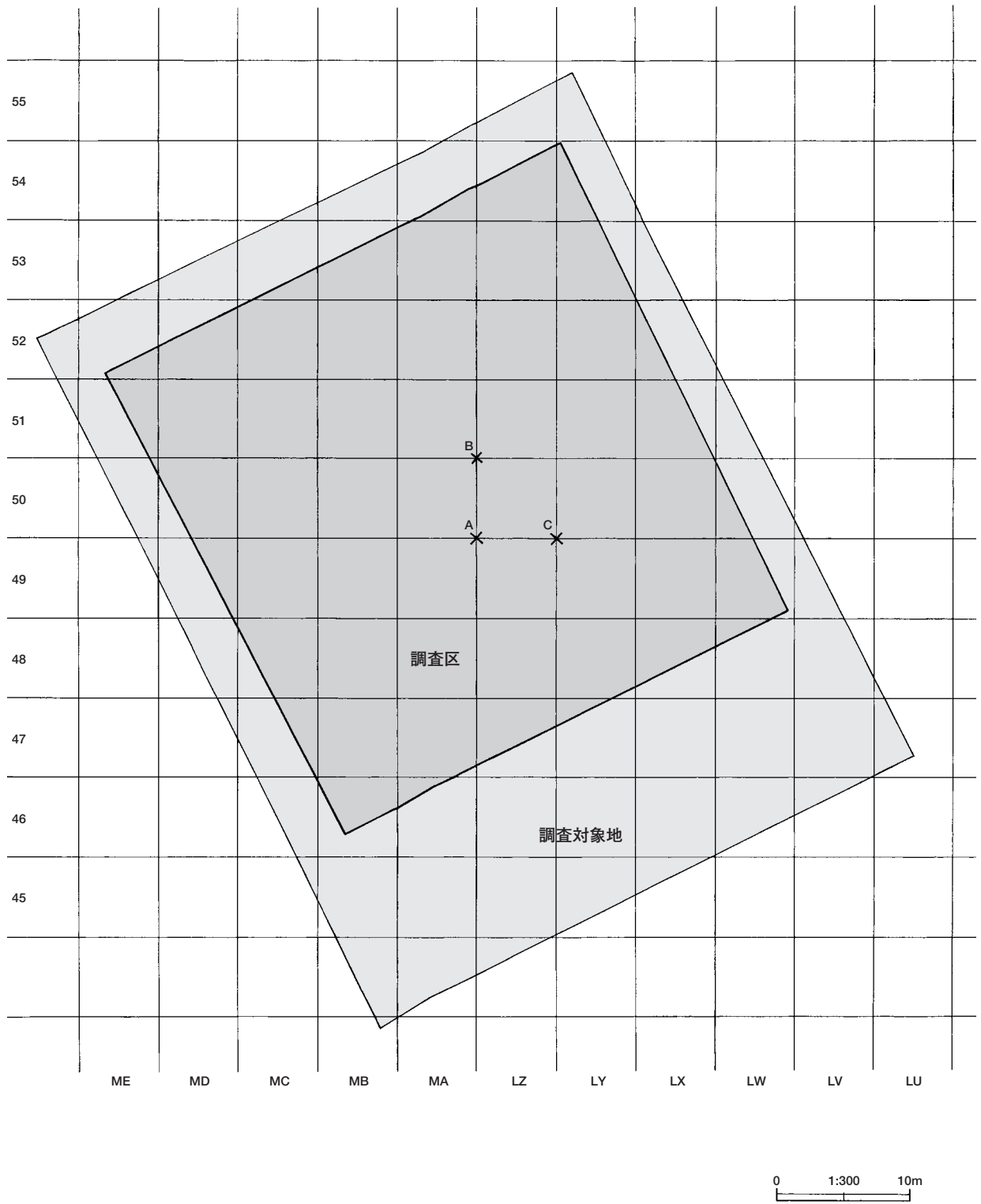
第V層(江戸時代の整地層) 明黄褐色砂(10YR6/6)に灰黄褐色砂(10YR4/2)が混じる。江戸時代の遺構・遺物が確認された。

第VI層(地山) 明黄褐色砂(10YR6/6)。江戸時代の遺構・遺物が確認された。

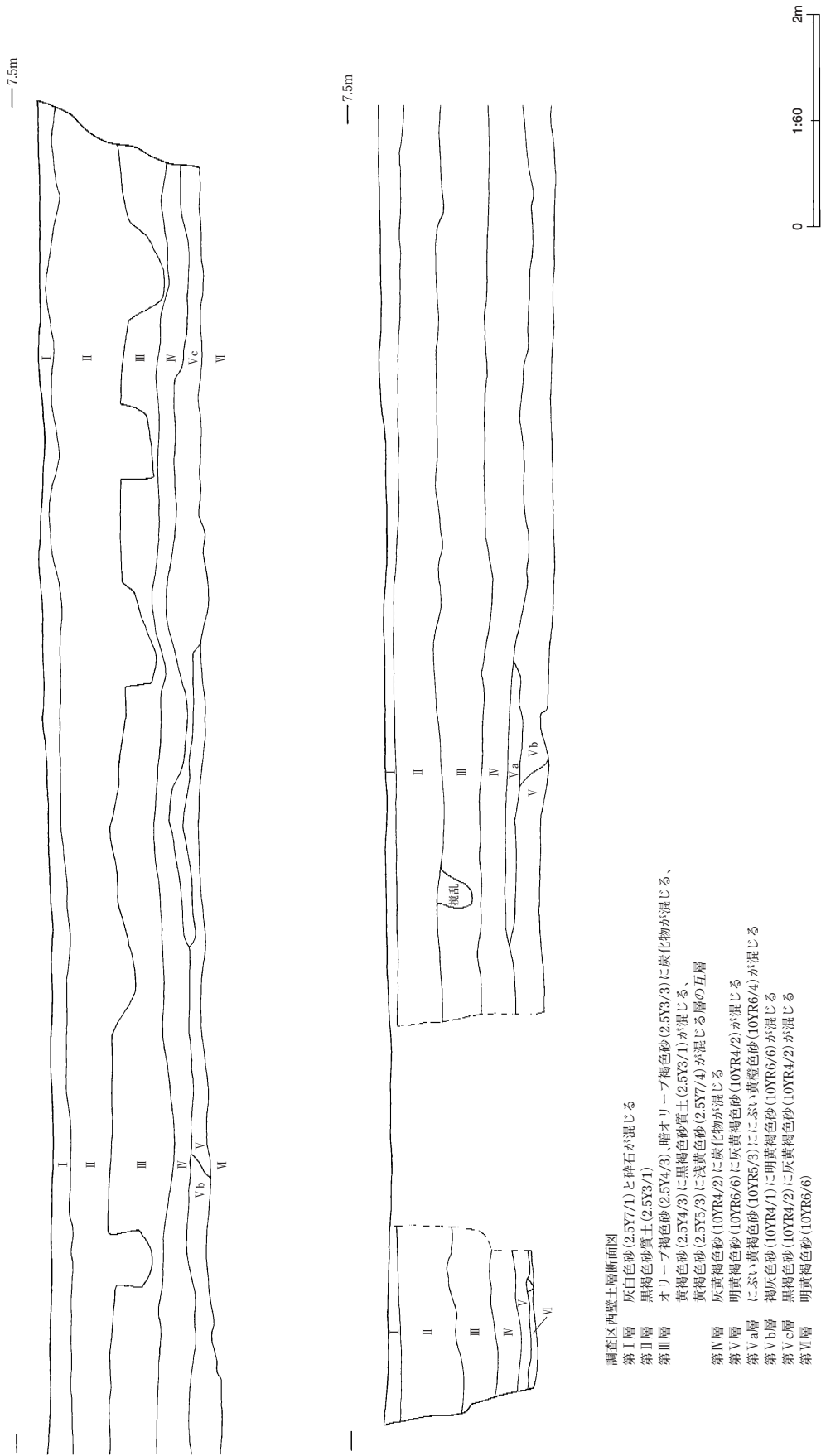


第6図 基本層序柱状図

遺構は、第IV、V、VI層の3面で確認され、各層は人為的に造成された近世の整地層で、50～55cmの堆積が認められる。



第7図 グリッド配置図



第8図 調査区西壁土層断面図

第3節 遺構と遺物

遺構は第Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ層の3面で確認された(第9、13、22図)。以下、各層ごとに検出された遺構・遺物について述べる。

(1) 第Ⅳ層面検出の遺構・遺物

第Ⅳ層面からは、柱列1条(SA01)、井戸状遺構1基(SE01)、土坑1基(SK01)、桶埋設遺構1基(SX01)、畝道(SX02)、畝跡(SX03)、人骨2体(SX04、05)が検出された。また、遺物は遺構内および第Ⅳ層から陶磁器・土製品・瓦・木製品・金属製品・銭貨などが出土した。

柱列

1号柱列(第10図、図版5)

調査区南側で検出した。南北方向の柱列で、溝の底面に8個のピットが確認され、南側は調査区外に延びる。柱間は不均等で、柱掘り方の直径は30~50cm、確認面からの深さ8~21cmである。数個の掘り方から植物腐植痕が確認され、杭と推測される。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は明治時代前期と考えられる。

出土遺物

陶磁器(第26図1、図版10):1は埋土出土である。産地不明の磁器染付碗で、口縁部内外面に型紙刷りで染め付けている。

金属製品(第35図1、図版19):1は埋土出土で、鉄製の折釘である。

井戸状遺構

1号井戸状遺構(第11図、図版5)

調査区中央部で検出した。掘り方平面形は楕円形を呈し、規模は長軸4.8m、短軸3.2mで、確認面からの深さは75cmである。壁は北西側を除いてやや急に立ち上がり、北西側は一段高い部分が平坦で、再び緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。掘り方は中央部で北東部と南西部の2カ所に分けられ、両方の掘り方から木材を確認したが、北東部は材を組んでいた形跡が認められる。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は明治時代前期と考えられる。

出土遺物

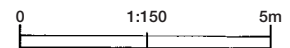
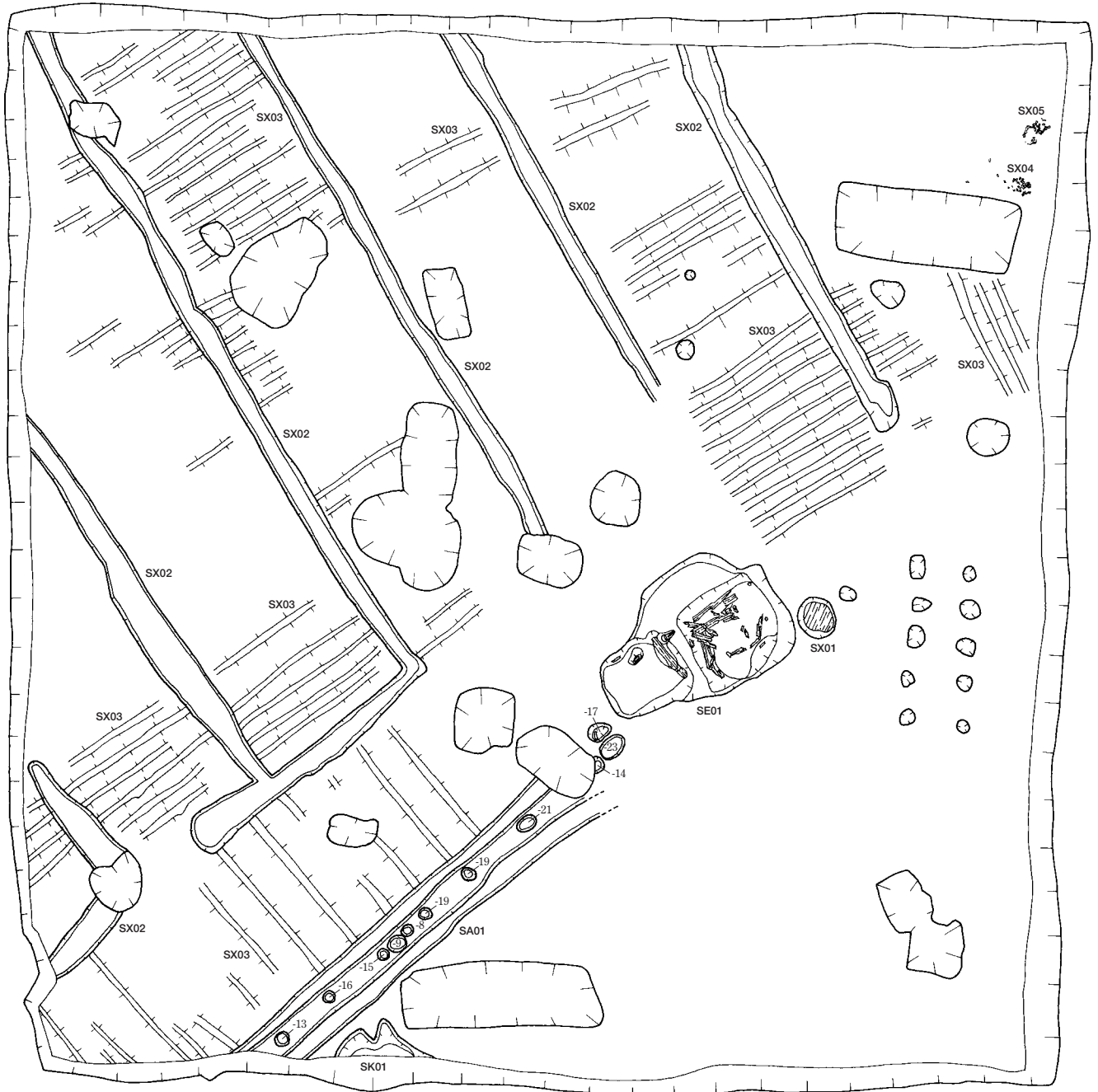
陶磁器(第26図2~5、図版10):2~5は埋土出土である。2は産地不明の陶器壺もしくは甕で、内外面に鉄釉を施している。3は瀬戸美濃系磁器染付小碗で、内外面に西洋コバルトで霊芝文を染め付けている。4は肥前系磁器染付小皿で、見込みに「大明成化年製」銘を染め付けている。5は肥前系磁器染付端反り碗蓋である。

瓦(第33図1、図版19):1は埋土出土である。棧瓦で、暗赤褐色を呈する赤瓦である。針穴が1カ所認められる。

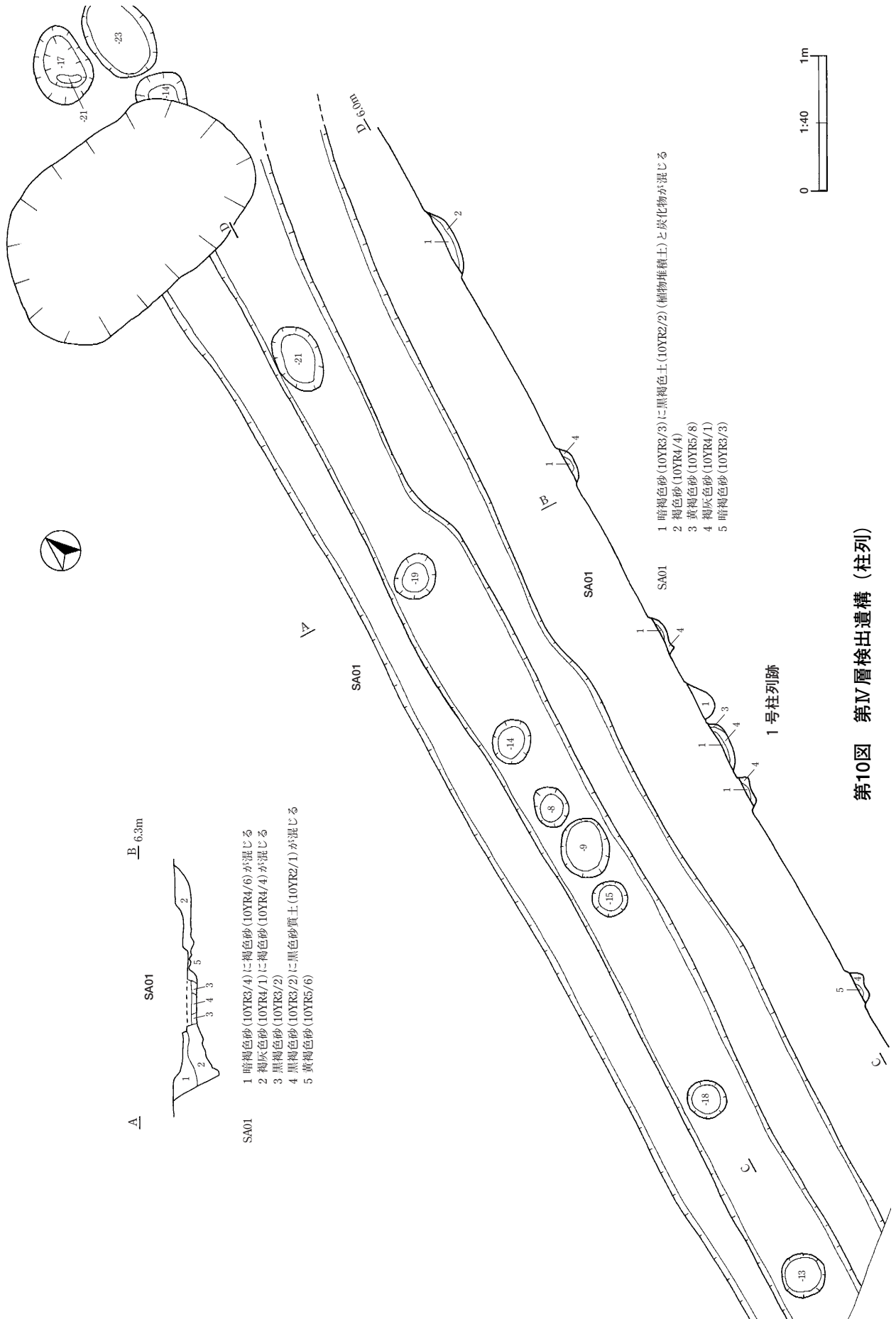
金属製品(第35図2、図版19):2は埋土出土で、鉄製の皆折釘である。

桶埋設遺構

1号桶埋設遺構(第11図、図版5)

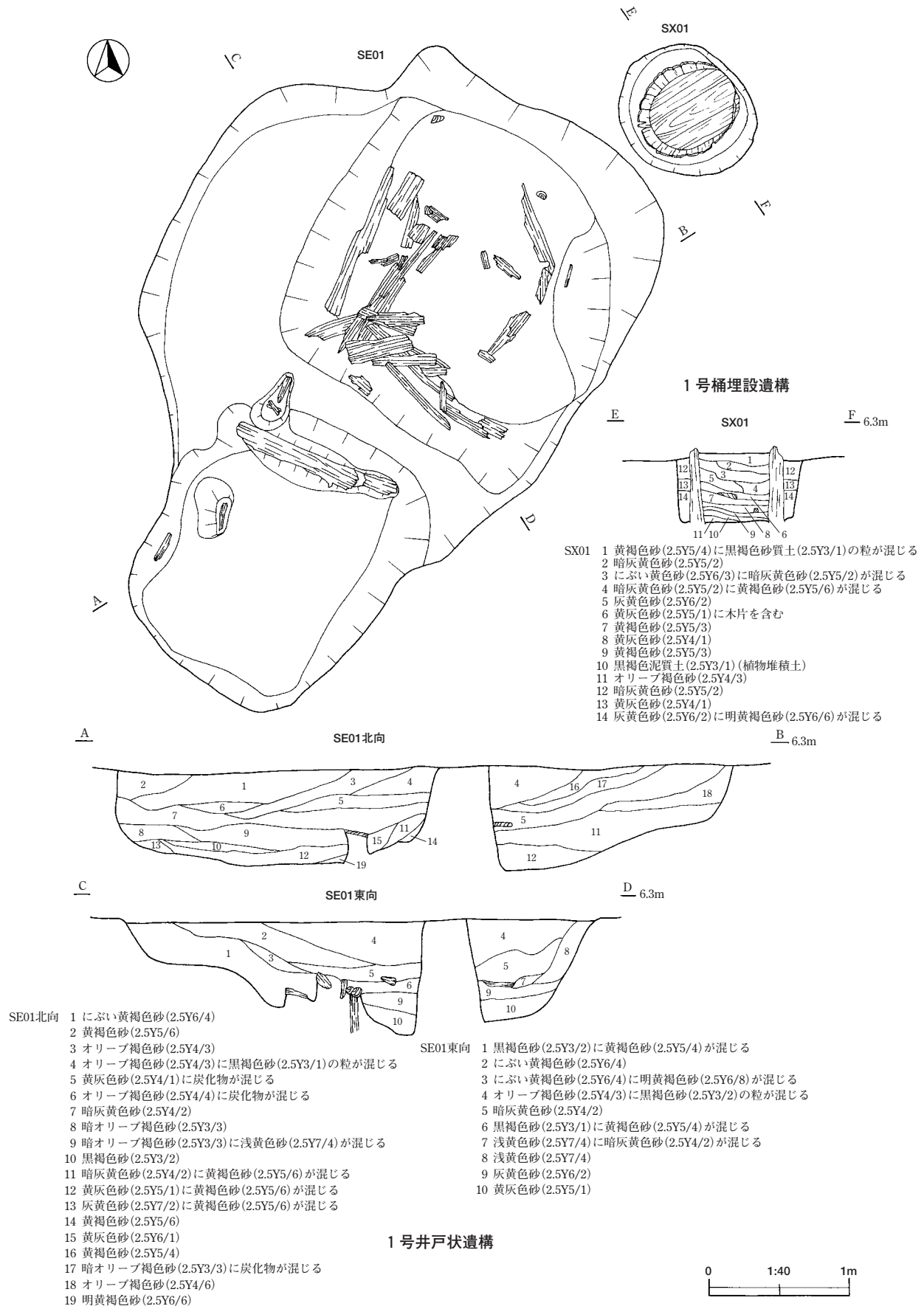


第9図 第IV層遺構全体図



第10図 第IV層検出遺構(柱列)

第3章 調査の方法と成果
 (1) 第IV層面検出の遺構・遺物

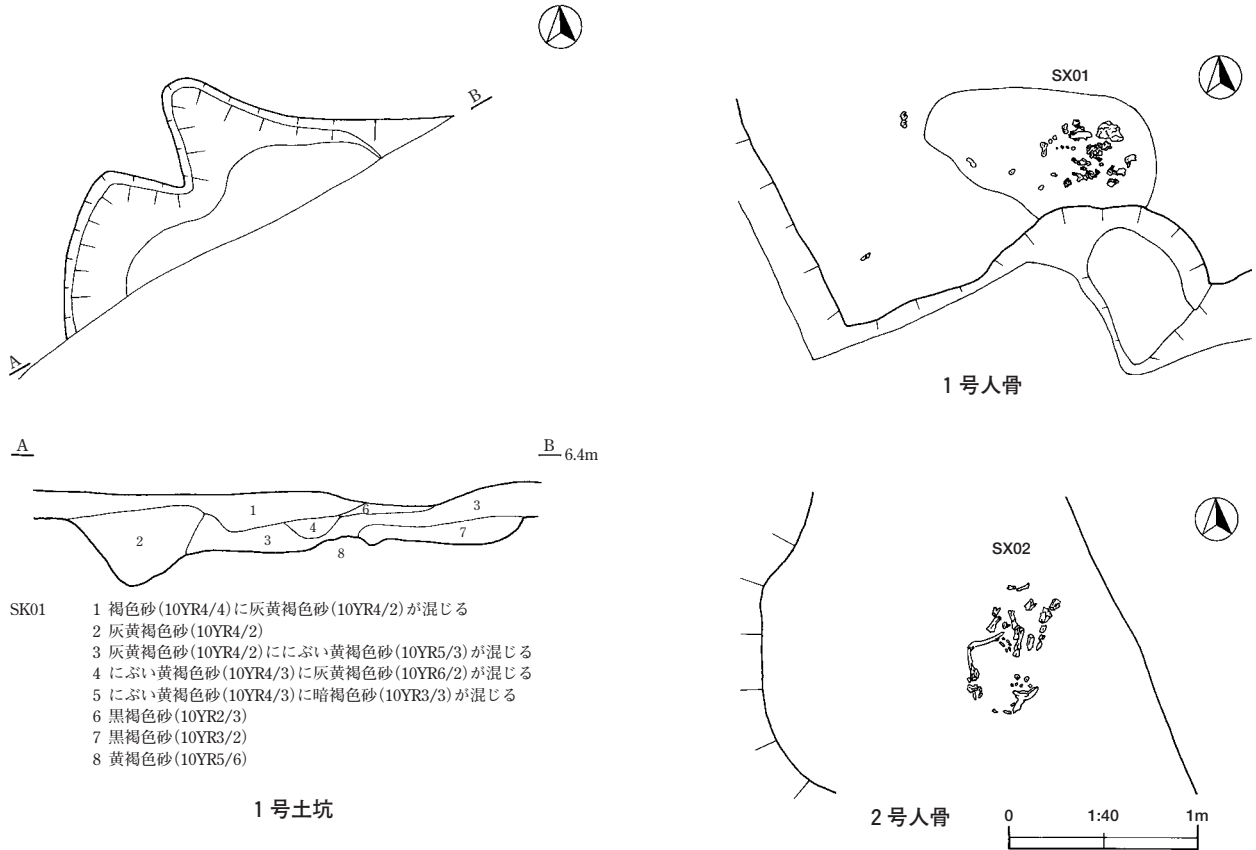


第11図 第IV層検出遺構(井戸状遺構、埋設桶)

調査区中央部東側で検出した。掘り方平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.0m、短軸0.9mで、確認面からの深さは55cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。内部には長軸65cm、短軸50cm、深さ55cmの桶が埋設されている。桶の底部で植物の種を検出したが、種類は不明である。遺構検出状況から、1号井戸状遺構と同時期に構築されたと考えられる。

出土遺物

木製品 (第34図1、図版19) : 1は埋土出土である。桶の底板で、木釘で組んでいた。



第12図 第IV層検出遺構(土坑、人骨)

土坑

1号土坑(第12図、図版5)

調査区南側の壁沿いで検出した。掘り方平面形は不明で、南東側は調査区外に延びる。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

畝跡(第9図、図版5)

調査区の東側を除いたほぼ全域で検出した。畝跡は北東～南西方向と北西～南東方向の2種類が認められ、規模は長さ3.5～4.0m、幅28～35cm、確認面からの深さ6～7.5cmで、断面形はU字状を呈する。畝道は畝跡を区切るように検出した。規模は幅50～85cm、確認面からの深さ約10cmである。検出状況から同時期に構築されたと考えられ、出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀代と考えられる。

出土遺物

陶磁器(第26図6～10、図版10) : 6～10は埋土出土である。6は肥前系青磁染付碗である。7は肥前系磁器染付皿で、底部は蛇ノ目凹型高台で、内面に牡丹文を染め付けている。8は肥前系磁器染付

第3章 調査の方法と成果
(1) 第Ⅳ層面検出の遺構・遺物

皿で、蛇ノ目釉剥ぎを施している。9は肥前系磁器染付蓋物である。10は肥前系磁器色絵油壺で、外面に瑤瑤文を施している。

人骨

1号人骨（第12図、図版5）

調査区の北側隅、標高6.7m、地表面から深さ95cmの所で検出したが、掘り方は不明である。部位は頭骨部分が確認できたのみで、埋葬は直葬と考えられる。副葬品は検出されない。

2号人骨（第12図、図版5）

調査地の北側隅の1号人骨と近接した場所で検出した。標高6.6m、地表面から深さ105cmで、掘り方は不明である。埋葬方法は屈葬で、直葬である。副葬品は検出されない。

第Ⅳ層出土遺物

陶磁器（第26、27図、図版10、11）

[陶器] 11～13は陶器である。

（碗類）11は産地不明の陶器碗である。

（皿類）12は肥前系陶器色絵皿である。

（火入）13は産地不明の陶器火入で、外面と口縁部に鉄釉を施している。

[磁器] 14～21は磁器である。

（碗類）14は肥前系磁器染付碗で、外面に矢羽根文を染め付けている。

（皿類）15～17は肥前系磁器染付皿である。15は見込にコンニャク印判で花葉文を染め付けている。

16と17は蛇ノ目釉剥ぎを施している。18は中国産磁器染付皿である。19は産地不明の磁器染付小皿で、内面に松文を染め付けている。

（猪口）20、21は産地不明の磁器染付猪口である。20は裏銘と高台に橢圓文を染め付けている。21は口紅を施している。

[その他] 22は窯道具のハマである。

陶磁器の年代は、おおむね18世紀～19世紀であり、第Ⅳ層はこの時期に形成された整地層と考えられる。

土製品（第33図、図版18）

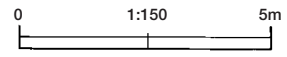
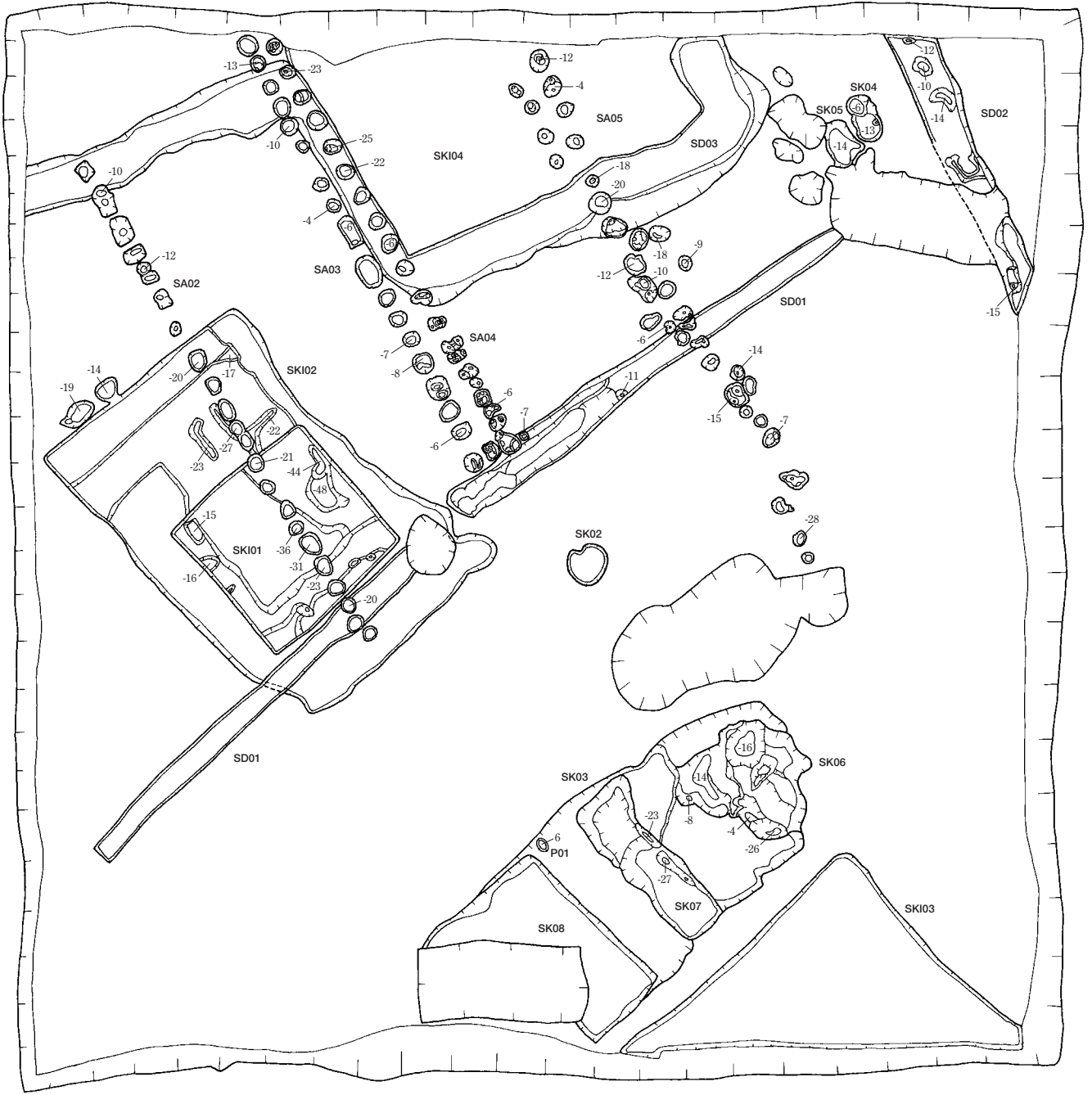
1は鳥形の泥面子である。

金属製品（第35図、図版19）

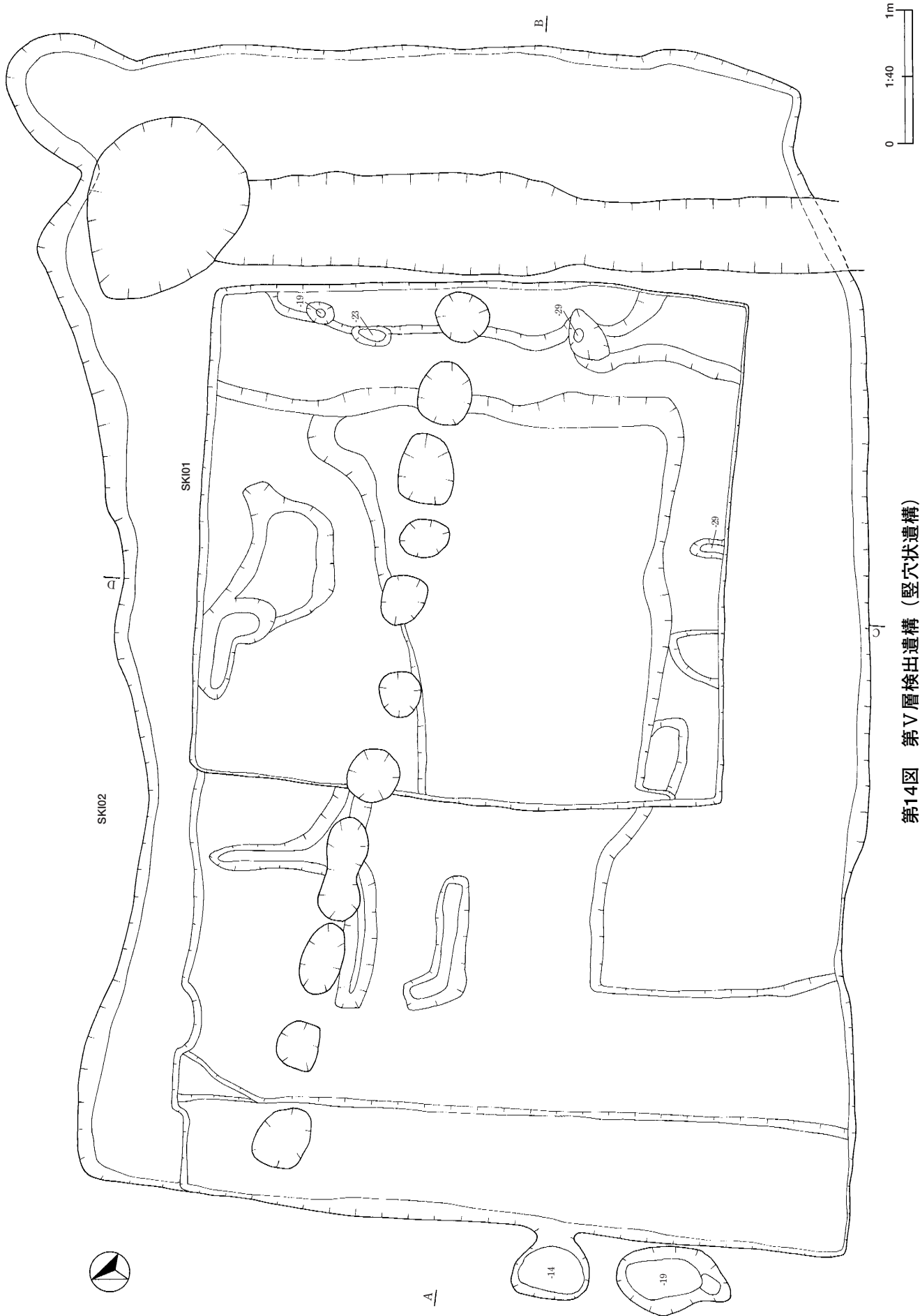
3は銅製の煙管雁首である。4は用途不明の鉄製品である。

銭貨（第35図、図版19）

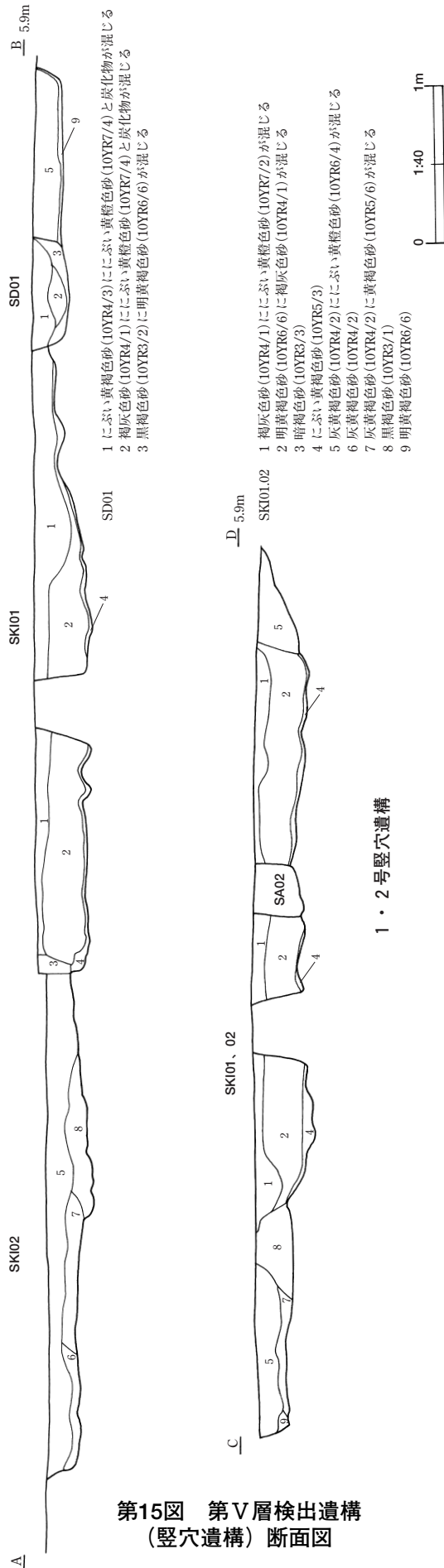
1～6は銅製、7は鉄製の寛永通寶である。銭文の書体等から、1は新寛永通寶の「背元銭」、2、3、6は新寛永通寶、5は新寛永通寶の「背十一波銭」の分類に該当する。4、7は不明である。



第13図 第Ⅴ層遺構全体図



第14図 第V層検出遺構（竪穴状遺構）



第15図 第V層検出遺構
(竪穴遺構)断面図

(2) 第V層面検出の遺構・遺物

第V層面からは、竪穴遺構4基(SKI01~04)、柱列4条(SAO2~05)、溝跡3条(SD01~03)、土坑7基(SK02~08)、ピット1個(P01)が検出された。また、遺物は遺構内および整地層である第V層から、陶磁器・土製品・瓦・金属製品・銭貨が出土した。

竪穴遺構

1号竪穴遺構(第14、15図、図版6)

調査区中央西側で検出した。掘り方平面形はほぼ方形で、1辺約4.0m、確認面からの深さ35cmである。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。2号柱列と重複し、これより古い。

出土遺物

陶磁器(第27図23、図版11)：23は埋土出土で、中国産磁器染付皿である。

2号竪穴遺構(第14、15図、図版6)

調査区中央西側で検出した。掘り方平面形は長方形で、規模は長軸9.0m、短軸5.7m、確認面からの深さ25cmである。壁は北側のみ緩やかに立ち上がり、他は急に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。1号竪穴遺構および2号柱列と重複し、それより古い。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は18世紀前期と考えられる。

出土遺物

陶磁器(第27図24~29、図版11、12)：24~29は埋土出土である。24は産地不明の陶器碗である。25は肥前系陶器鉢もしくは甕で、内外面に鉄釉を施し、外面では白釉の上に鉄釉を重ねている。26は産地不明の陶器で器種不明である。27、28は肥前系磁器染付碗で、28は高台内に「大明年製」銘を染め付けている。29は肥前系磁器染付紅皿で、見込みに銘を染め付けている。

土製品(第33図2、図版19)：2は埋土出土で、土師質の土錘である。

3号竪穴遺構（第16図、図版6）

調査区西側の壁沿いで検出し、西側および南側は調査区外に延びる。掘り方平面形は長方形と考えられる。確認面からの深さ28cmで、壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀前期と考えられる。

出土遺物

陶磁器（第27、28図30～39、図版12、13）：30～39は埋土出土である。30は産地不明の陶器碗で、外面に刷毛目文を施している。31は産地不明の陶器壺で、外面に鉄釉を施している。32は産地不明の陶器壺もしくは甕で内外面に鉄釉を施している。33は産地不明の陶器土瓶である。34は肥前系磁器染付碗で、外面に菊花文、内面口縁に四方襷文を染め付けている。35は肥前系磁器染付湯飲み碗である。36は肥前系磁器染付皿で、高台内に「宣徳年製」銘を染め付けている。37は肥前系白磁皿で、蛇ノ目釉剥ぎを施している。38は中国産磁器染付皿である。39は産地不明の青磁土瓶である。

瓦（第33図、図版19）：2は埋土出土である。軒棧瓦で、暗赤褐色を呈する赤瓦である。

4号竪穴遺構（第17図、図版6）

調査区北西側の壁沿いで検出し、北西側は調査区外に延びる。掘り方平面形は長方形と考えられる。確認面からの深さ20cmで、底面は平坦である。底面から直径32～64cm、確認面からの深さ22～33cmのピットを14個検出した。4号竪穴遺構の南西部と中央部において、北西～南東方向の列を組んでいる。

出土遺物

銭貨（第35図8、図版19）：8は埋土出土で、銅銭の寛永通寶である。銭文の書体等から新寛永通寶の分類に該当する。

柱列

2号柱列（第13図、図版6）

調査区中央西側で検出した。北西～南東方向の柱列で、23個のピットを確認した。柱間は不均等で、柱掘り方の直径は35～68cm、確認面からの深さ10～31cmである。1、2号竪穴遺構および1号溝跡と重複し、それらより新しい。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀と考えられる。

出土遺物

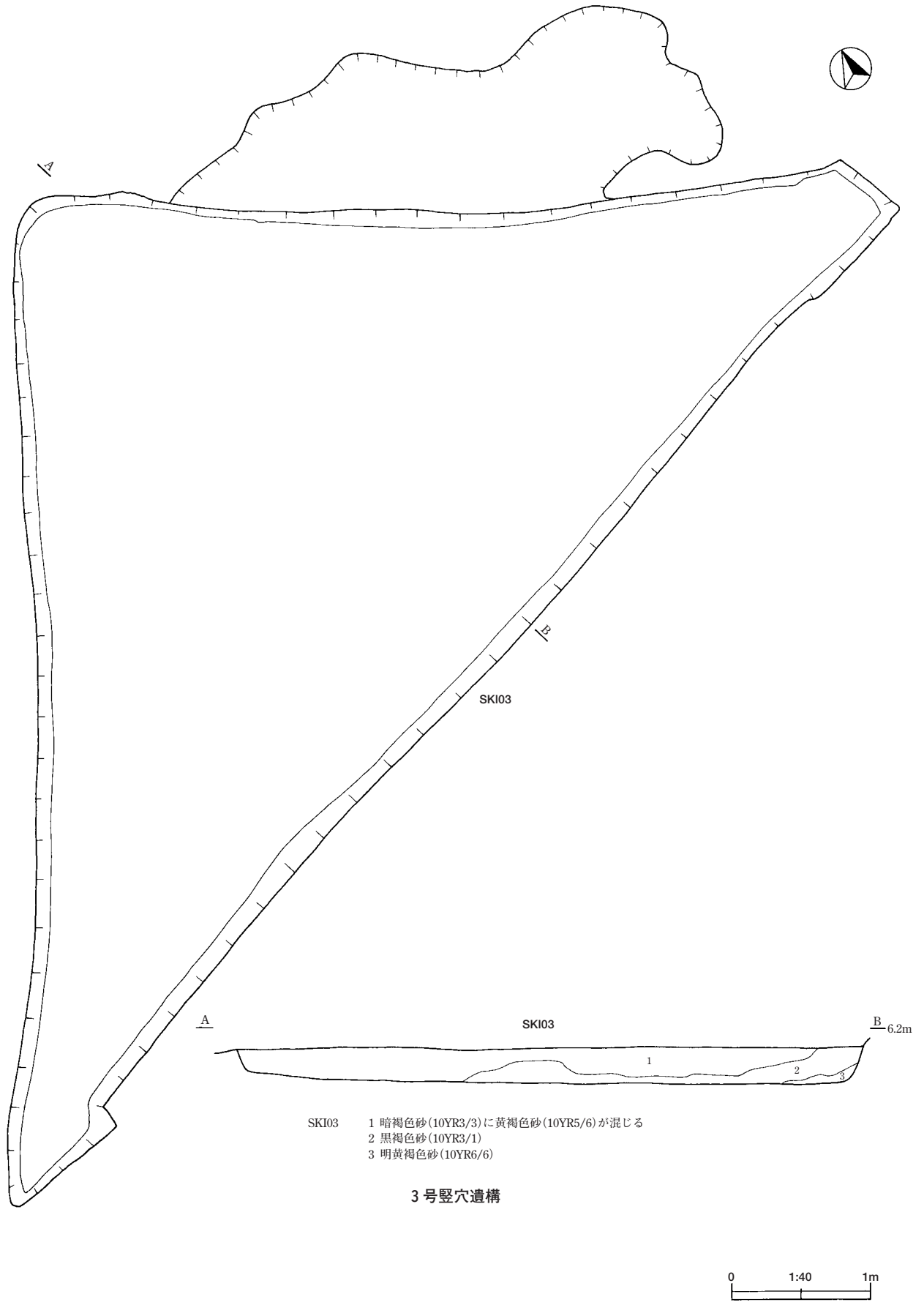
陶磁器（第28図40～43、図版13）：40～43は埋土出土である。40は産地不明の陶器小碗である。41、42は産地不明の陶器土瓶である。43は肥前系磁器染付碗で、外面に雪輪梅花文を染め付けている。

3号柱列（第13図、図版6）

調査区中央西側、2号柱列の北側で検出し、北西側は調査区外に延びる。北西～南東方向の柱列で、18個のピットを確認した。柱間は不均等で、柱掘り方の直径は29～81cm、確認面からの深さ6～13cmである。3号溝跡と重複し、それより新しい。

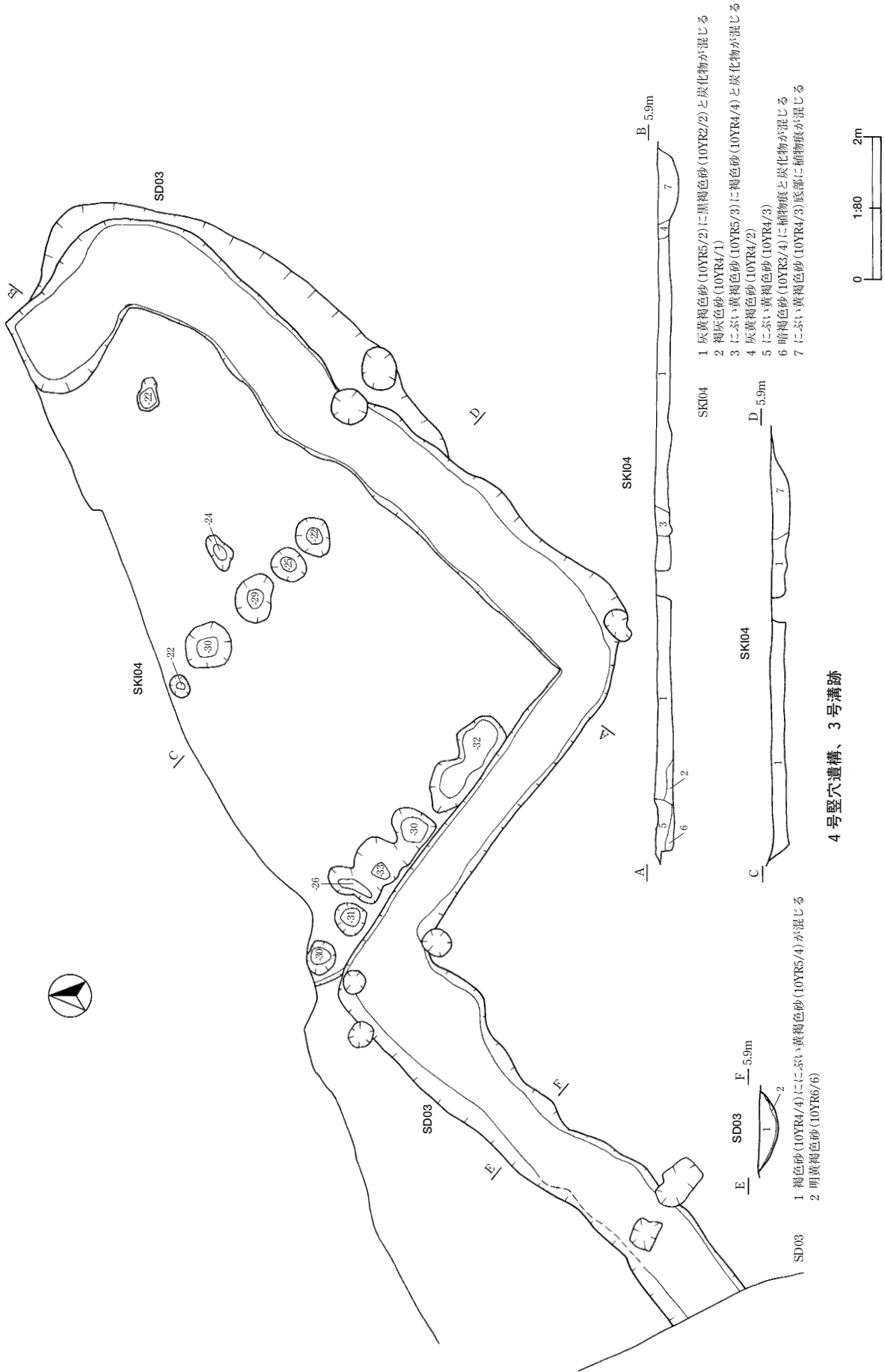
出土遺物

銭貨（第35図9、図版19）：9は埋土出土で、銅銭の寛永通寶である。銭文の書体等から新寛永通寶の分類に該当する。



第16図 第V層検出遺構（竖穴遺構）

第3章 調査の方法と成果
 (2) 第V層面検出の遺構・遺物



第17図 第V層検出遺構(竖穴遺構、溝跡)

4号柱列 (第13図、図版6)

調査区中央西側、3号柱列の北側で、それと平行するように検出され、北西側は調査区外に延びる。北西～南東方向の柱列で、20個のピットを確認した。柱間は不均等で、柱掘り方の直径は33～65cm、確認面からの深さ6～25cmである。1、3号溝跡と重複し、それらより新しい。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀と考えられる。

出土遺物

陶磁器 (第28図44、図版13) : 44は埋土出土である。肥前系磁器紅皿で、押し型成形である。

5号柱列 (第13図、図版7)

調査区中央北側、4号柱列の北側で検出し、北西側は調査区外に延びる。北西～南東方向の柱列で、34個のピットを確認した。柱間は不均等で、柱掘り方の直径は28～66cm、確認面からの深さ6～28cmである。4号竪穴遺構および1、3号溝跡と重複し、それらより新しい。

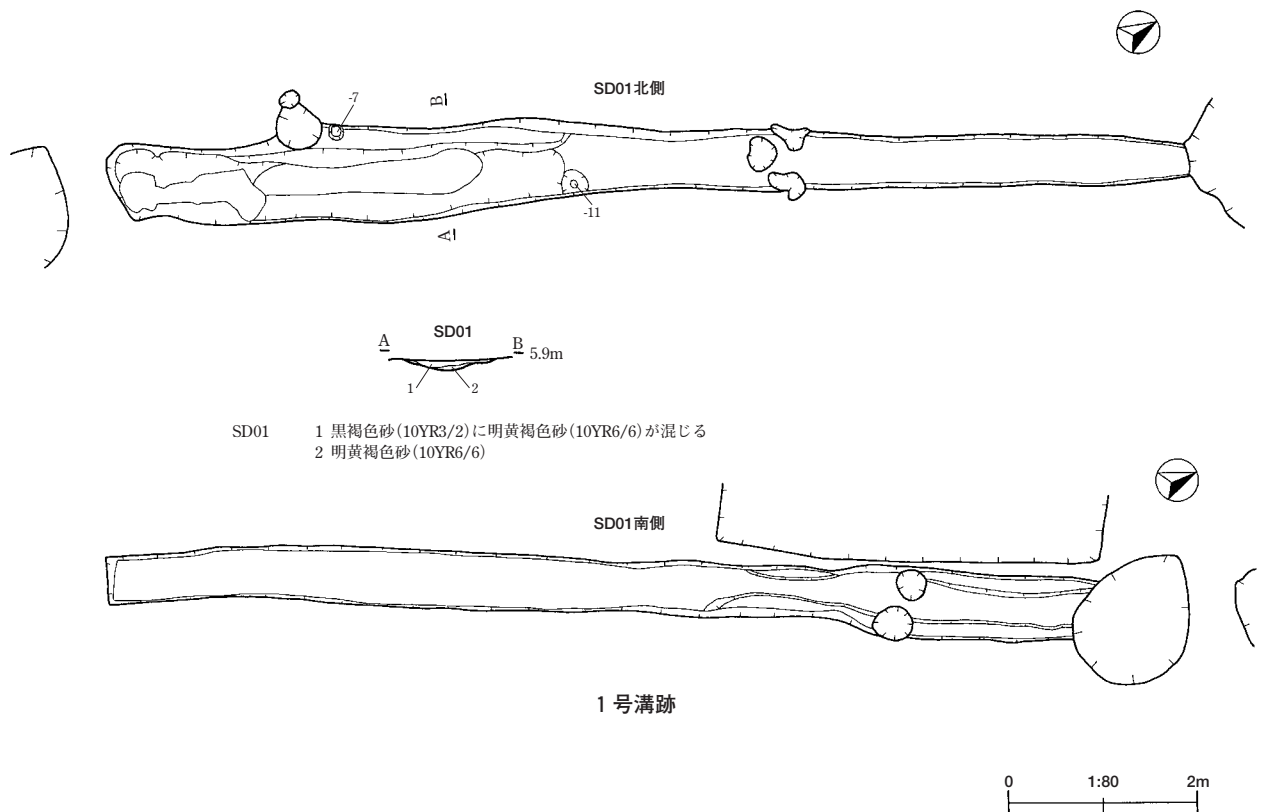
出土遺物

陶磁器 (第28図45、図版13) : 45は埋土出土の肥前系磁器染付碗である。

溝跡

1号溝跡 (第18図、図版7)

調査区中央部で検出した。南北方向の溝で、長さ約22m、幅56～100cm、確認面からの深さ11～19cmで、断面形はU字状を呈し、調査区中央部で途切れる部分がある。2号竪穴遺構および2～5号柱



第18図 第V層検出遺構 (溝跡)

列と重複し、2号竪穴遺構より新しく、2～5号柱列より古い。

2号溝跡（第19図、図版7）

調査区北側で検出した。北西～南東方向の溝で、調査区外に延びる。幅0.75～1.05m、確認面からの深さ約13～18cmで、断面形はU字状と鍋底状を呈する部分がある。

出土遺物

金属製品（第35図5、図版19）：5は埋土出土で、用途不明の鉄製品である。

3号溝跡（第17図、図版7）

調査区北東側で検出した。4号竪穴遺構を囲むように確認され、北側と西側で調査区外に延びる。幅1.1～1.4m、確認面からの深さ26～28cmで、断面形は壁が緩やかに立ち上がるU字状を呈する。4号竪穴遺構と隣接し、検出状況からほぼ同時期に構築されたと考えられる。また、底部に植物堆積痕が確認できる。5号柱列と重複し、これより古い。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は18世紀と考えられる。

出土遺物

陶磁器（第28図46～49、図版13、14）：全て埋土出土である。46は産地不明の陶器壺である。47は肥前系陶器壺もしくは甕で、二彩唐津である。48は産地不明の陶器色絵土瓶蓋である。49は肥前系磁器染付変形皿で、押し型成形である。内面に型紙刷りで染め付けている。

土坑

2号土坑（第19図、図版8）

調査区中央で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸1.0m、短軸0.9m、確認面からの深さ20cmである。壁はやや急に立ち上がり、断面形は鍋底状を呈する。

3号土坑（第20図、図版8）

調査区東側で検出し、南側は調査区外に延びる。平面形は楕円形で、規模は長軸7.8m以上、短軸4.5m、確認面からの深さ約25cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。6～8、12号土坑および1号ピットと重複し、それらより新しい。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀と考えられる。

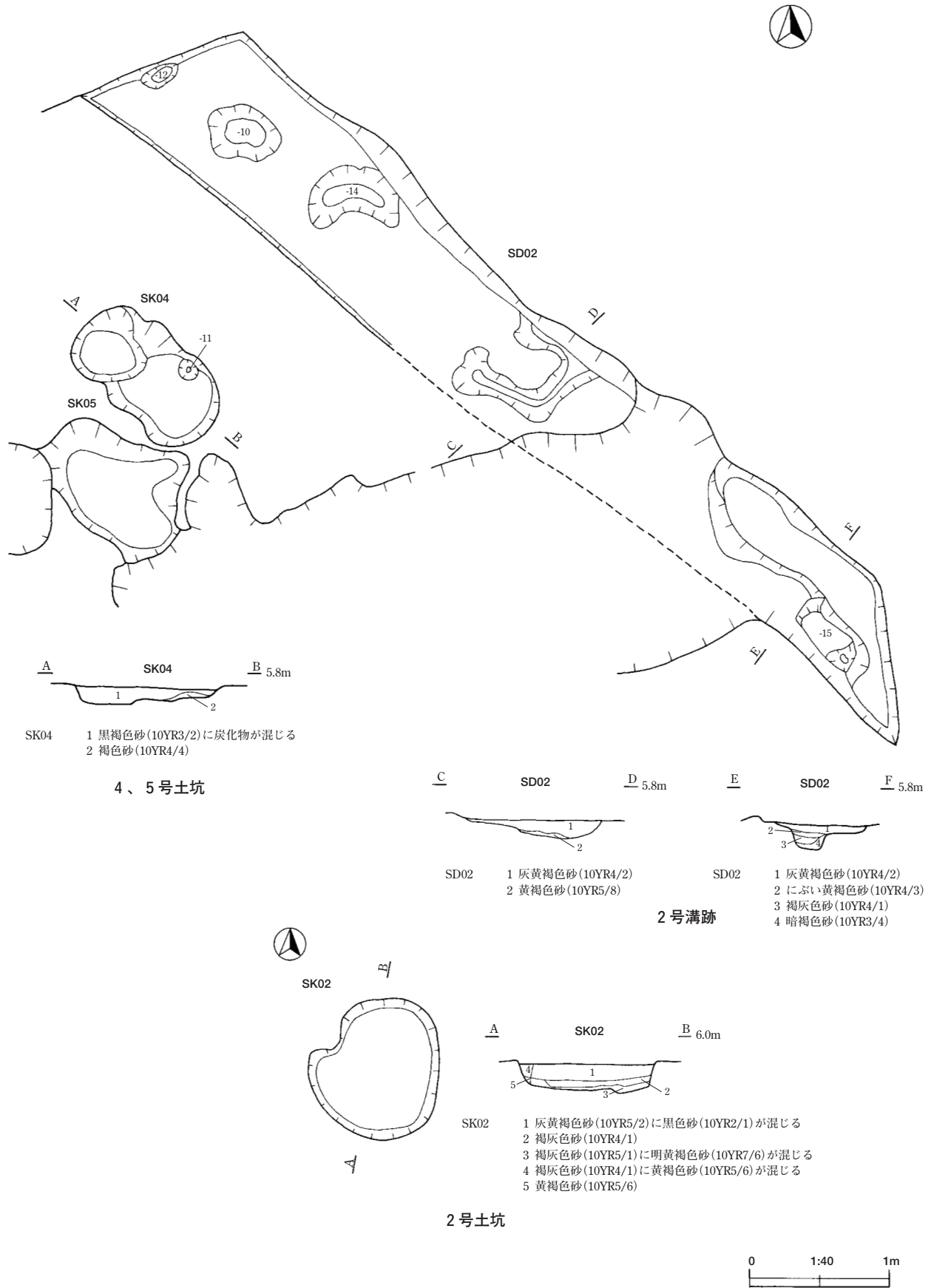
出土遺物

陶磁器（第28図50～53、図版14）：全て埋土出土である。50、51は肥前系磁器染付皿で、50は見込みに山水文を染め付けている。52は産地不明の磁器染付段重である。53は産地不明の磁器染付土瓶蓋である。

4号土坑（第19図、図版8）

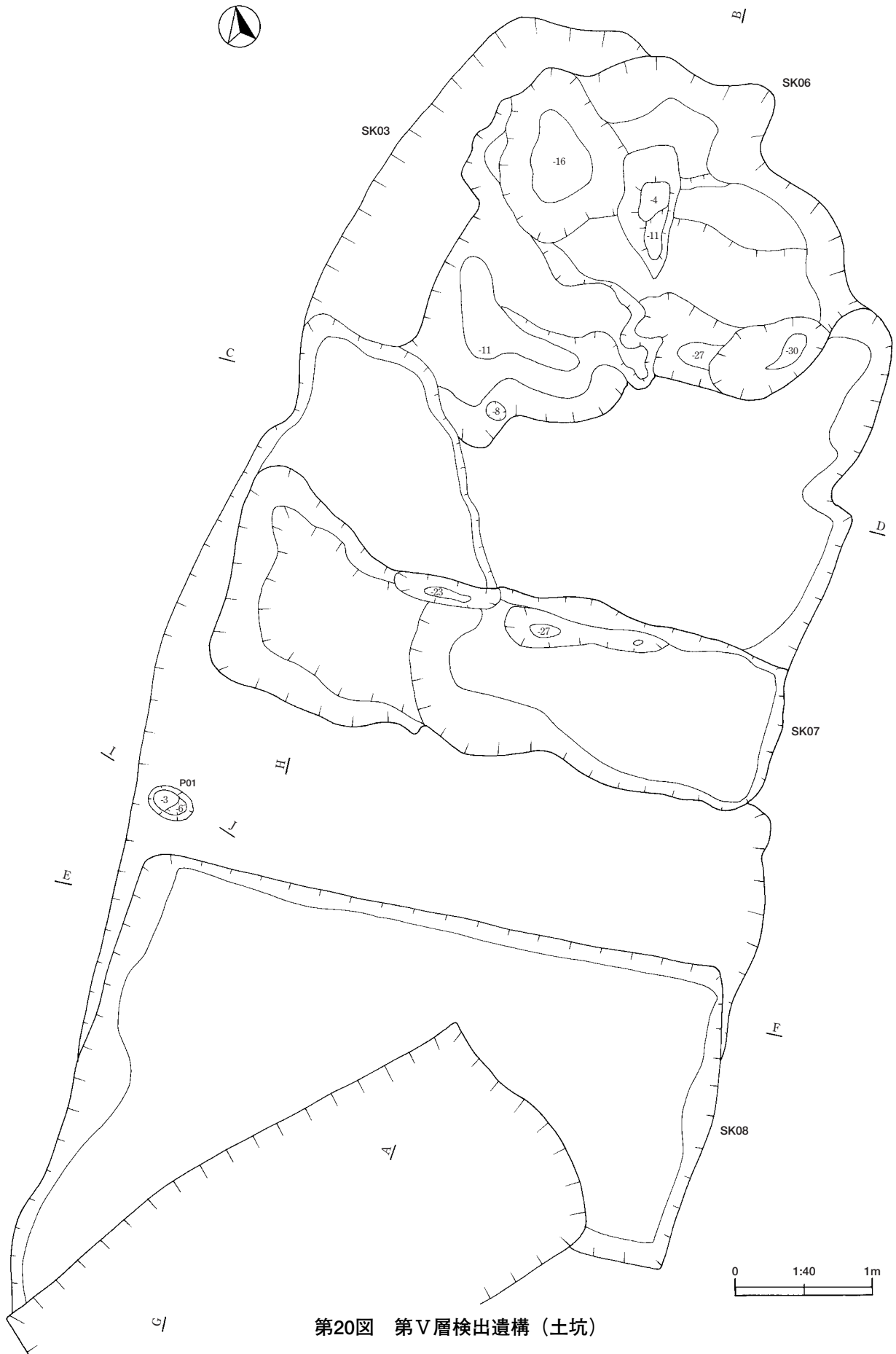
調査区北側で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸1.15m、短軸0.65m、確認面からの深さ13cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

出土遺物

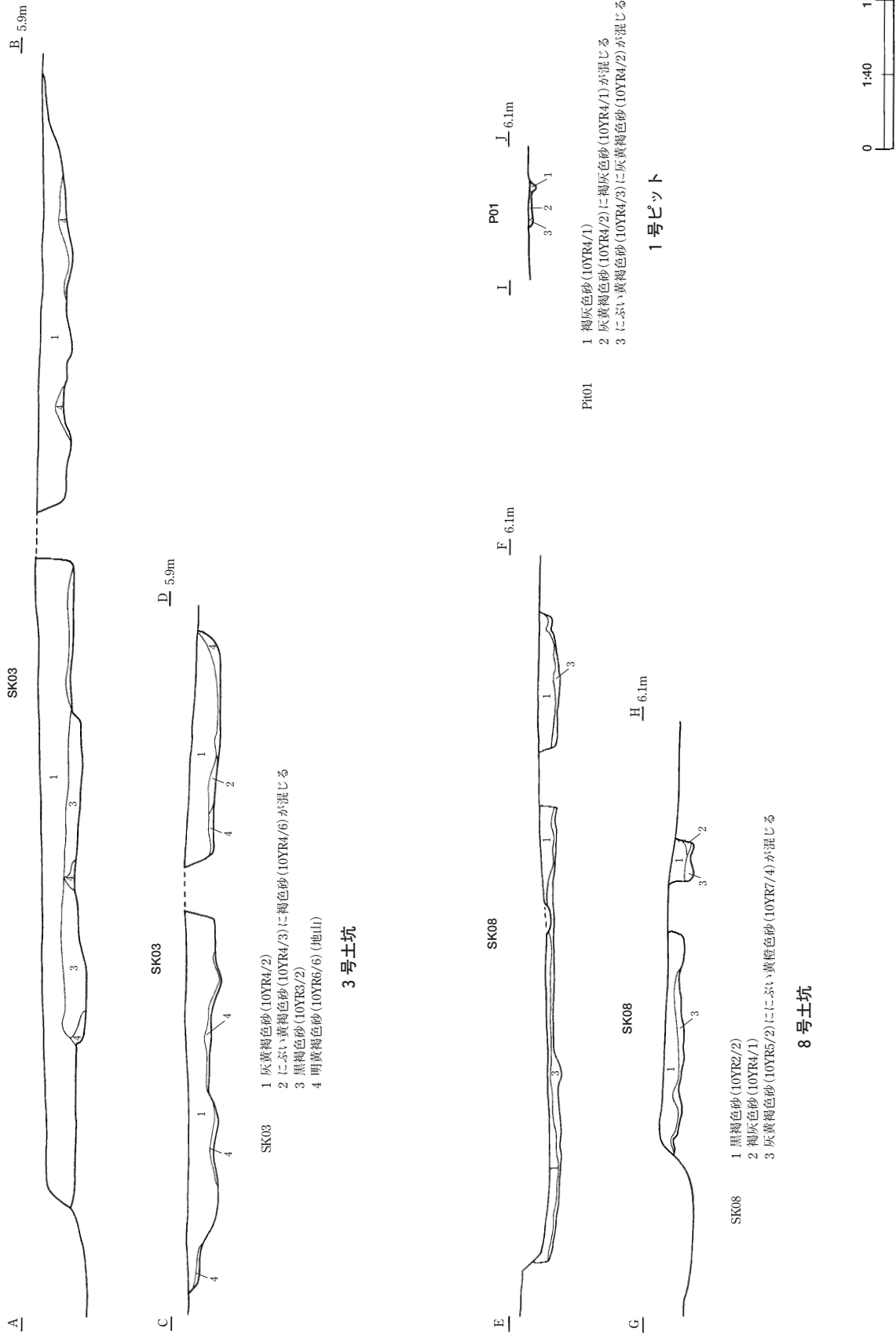


第19図 第V層検出遺構(溝跡、土坑)

第3章 調査の方法と成果
(2) 第V層検出の遺構・遺物



第20図 第V層検出遺構（土坑）



第21図 第V層検出遺構(土坑)断面図

第3章 調査の方法と成果
(2) 第V層面検出の遺構・遺物

陶磁器 (第29図54、図版14) : 54は埋土出土で、産地不明の陶器壺もしくは甕である。内外面に鉄釉を施している。

5号土坑 (第19図、図版8)

調査区北側で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸1.15m、短軸0.85m、確認面からの深さ14cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

6号土坑 (第20図、図版8)

調査区東側で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸3.2m、短軸2.3m、確認面からの深さ11～30cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が激しい。3号土坑と重複し、それより古い。

7号土坑 (第20図、図版8)

調査区東側で検出した。平面形は長方形で、規模は長軸4.1m以上、短軸1.2m、確認面からの深さ30cmである。壁はやや緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。3号土坑と重複し、それより古い。

8号土坑 (第20図、図版8)

調査区東側で検出し、南側は調査区外に延びる。平面形は長方形で、規模は長軸4.5m、短軸3.5m以上、確認面からの深さ16cmである。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。3、12号土坑と重複し、3号土坑より古く、12号土坑より新しい。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀と考えられる。

出土遺物

陶磁器 (第29図55、図版14) : 55は埋土出土で、産地不明の磁器染付碗である。

V層出土遺物

陶磁器 (第29図56～66、図版14、15)

[陶器] 56～60は陶器である。

(皿類) 56は瀬戸美濃系陶器皿である。57は産地不明の陶器皿である。58は産地不明の陶器灯明皿である。

(鉢類) 59は産地不明の陶器鉢で、内外面に鉄釉を施し、見込みに足付きハマの跡が残っている。

(壺類) 60は産地不明の陶器壺で、内面と外面上部に鉛釉を施している。

[磁器] 61～66は磁器である。

(不明) 61は肥前系青磁であるが器種は不明である。

(皿類) 62は肥前系磁器染付皿で、型打ち成形である。口紅を施している。63は肥前系青磁皿である。64は肥前系磁器染付皿で、蛇ノ目釉剥ぎを施している。

(瓶類) 65は肥前系磁器染付瓶で、内面は無釉である。

(蓋類) 66は産地不明の磁器染付碗蓋で、口紅を施している。

陶磁器の年代は、18世紀～19世紀前期であり、第V層はこの時期に形成された整地層と考えられる。

土製品 (第33図3、4、図版18、19)

3は土師質の土錘である。4は用途不明の土師質土製品である。

金属製品（第35図6、7、図版19）

6、7は鉄製の折釘である。

(3) 第Ⅵ層面検出の遺構・遺物

第Ⅵ層面からは、溝跡1条（SD04）、土坑9基（SK09～17）が検出された。遺物は、遺構内および第Ⅵ層から、陶磁器・瓦・木製品などが出土した。

溝跡

4号溝跡（第23図、図版8）

調査区北東側で検出した。北西～南東方向の溝で、調査区外に延びる。長さが約23m以上、幅1.9m～2.1m、確認面からの深さ20cm以上で、断面形は鍋底状を呈する。3号竪穴遺構および9、13、14、16号土坑と重複し、それらより古い。

土坑

9号土坑（第24図、図版8）

調査区東側で検出した。平面形は不明で、規模は長軸4.0m以上、確認面からの深さ13cm以上である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央部に向かって緩やかに傾斜している。3号竪穴遺構と重複し、それより古い。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は18世紀後期と考えられる。

出土遺物

陶磁器（第30図67～69、図版15）：全て埋土出土の肥前系磁器染付碗である。67は外面に梵字を染め付けている。68は広東碗である。

10号土坑（第24図、図版9）

調査区東側の壁沿いで検出し、北東側が調査区外に延びる。平面形は楕円形で、規模は長軸2.0m以上、短軸0.8m以上、確認面からの深さ15cm以上である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

出土遺物

陶磁器（第30図70、図版15）：70は埋土出土の肥前系陶器皿である。内面に刷毛目文を施している。

木製品（第34図2、図版19）：2は掘り方出土で、木製の櫛で漆を施している。

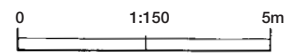
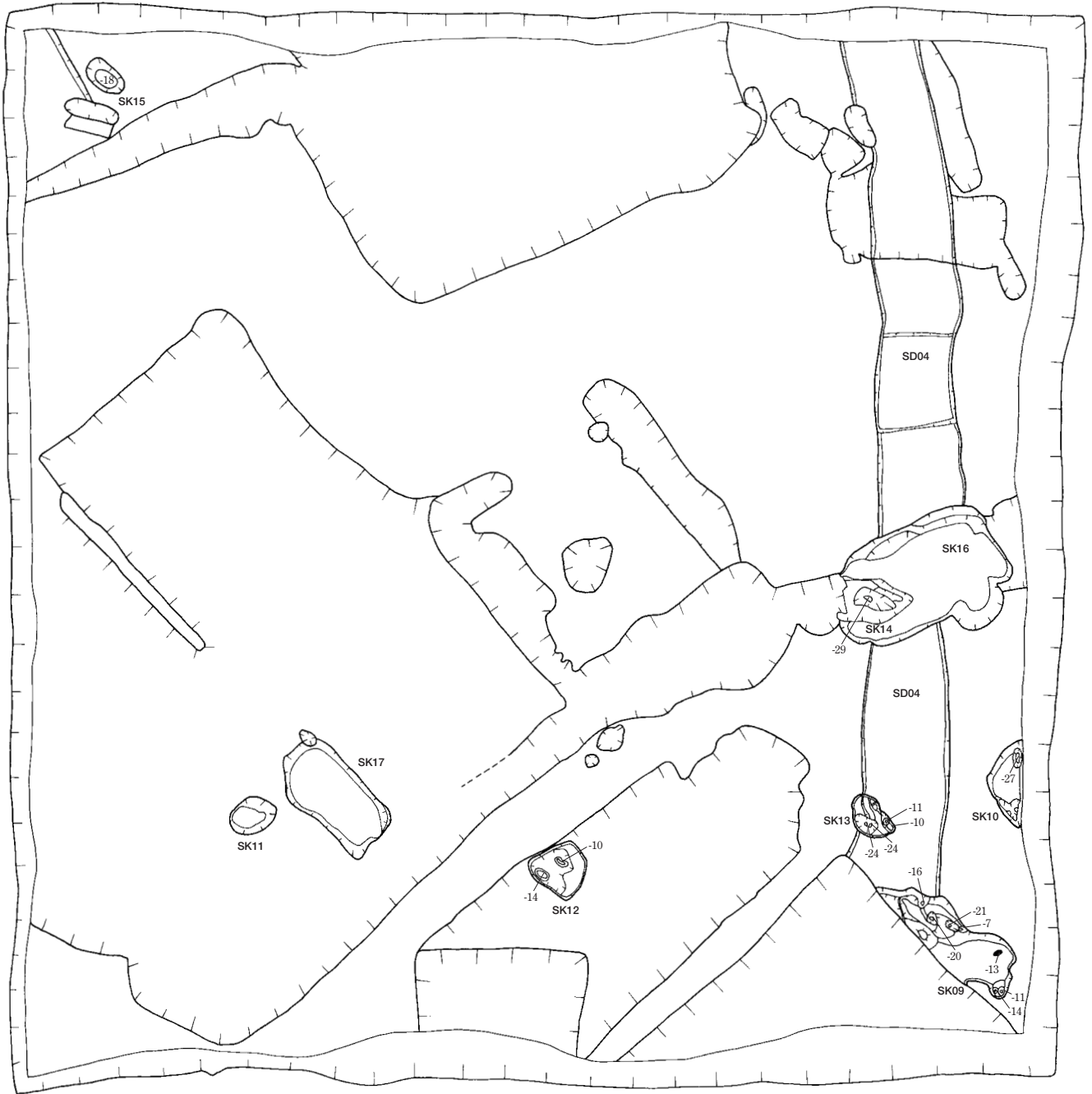
11号土坑（第24図、図版9）

調査区南側で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸1.15m、短軸0.85m、確認面からの深さ16cm以上である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀前期と考えられる。

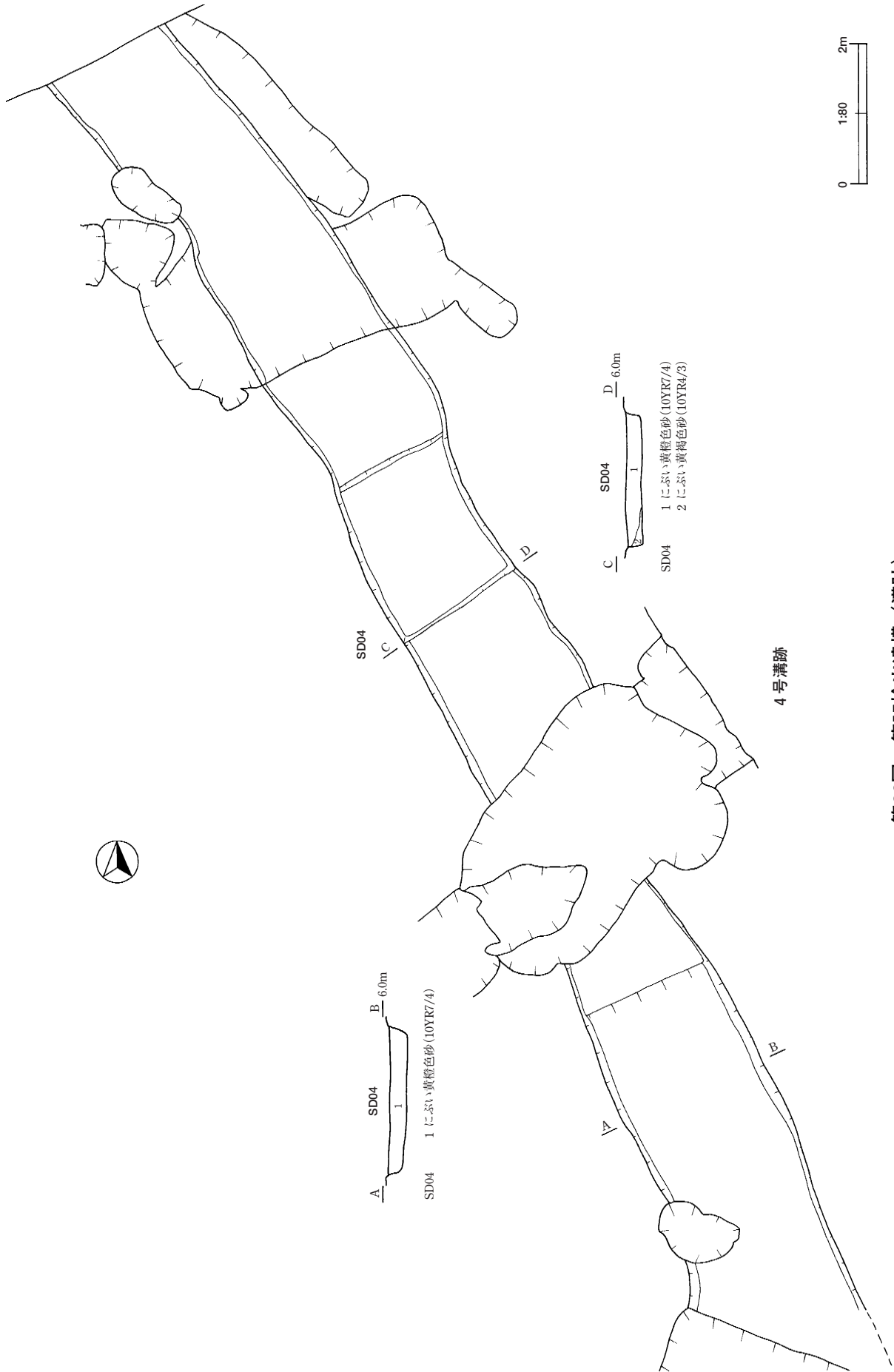
出土遺物

陶磁器（第30図71、72、図版15）：71、72は埋土出土である。71は肥前系磁器染付皿である。72は肥前系磁器染付段重である。

12号土坑（第24図、図版9）



第22図 第VI遺構全体図



第23図 第VI層面検出遺構（溝跡）

調査区南東側で検出した。平面形は不整形で、規模は長軸約1.4m、短軸約1.1m、確認面からの深さ14cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。3、8号土坑と重複し、それらより古い。

13号土坑（第24図、図版9）

調査区東側で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸1.12m、短軸0.74m、確認面からの深さ24cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。4号溝跡と重複し、それより新しい。

14号土坑（第25図、図版9）

調査区東側で検出し、南西部分は1号桶埋設遺構に切られている。平面形は不整形で、規模は長軸1.6m以上、短軸約1.0m、確認面からの深さ29cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央部が窪んでいる。1号桶埋設遺構、16号土坑および4号溝跡と重複し、1号桶埋設遺構より古く、16号土坑および4号溝跡より新しい。

出土遺物

陶磁器（第30図73、図版15）：73は埋土出土の肥前系磁器染付碗である。内外面に氷裂菊花文を染め付けている。

15号土坑（第25図、図版9）

調査区北西側で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸1.04m、短軸0.6m、確認面からの深さ18cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

16号土坑（第25図、図版9）

調査区東側で検出し、南西部分は1号桶埋設遺構に切られている。平面形は不整形で、規模は長軸4.0m以上、短軸約2.4m、確認面からの深さ約38cmである。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。1号桶埋設遺構、14号土坑および4号溝跡と重複し、1号桶埋設遺構および14号土坑より古く、4号溝跡より新しい。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は18世紀後期と考えられる。

出土遺物

陶磁器（第30図74～76、図版15、16）：全て埋土出土である。74は産地不明の陶器壺もしくは甕で、外面に鉄釉の上から白釉を垂らしている。75、76は肥前系磁器染付碗蓋である。75は端反り碗の蓋で、口紅を施している。76は外面に竹文、内面に四方禪文を染め付けている。

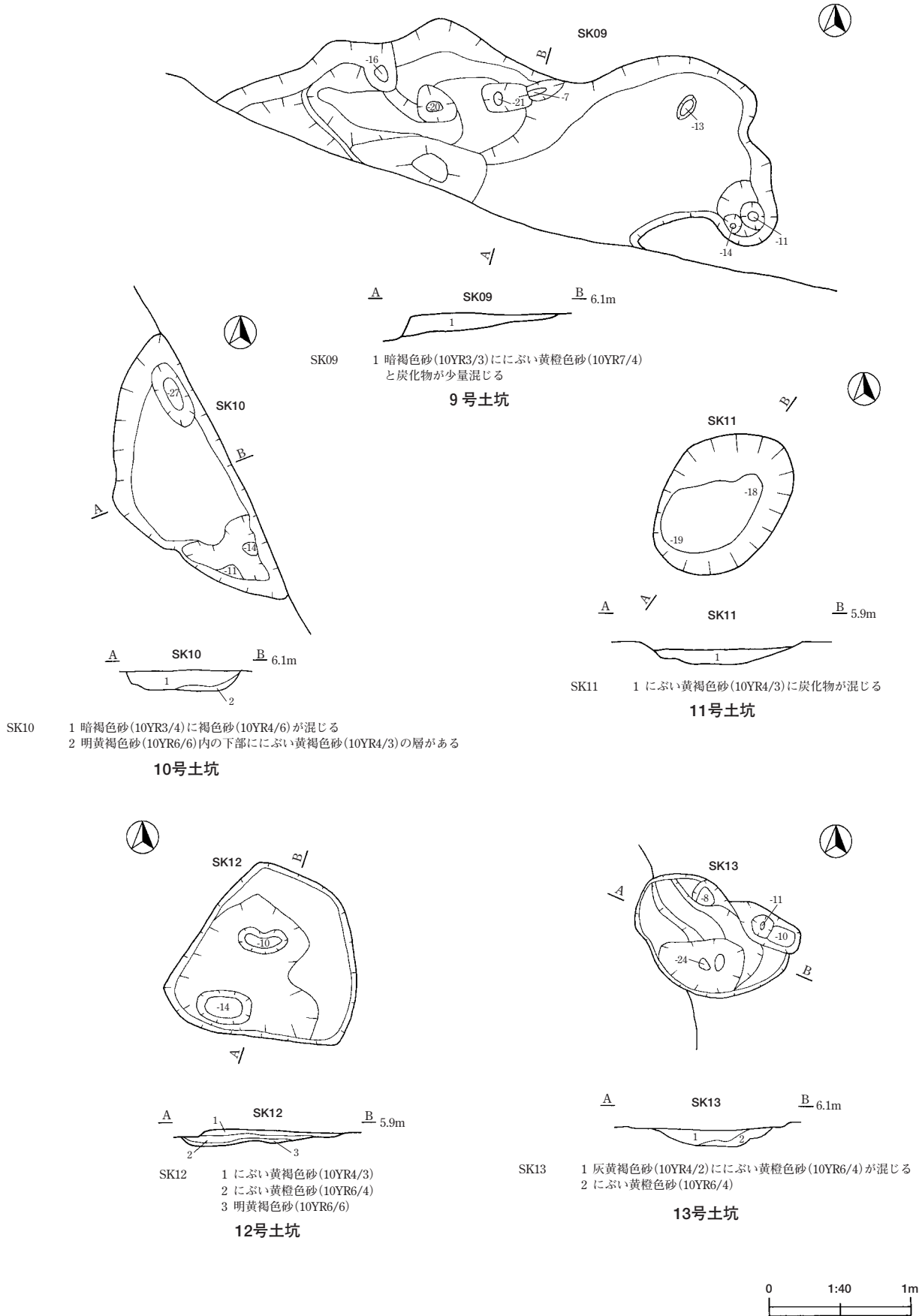
瓦（第33図3、図版19）：3は埋土出土である。棧瓦で灰色を呈するいぶし瓦である。

17号土坑（第25図、図版9）

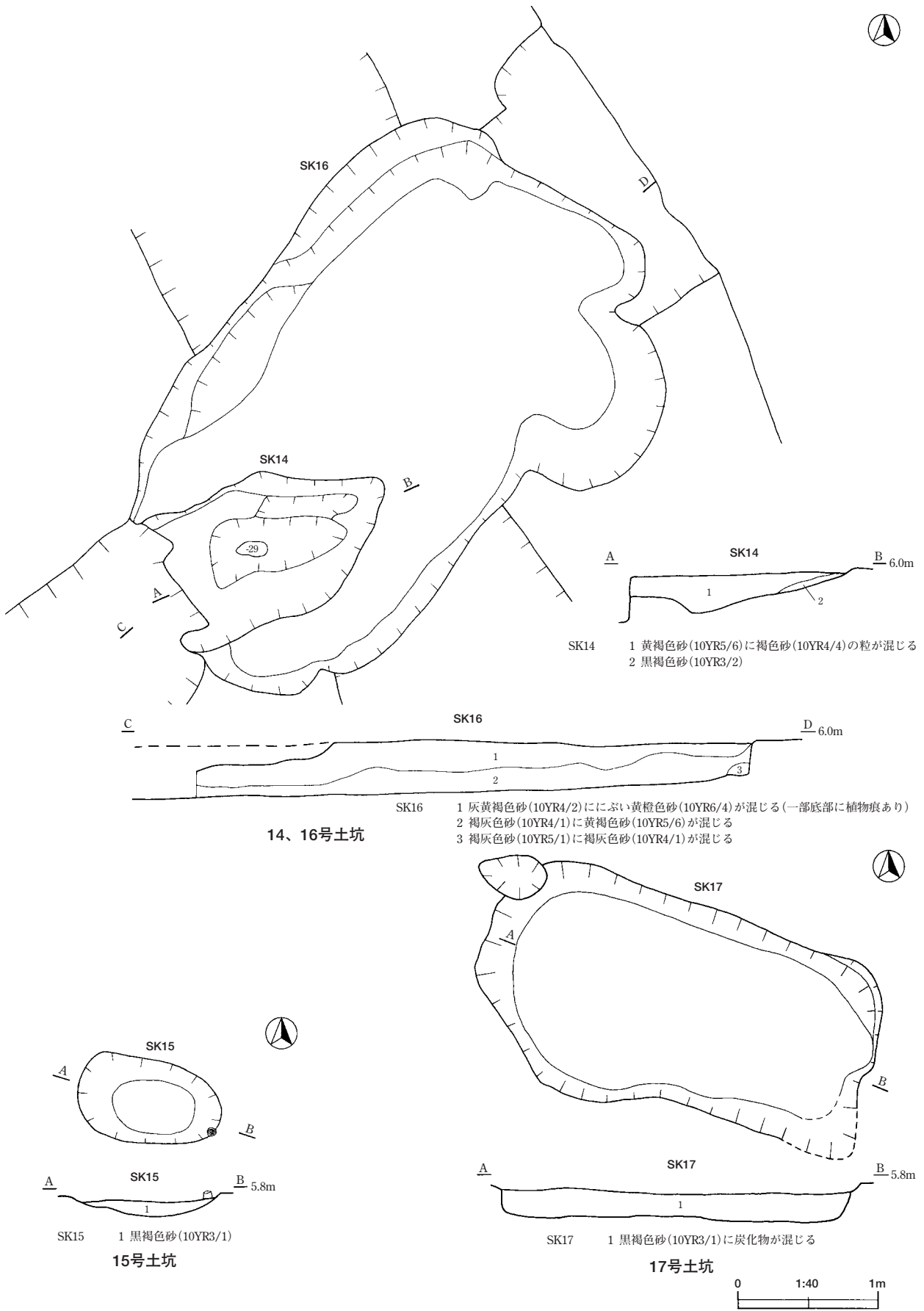
調査区中央南側で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸2.9m、短軸1.4m、確認面からの深さ29cmである。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。

出土遺物

陶磁器（第30図77、図版16）：77は埋土出土の肥前系磁器染付皿である。



第24図 第VI検出遺構(土坑)



第25図 第VI層検出遺構(土坑)

Ⅵ層出土遺物

陶磁器（第30図78、図版16）

〔磁器〕 78は磁器である。

（皿類） 78は肥前系磁器染付皿である。

第Ⅰ～Ⅲ層で出土した遺物については、出土遺物属性表と実測図のみで説明する。

（4）人骨について

調査区北側隅で人骨2体を同じ層位で検出した。検出場所は、調査区基本層序とは異なり、第Ⅳ、Ⅴ層が認められず、第Ⅶ層が盛り上がった位置で検出された。遺体埋葬時の掘り方や副葬品は確認できなかった。

秋田大学医学部法医学分野へ鑑定を依頼した。その結果、1号人骨は、30～50才の男性と推定され、2号人骨は40才以上の男性で、1号人骨より高齢と推測された。平成20年度に人骨が発見された北側を広げて発掘調査したが、人骨は検出されず墓域を形成していたかどうかは不明である。

（5）出土遺物属性表および実測図

表3～9、第26～35図に出土遺物の属性表および実測図を掲載した。表3～9の凡例は下記のとおりである。

凡例

- 1 陶磁器・土製品・瓦・木製品・金属製品・銭貨の基本分類ごとに番号を付与した。
- 2 図番号は、実測図の番号と一致している
- 3 陶磁器について、分類では陶器・磁器に分類を行った。また、施釉や絵付けにより染付・青磁・白磁・色絵等の細分が可能であり、「特徴」欄に記載した。
- 4 陶磁器では、中国産の貿易陶磁については中国産と示し、国内産については肥前系・瀬戸美濃系など主要な大規模生産地（地方）に関し、その生産地産のものを主としてそれに直接技術的影響を受けた周辺及び地方の窯のものも含め「系」として示した。また、より具体的生産地として窯を限定できるものについては、秋田の在地窯の寺内窯のように示した。
- 5 陶磁器の年代については、年代を限定できるものについては西暦で年代で示した。

第3章 調査の方法と成果
 (4) 出土遺物属性表および実測図

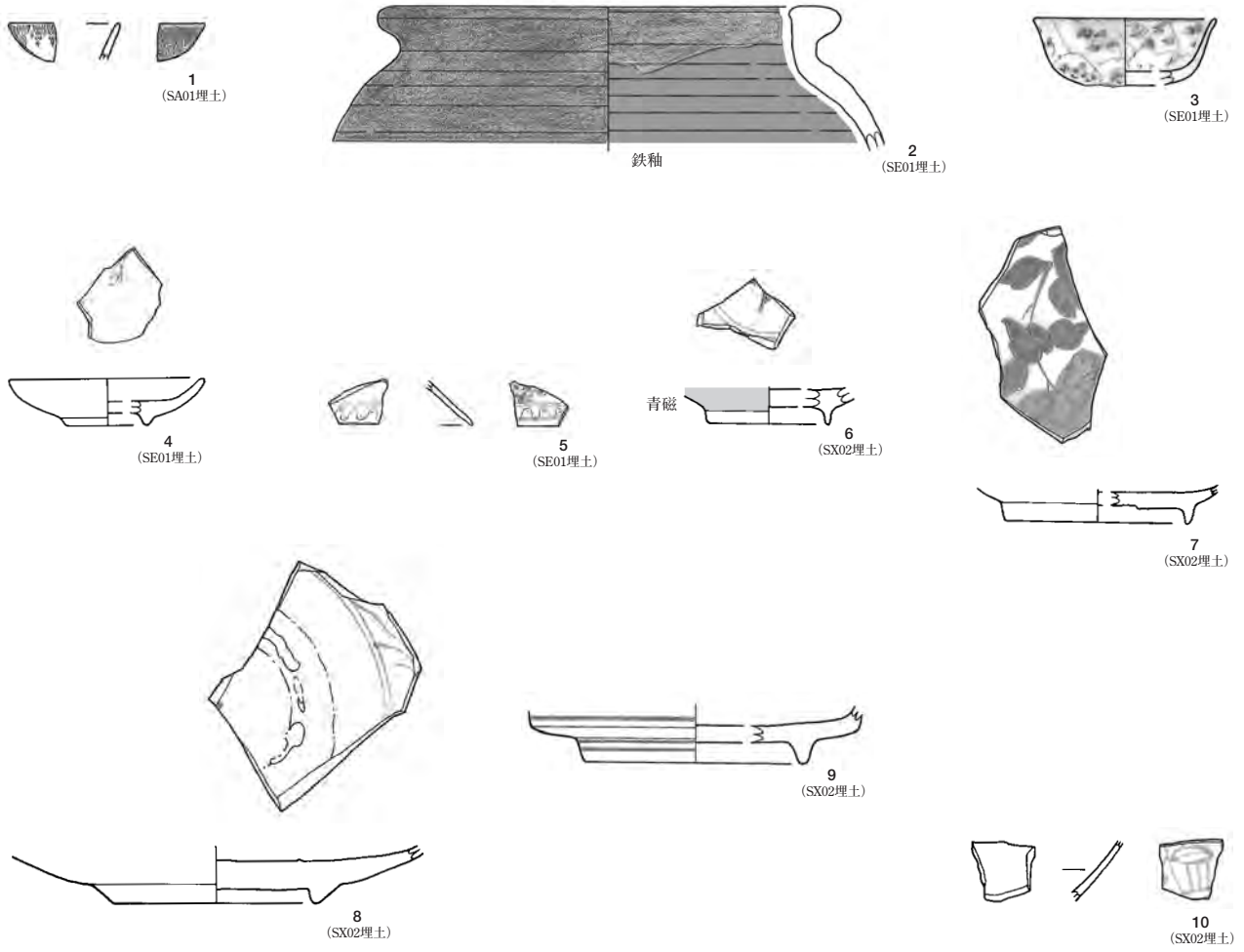
表3 陶磁器属性一覧①

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	特徴
1	第26図	SA01埋土		磁器	碗	不明	明治	型紙刷り、染付
2	第26図	SE01埋土		陶器	壺か甕	不明		内外面鉄釉
3	第26図	SE01埋土		磁器	小碗	瀬戸美濃系	明治以降	霊芝文、西洋コバルトで染付
4	第26図	SE01埋土		磁器	小皿	肥前系	17世紀中期	底部に「大明成化年製」、染付
5	第26図	SE01埋土		磁器	蓋	肥前系	1810-60	端反り碗、染付
6	第26図	SX02埋土		磁器	碗	肥前系	18世紀後期	青磁染付、有田産
7	第26図	SX02埋土		磁器	皿	肥前系	19世紀	蛇ノ目凹型高台、牡丹文、染付
8	第26図	SX02埋土		磁器	皿	肥前系	18世紀	蛇ノ目釉剥ぎ、染付
9	第26図	SX02埋土		磁器	蓋物	肥前系	18世紀	
10	第26図	SX02埋土		磁器	油壺	肥前系	17世紀末	色絵、瑤珞文
11	第26図	第Ⅳ層	MA47	陶器	碗	不明	18世紀以降	
12	第26図	第Ⅳ層	LY48	陶器	皿	肥前系	18世紀前期	色絵
13	第26図	第Ⅳ層	LY49	陶器	火入	不明		外面鉄釉
14	第26図	第Ⅳ層	LY49	磁器	碗	肥前系	18世紀後期-19世紀初	矢羽根文、染付
15	第26図	第Ⅳ層	MC49	磁器	皿	肥前系	17世紀末-18世紀初	コンニャク印判、花葉文、染付
16	第26図	第Ⅳ層	LW49	磁器	皿	肥前系	18世紀	蛇の目釉剥ぎ、染付
17	第27図	第Ⅳ層	LY52	磁器	皿	肥前系	18世紀	蛇の目釉剥ぎ、染付
18	第27図	第Ⅳ層	LZ48	磁器	皿	中国産	17世紀前期	染付
19	第27図	第Ⅳ層	LX50	磁器	小皿	不明	19世紀	松文、染付
20	第27図	第Ⅳ層	MA52	磁器	猪口	不明	19世紀	裏銘、櫛歯文、染付
21	第27図	第Ⅳ層	LY48	磁器	猪口	不明	19世紀	口紅、染付
22	第27図	第Ⅳ層	MC49	磁器	窯道具	不明	不明	
23	第27図	SKI01埋土		磁器	皿	中国産	17世紀前期	染付
24	第27図	SKI02埋土		陶器	碗	不明		
25	第27図	SKI02埋土		陶器	鉢か甕	肥前系	17世紀末-18世紀前期	白釉の後に鉄釉
26	第27図	SKI02埋土		陶器	不明	不明		
27	第27図	SKI02埋土		磁器	碗	肥前系	1810-60	草文、染付
28	第27図	SKI02埋土		磁器	碗	肥前系	17世紀末-18世紀前期	高台内に「大明年製」、染付
29	第27図	SKI02埋土		磁器	紅皿	肥前系	19世紀	見込みに文字あり、染付
30	第27図	SKI03埋土		陶器	碗	不明		
31	第27図	SKI03埋土		陶器	壺	不明		外面鉄釉
32	第27図	SKI03埋土		陶器	壺か甕	不明		
33	第27図	SKI03埋土		陶器	土瓶	不明	19世紀	
34	第27図	SKI03埋土		磁器	碗	肥前系	18世紀後期	外面に菊花文、内面上部に四方禪文、染付
35	第28図	SKI03埋土		磁器	湯飲み碗	肥前系	19世紀	染付
36	第28図	SKI03埋土		磁器	皿	肥前系	18世紀	高台内に「宣徳年製」、染付
37	第28図	SKI03埋土		磁器	皿	肥前系	18世紀前期	白磁、蛇の目釉剥ぎ
38	第28図	SKI03埋土		磁器	皿	中国産	17世紀前期	染付
39	第28図	SKI03埋土		磁器	土瓶	不明	19世紀	外面青磁
40	第28図	SA02埋土		陶器	小碗	不明	19世紀	
41	第28図	SA02埋土		陶器	土瓶	不明		
42	第28図	SA02埋土		陶器	土瓶	不明	19世紀	
43	第28図	SA02埋土		磁器	碗	肥前系	18世紀	雪輪梅花文、染付
44	第28図	SA04埋土		磁器	紅皿	肥前系	19世紀	押し型成形
45	第28図	SA05埋土		磁器	碗	肥前系	18世紀	染付
46	第28図	SD03埋土		陶器	壺	不明		
47	第28図	SD03埋土		陶器	壺か甕	肥前系	18世紀	二彩唐津
48	第28図	SD03埋土		陶器	土瓶蓋	不明	19世紀	色絵、被熱している

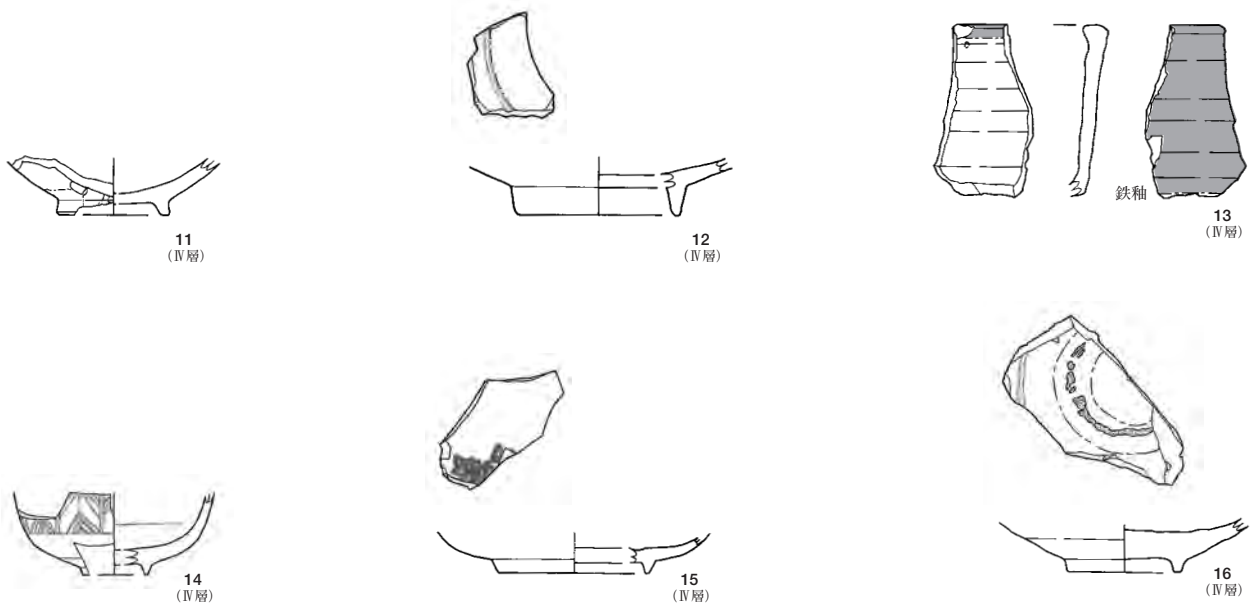
表4 陶磁器属性一覧②

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	特徴
49	第28図	SD03埋土		磁器	変形皿	肥前系	17世紀末-18世紀初	押し型成形、型紙刷り、染付
50	第28図	SK03埋土		磁器	皿	肥前系	19世紀前期	山水文、染付
51	第28図	SK03埋土		磁器	皿	肥前系	18世紀前期	染付
52	第28図	SK03埋土		磁器	段重	不明	19世紀	染付
53	第28図	SK03埋土		磁器	土瓶蓋	不明	19世紀	染付
54	第29図	SK04埋土		陶器	壺か甕	不明		内外面鉄釉
55	第29図	SK08埋土		磁器	碗	不明	19世紀	染付
56	第29図	第V層	MA49	陶器	皿	瀬戸美濃系		
57	第29図	第V層	MA52	陶器	皿	不明		
58	第29図	第V層	LY52	陶器	灯明皿	不明		
59	第29図	第V層	MA49	陶器	鉢	不明		内外面鉄釉、足つきハマの跡あり
60	第29図	第V層	MB52	陶器	壺	不明		内面鉛釉、外面上部鉛釉
61	第29図	第V層	LZ51	磁器	不明	肥前系	18世紀	青磁
62	第29図	第V層	MA53	磁器	皿	肥前系	18世紀後期-19世紀初	口紅、型打ち成形、染付
63	第29図	第V層	MD51	磁器	皿	肥前系	18世紀	青磁
64	第29図	第V層	MA49	磁器	皿	肥前系	18世紀	蛇の目釉剥ぎ、染付
65	第29図	第V層	LY52	磁器	瓶	肥前系	19世紀前期	内面無釉、染付
66	第29図	第V層	LX50	磁器	碗蓋	不明	19世紀	口紅、染付
67	第30図	SK09埋土		磁器	碗	肥前系	18世紀後期-19世紀初	外面に梵字、染付
68	第30図	SK09埋土		磁器	碗	肥前系	1800-20	広東碗、染付
69	第30図	SK09埋土		磁器	碗	肥前系	18世紀前期	染付
70	第30図	SK10埋土		陶器	鉢	肥前系	17世紀後期-18世紀初	刷毛目文
71	第30図	SK11埋土		磁器	皿	肥前系	19世紀前期	染付
72	第30図	SK11埋土		磁器	段重	肥前系	18世紀末-19世紀前期	染付
73	第30図	SK14埋土		磁器	碗	肥前系	18世紀後期	氷裂菊花文、染付
74	第30図	SK16埋土		陶器	壺か甕	不明		
75	第30図	SK16埋土		磁器	碗蓋	肥前系	1810-60	端反り碗、口紅、染付
76	第30図	SK16埋土		磁器	碗蓋	肥前系(有田産)	18世紀後期	外面に竹文、内面に四方禪文、染付
77	第30図	SK17埋土		磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
78	第30図	第VI層	LZ52	磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
79	第31図	第III層	MB52	陶器	鉢	肥前系	17世紀後期	二彩唐津、刷毛目文
80	第31図	第III層	MB52	陶器	甕	不明		
81	第31図	第III層	MB51	陶器	土瓶蓋	寺内窯		
82	第31図	第III層	MA51	磁器	碗	肥前系	18世紀前-中期	コンニャク印判、菊花文、染付
83	第31図	第III層	LZ49	磁器	皿	肥前系	18世紀	高台内に渦福、染付
84	第31図	第III層	LX50	磁器	皿	肥前系	18世紀	宝文、染付
85	第31図	第III層	LY48	磁器	皿	肥前系	18世紀	白磁
86	第31図	第III層	MB51	磁器	皿	肥前系	18世紀-19世紀初	底部に足つきハマの跡あり、染付
87	第31図	第III層	不明	磁器	蓋	肥前系	1800-20	広東碗、染付
88	第31図	第III層	MB51	磁器	蓋	肥前系	1800-30	広東碗、高台内船、山水文、底部に宝文、染付
89	第31図	第III層	MA52	磁器	蓋	肥前系	1810-60	端反り碗、龍文、底部に松竹梅文、染付
90	第32図	第III層	MA53	磁器	蓋	肥前系	1810-60	端反り碗、外面に七宝繫と四方禪文、染付
91	第32図	第III層	MB50	磁器	碗蓋	肥前系	18世紀中期	染付
92	第32図	第III層	MA50	磁器	蓋	肥前系	1810-60	端反り碗、墨弾き、染付
93	第32図	第III層	MC52	磁器	蓋	瀬戸美濃系	19世紀	端反り碗、染付
94	第32図	表土		磁器	蕎麦猪口	肥前系	18世紀末-19世紀前期	外面に龍、染付
95	第32図	不明		磁器	碗	中国産	17世紀前期	染付
96	第32図	不明		磁器	仏飯器	肥前系	18世紀	染付

第3章 調査の方法と成果
 (4) 出土遺物属性表および実測図

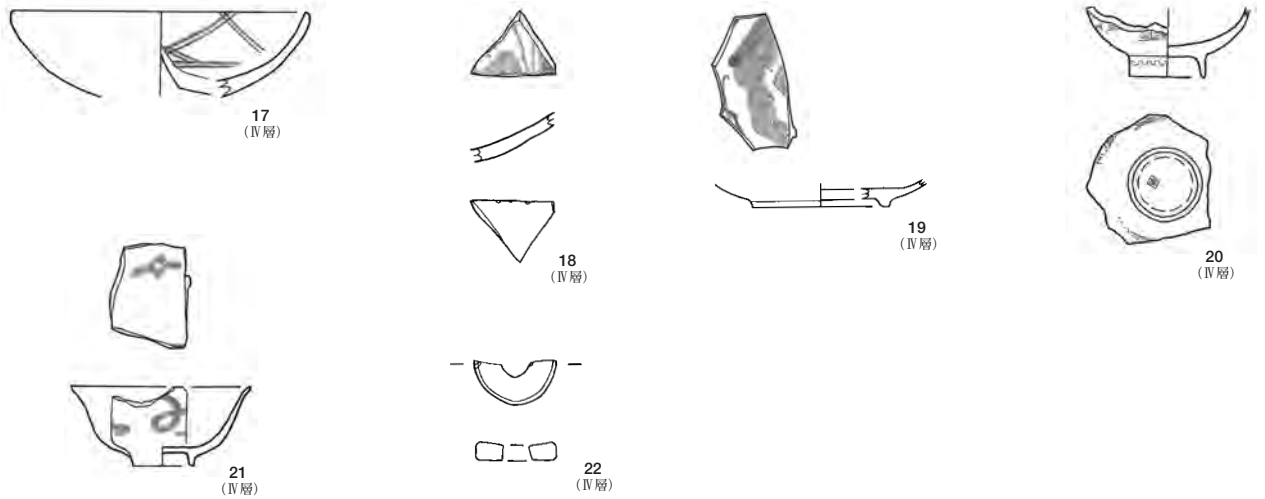


第IV層検出遺構内出土

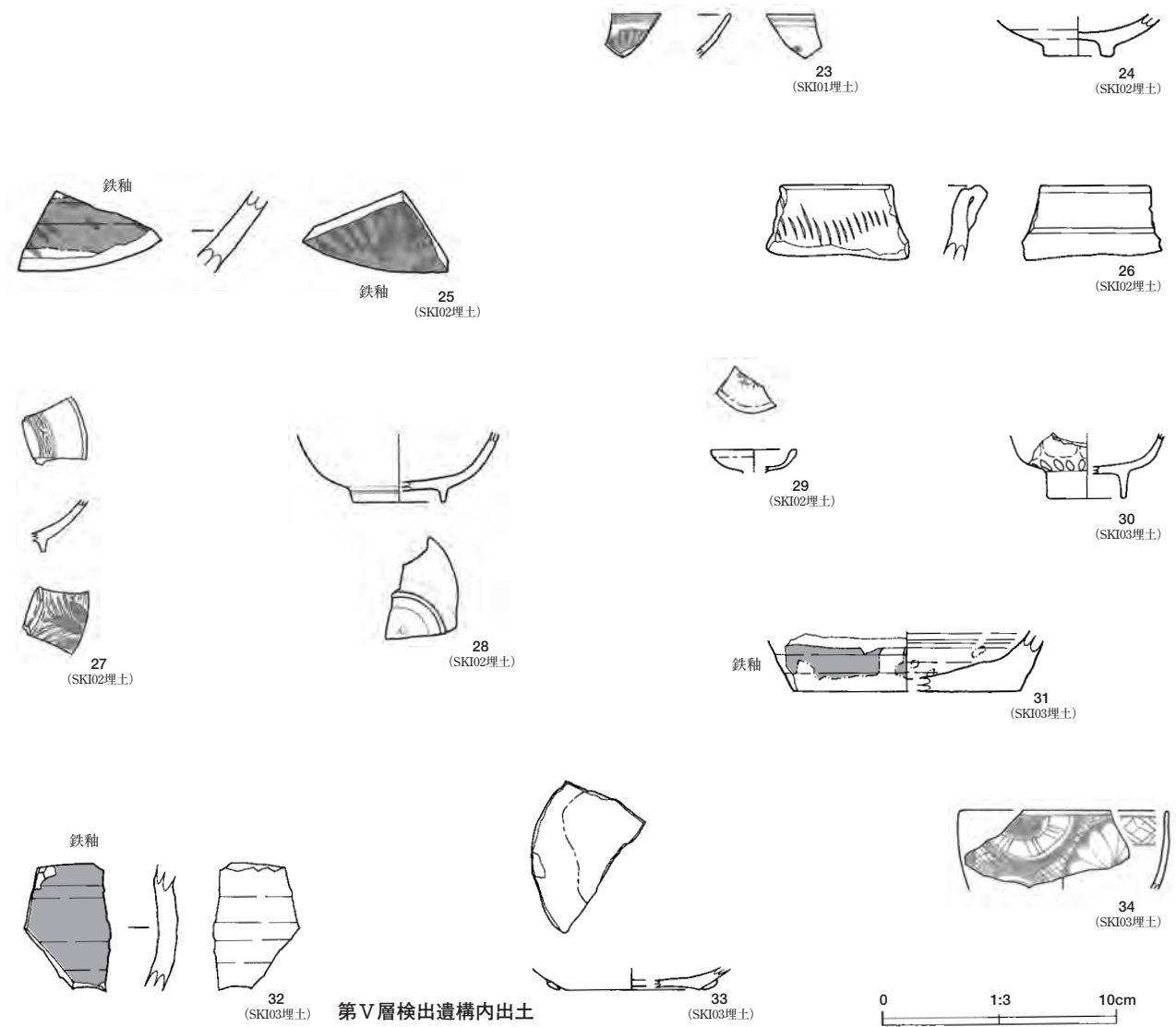


第IV層出土

第26図 陶磁器 (第IV層検出遺構内、第IV層出土①)

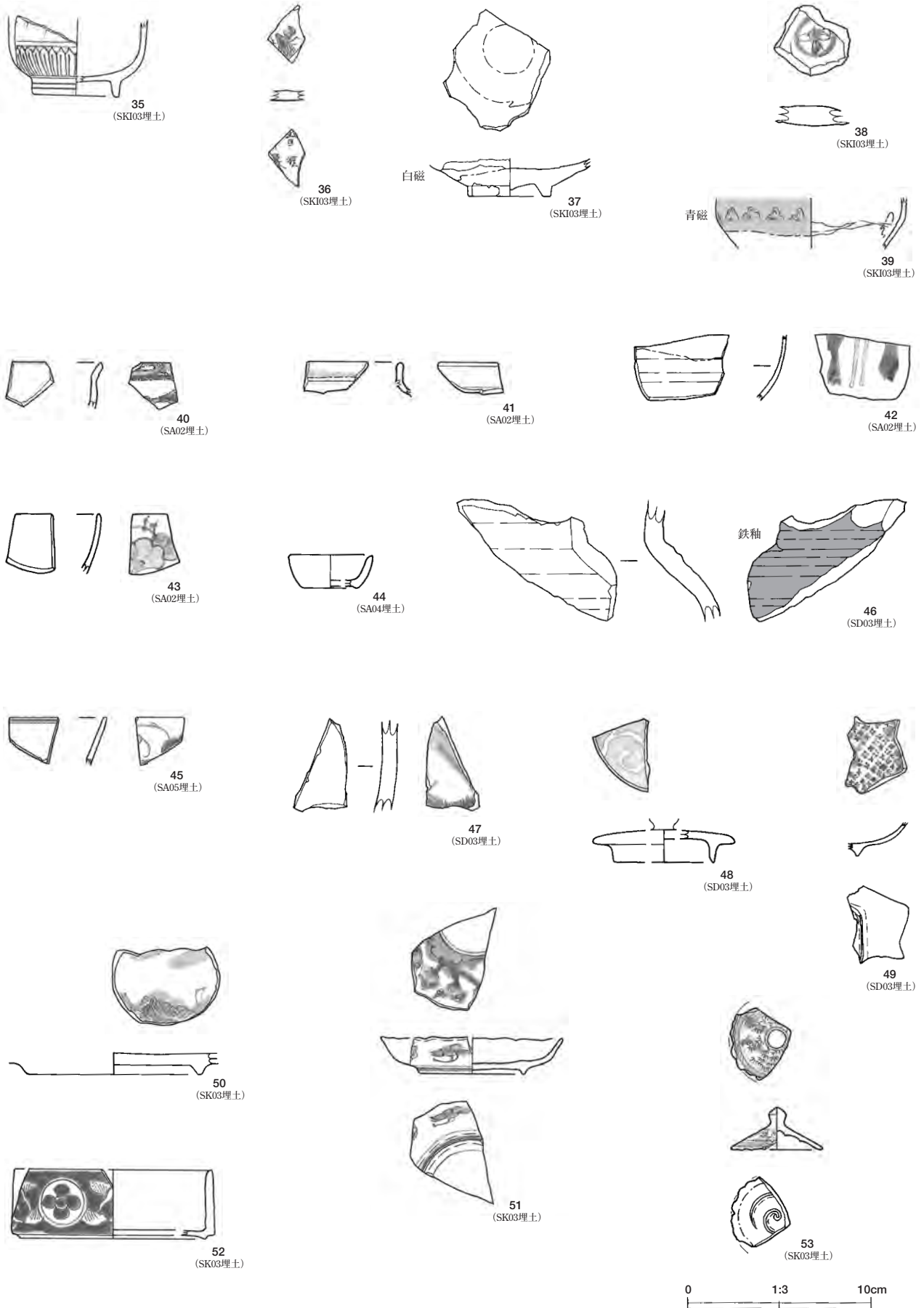


第IV層出土

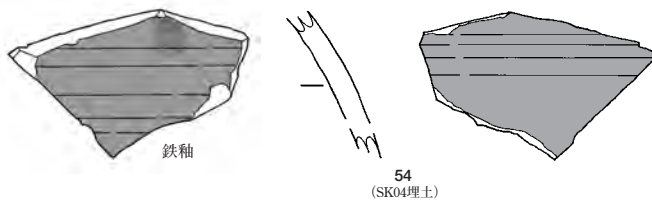


第27図 陶磁器 (第IV層②、第V層検出遺構内出土①)

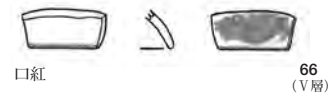
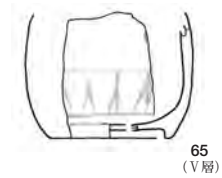
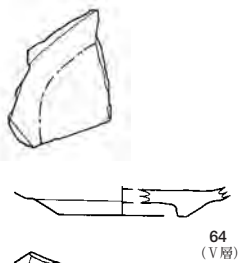
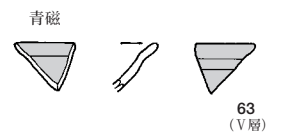
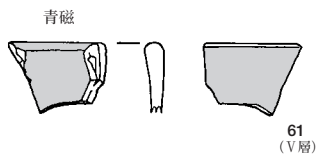
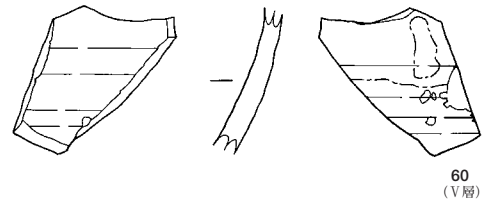
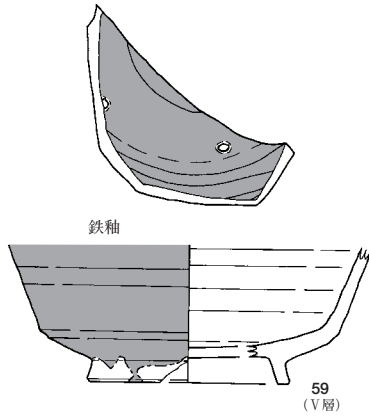
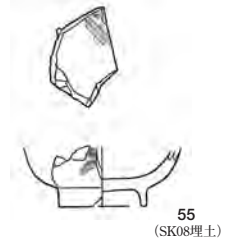
第3章 調査の方法と成果
 (4) 出土遺物属性表および実測図



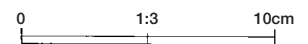
第28図 陶磁器 (第V層検出遺構内出土②)



第V層検出遺構内出土

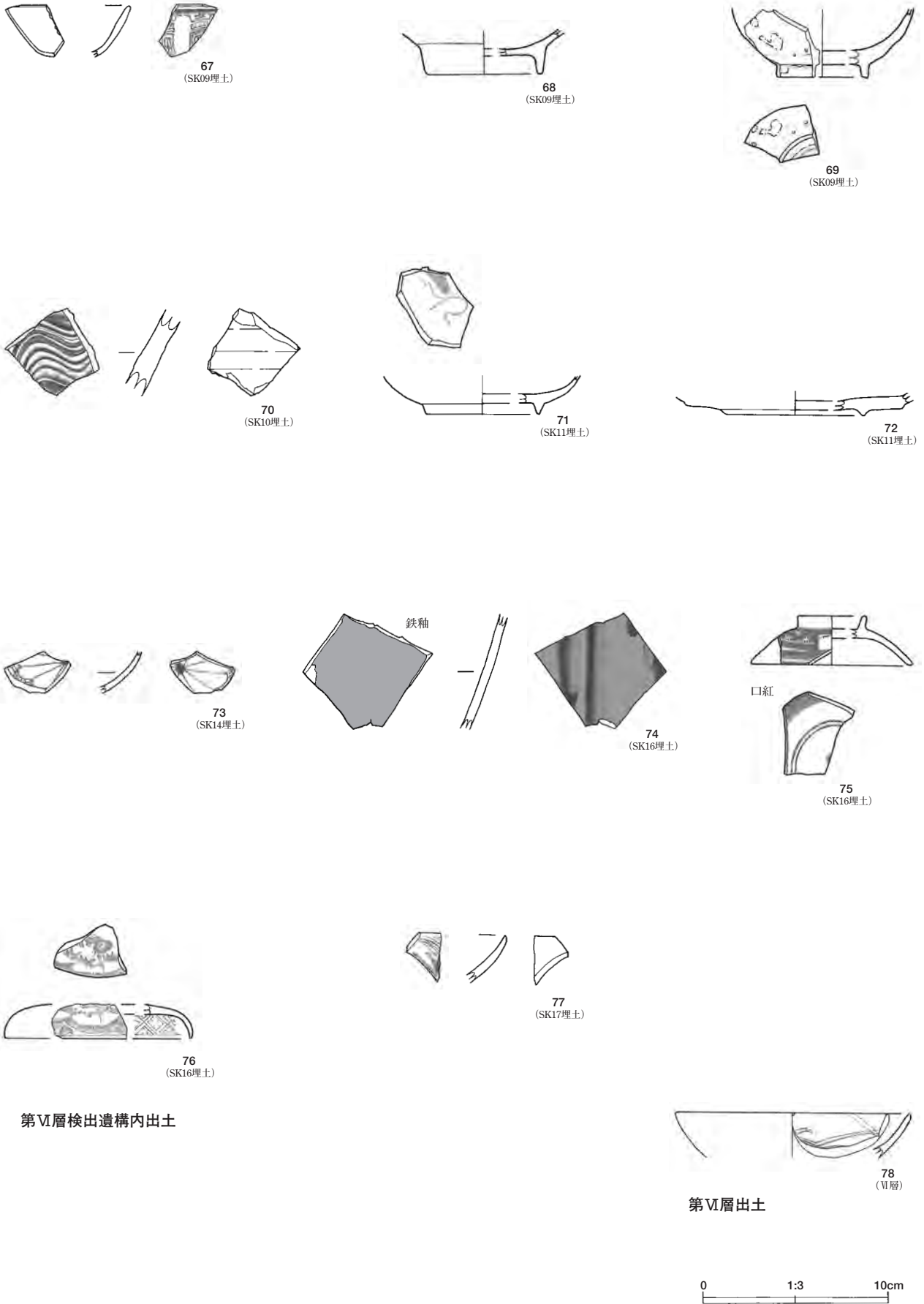


第V層出土

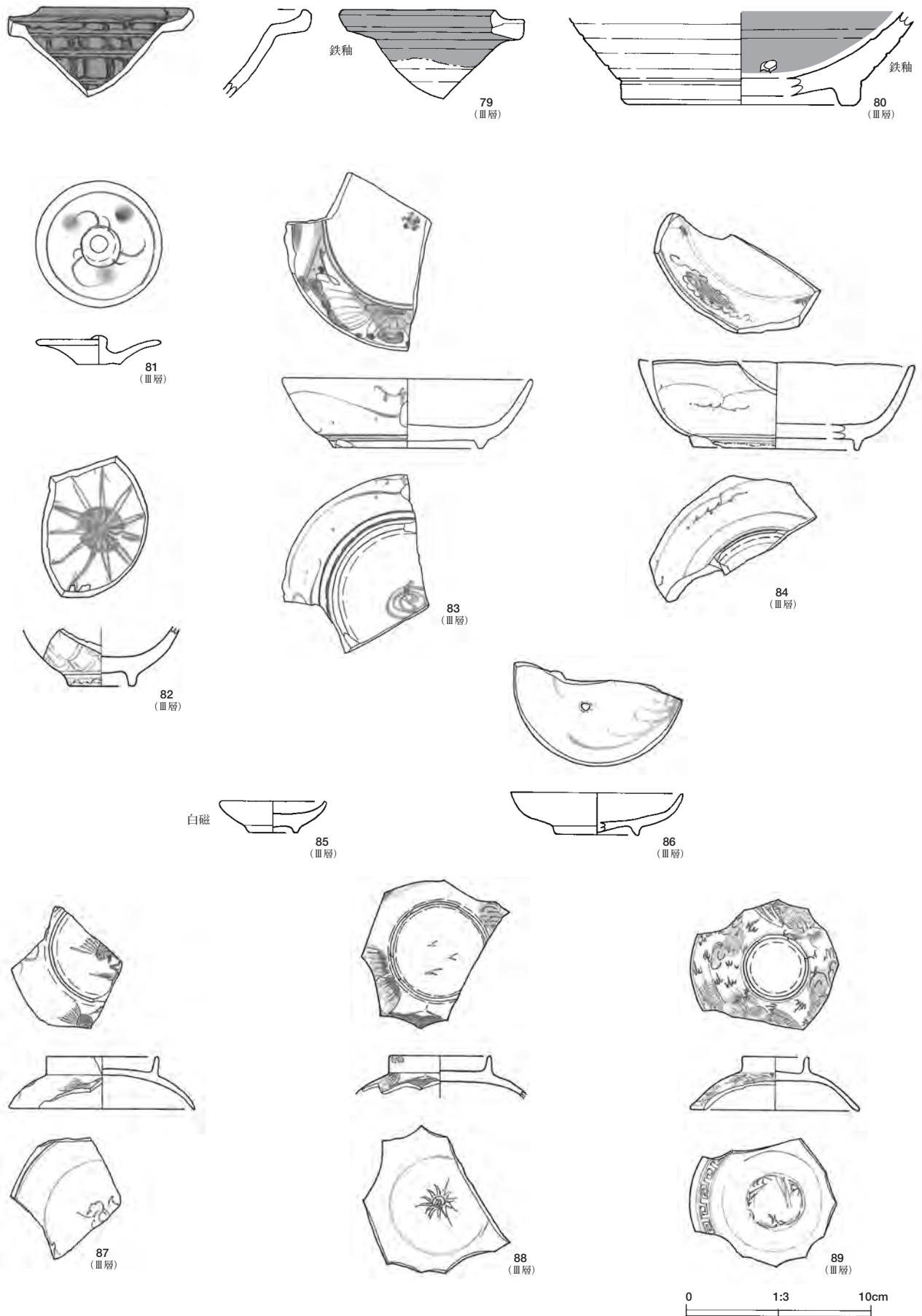


第29図 陶磁器 (第V層検出遺構内③、第V層出土)

第3章 調査の方法と成果
 (4) 出土遺物属性表および実測図

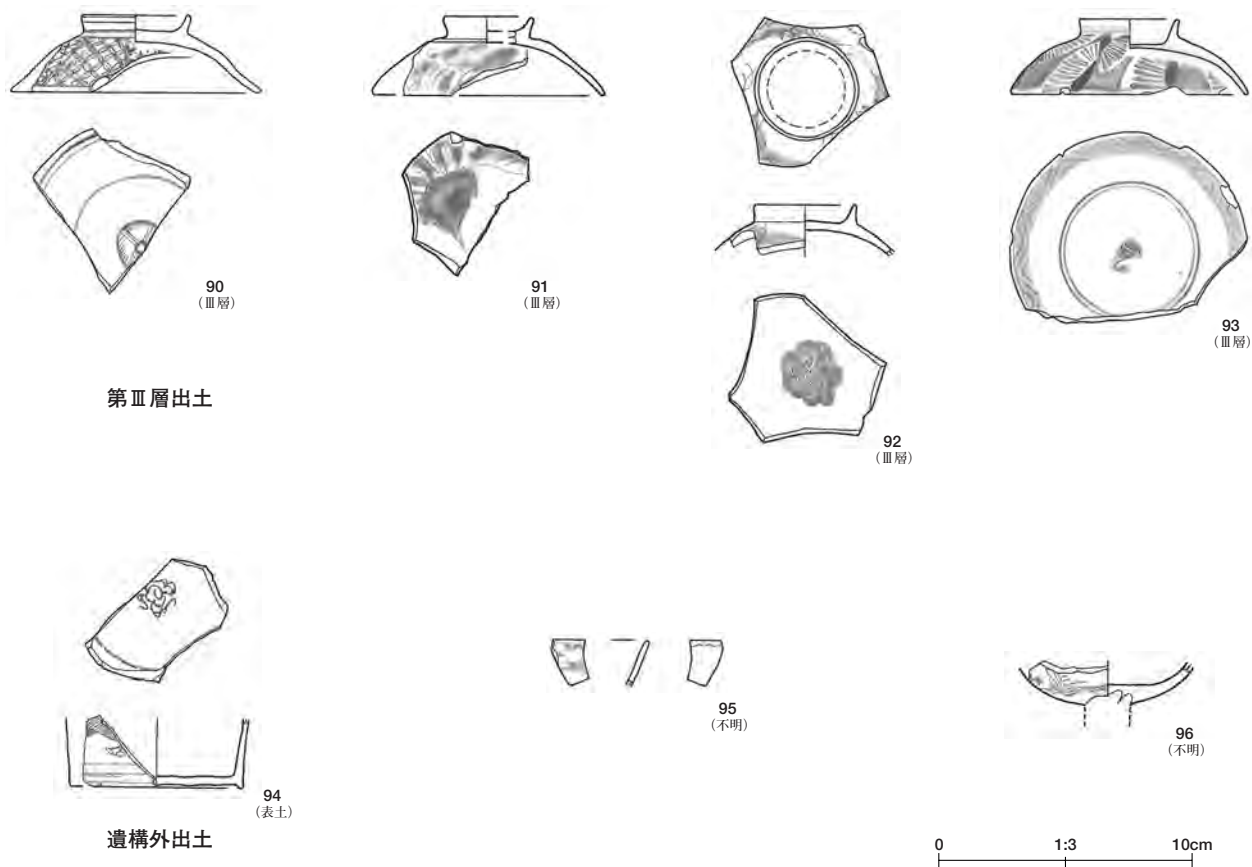


第30図 陶磁器 (第VI層検出遺構内、第VI層出土)



第31図 陶磁器 (第III層出土①)

第3章 調査の方法と成果
 (4) 出土遺物属性表および実測図



第32図 陶磁器（第Ⅲ層②、遺構外出土）

表5 土製品属性一覧

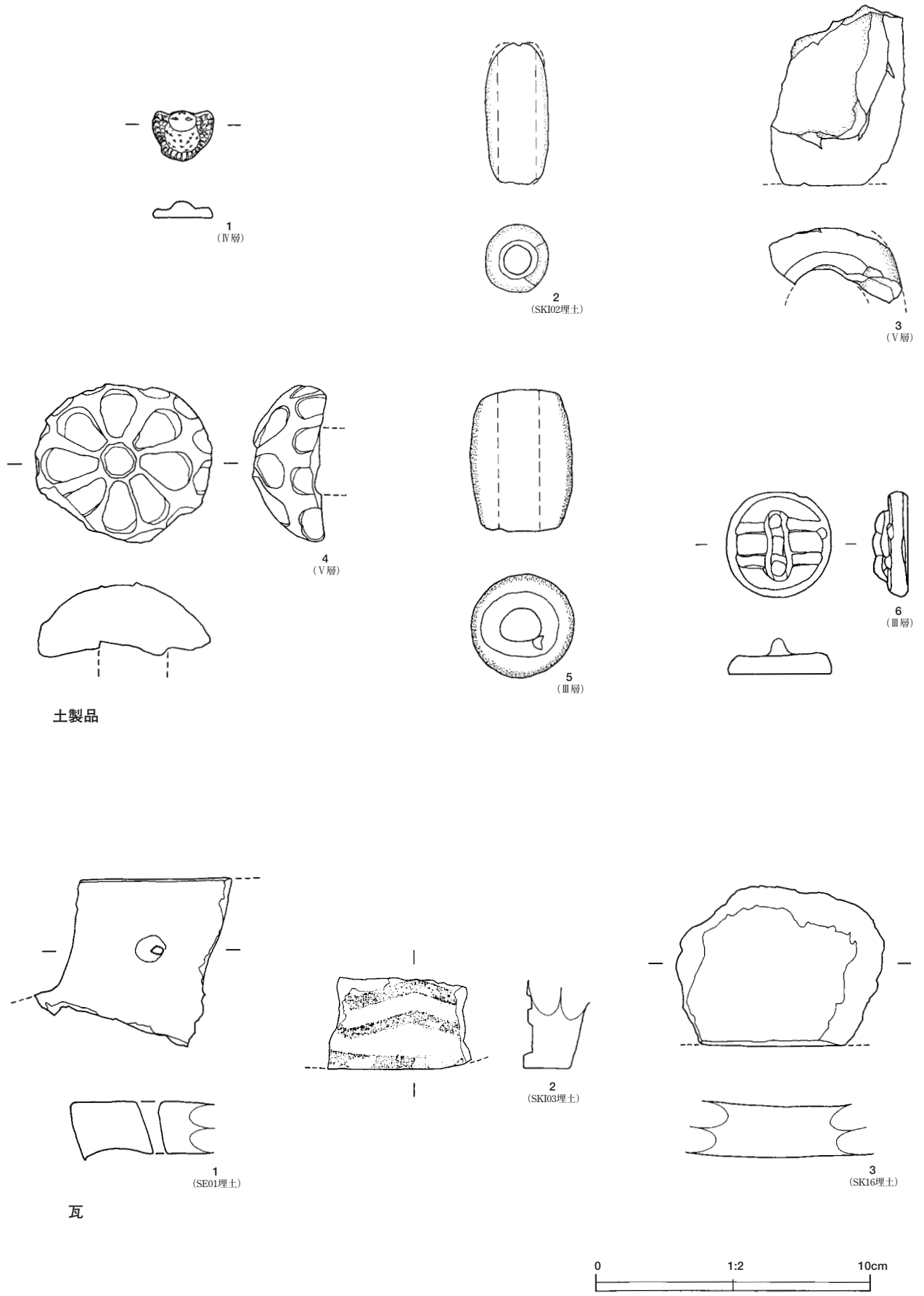
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	器種等	素材
1	第33図	第Ⅳ層	MA47	泥面子	土師質
2	第33図	SKI02埋土		土錘	土師質
3	第33図	第Ⅴ層	LY52	土錘	土師質
4	第33図	第Ⅴ層	MB48	不明（押し型道具？）	土師質
5	第33図	第Ⅲ層	MC47	土錘	土師質
6	第33図	第Ⅲ層	LY53	泥面子	土師質

表6 瓦属性一覧

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	器種等
1	第33図	SE01埋土		棧瓦（赤瓦）
2	第33図	SKI03埋土		棧瓦（赤瓦）
3	第33図	SK16埋土		棧瓦（いぶし瓦）

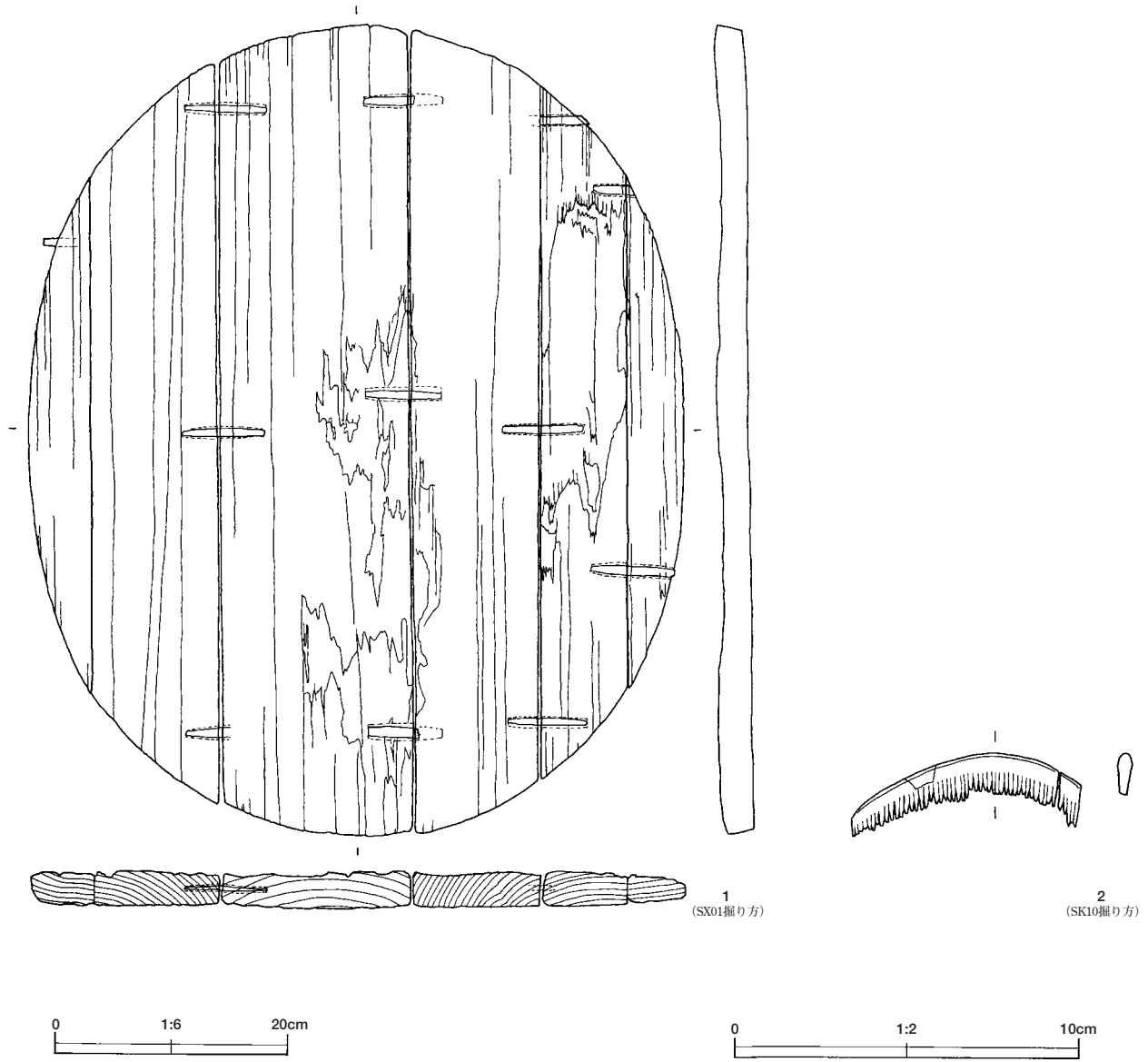
表7 木製品属性一覧

番号	図番号	出土地点・層位	器種等	寸法	特徴
1	第34図	SX01掘り方	桶	最長69.0、最短56.2、最大厚3.2cm	底板、木釘で継ぎ足している
2	第34図	SK10掘り方	櫛	長6.7、幅1.3、最大厚0.45cm	



第33図 土製品・瓦

第3章 調査の方法と成果
 (4) 出土遺物属性表および実測図



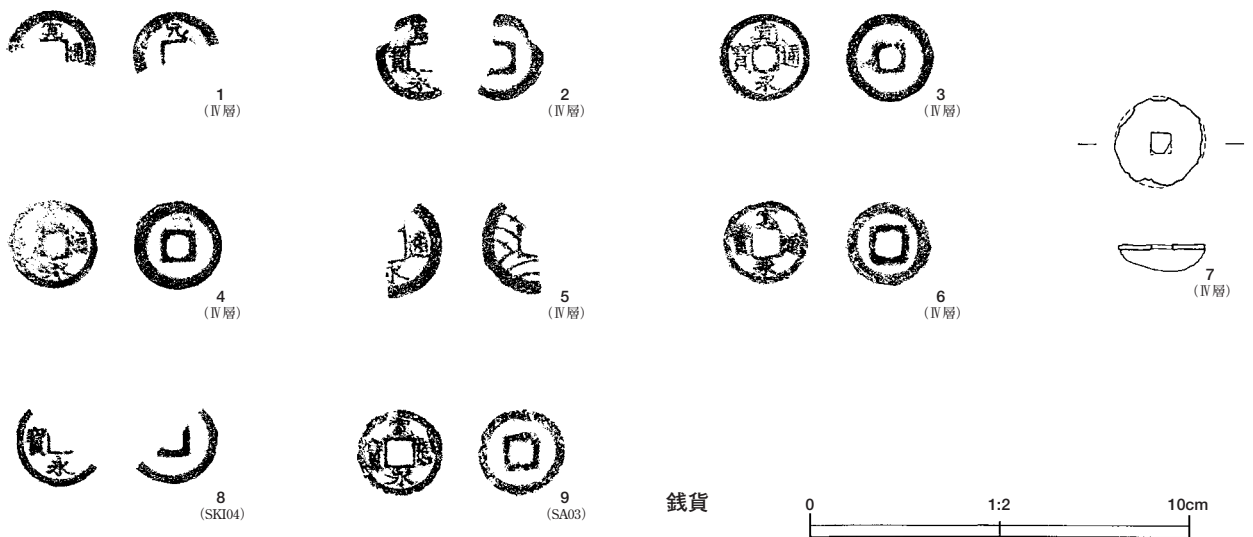
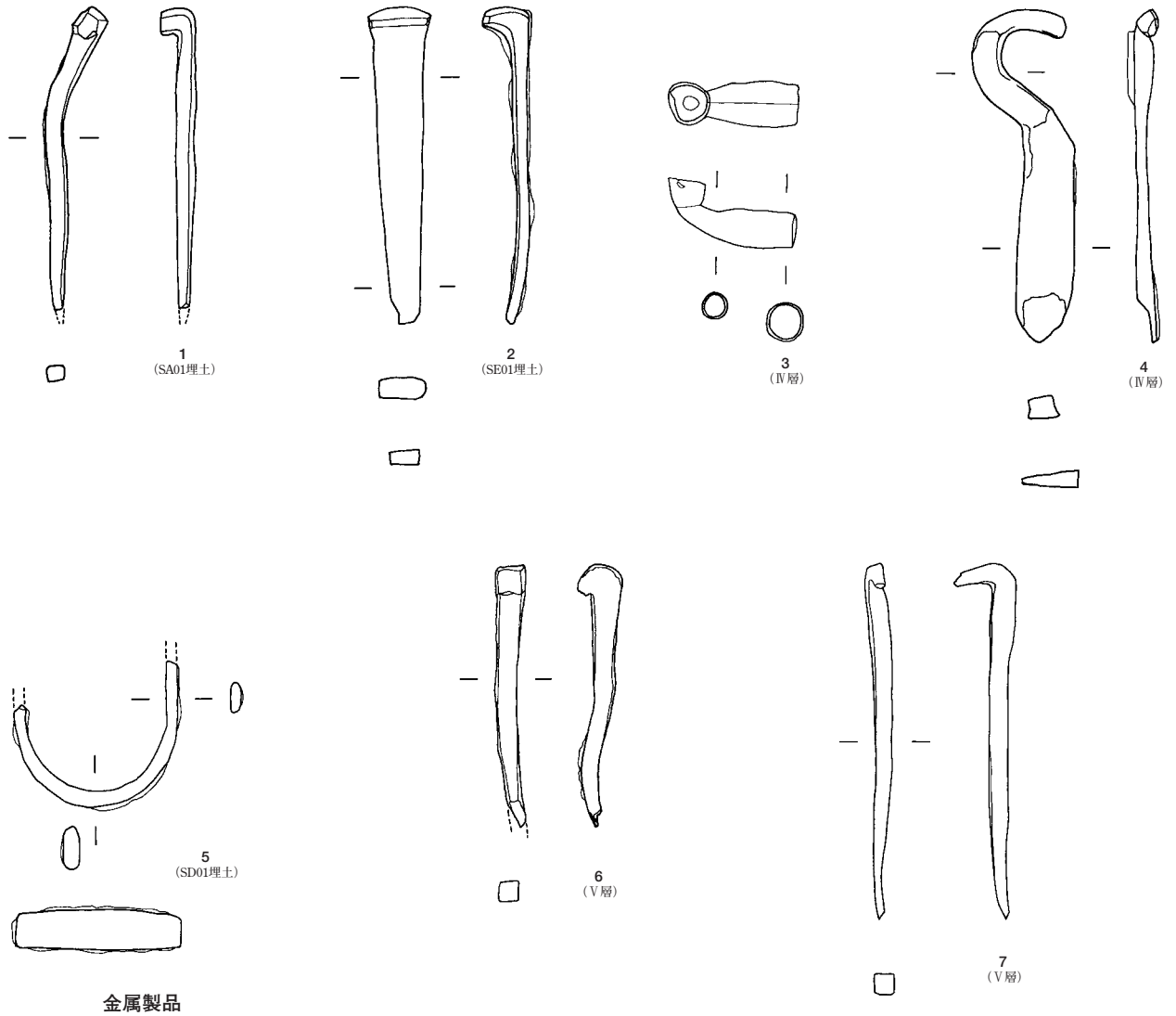
第34図 木製品

表8 金属製品属性一覧

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	器種等	素材
1	第35図	SA01埋土		折釘	鉄製
2	第35図	SE01埋土		皆折釘	鉄製
3	第35図	第Ⅳ層	MA48	煙管雁首	銅製
4	第35図	第Ⅳ層	LX48	不明	鉄製
5	第35図	SD02埋土		不明	鉄製
6	第35図	第Ⅴ層	MB52	折釘	鉄製
7	第35図	第Ⅴ層	MD51	折釘	鉄製

表9 銭貨属性一覧

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	銭貨名	分類	素材
1	第35図	第Ⅳ層	MA48	寛永通寶	新寛永 (背元)	銅
2	第35図	第Ⅳ層	MC49	寛永通寶	新寛永	銅
3	第35図	第Ⅳ層	MB51	寛永通寶	新寛永	銅
4	第35図	第Ⅳ層	MB51	寛永通寶	新寛永	銅
5	第35図	第Ⅳ層	MB46	寛永通寶	新寛永 (背十一波)	銅
6	第35図	第Ⅳ層	MA51	寛永通寶	新寛永	銅
7	第35図	第Ⅳ層	MA52	不明		鉄
8	第35図	SKI04埋土		寛永通寶	新寛永	銅
9	第35図	SA03埋土		寛永通寶	新寛永	銅



第35図 金属製品・銭貨

第4章 まとめ

第1節 検出遺構とその年代について

第Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ層の3面から遺構が検出されたので、各遺構面の遺構配置および出土遺物の年代などから、その性格について考察したい。

(1) 第Ⅳ層について

第Ⅳ層からは畝跡、柱列1条、井戸状遺構1基、土坑1基、桶埋設遺構1基、人骨2体等が検出された。調査区北西から、北東～南西方向と北西～南東方向の2方向に延びる溝状の遺構(SX03)が認められ、確認面からの深さ6～7.5cmで、断面形はほぼ同一のU字状を呈することから、畑の畝跡と考えられる。そして、この溝跡に直交するように幅3.8m～4.0m間隔で溝跡(SX02)が認められたが、これは畑の中の小区画であり、通路として使用されたと考えられる。1号柱列は南側畝跡に直交し、溝の底面から直径の小さいピットが確認されたことから、畑を囲うための杭列と推測される。1号井戸状遺構は、中央部北東側で材を組んでいた形跡が認められ、畑に使うための水汲み場であったと推測される。1号桶埋設遺構は、1号井戸状遺構に近接していることから水溜用の桶と考えられるが、桶の底板付近から植物の種が検出されたことから、屎尿の溜め桶とも推測され、いずれにせよ周囲の畑と関連を窺い知ることができる。

第Ⅳ層の年代は、出土遺物から18世紀～19世紀で、調査区は『元文年中湊古絵図』(1730～1740年)(第5図)によると畑が描かれている場所であり、この場所が畑として利用されていたことを裏付けるものである。遺構の廃絶年代は明治時代前期頃と考えられる。

(2) 第Ⅴ層について

第Ⅴ層からは、竪穴遺構4基、柱列4条、溝跡3条、土坑7基、ピット1個等が検出された。竪穴遺構は4基認められ、その内2基(SKI01、02)は重なる形で検出され、2号竪穴遺構を切っていることから1号竪穴遺構が新しい。1～3号竪穴遺構は、壁が急に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、床面や壁の周縁にピットは確認されない。4号竪穴遺構は、周囲を3号溝跡に囲まれる形で検出された。これらの竪穴遺構については何らかの施設が想定されるが、性格は不明である。しかし、3号溝跡の底部から植物堆積痕が検出されたことから、溝跡内を水が流れていたか、水が溜まった状態であったと推測される。柱列は4条確認され、第Ⅳ層検出遺構の区画割りと同方向に延び、ピットの検出面からの深さが浅いことから、18～19世紀の畑跡に関連する杭を設置していた跡と考えられるが、第Ⅳ層面で検出した畝道と場所が異なるため、それよりも古い時期の畑に関連すると思われる。

第Ⅴ層の年代は、出土遺物から推測すると18世紀～19世紀前期であるが、第Ⅳ層面の畑跡の影響が大きく、第Ⅴ層面に新しい時期の遺物が混入している可能性が高いことから、ほぼ18世紀と考えられる。

(3) 第Ⅵ層について

第Ⅵ層からは、溝跡1条、土坑9基が検出された。4号溝跡は、調査区を貫くように確認され、調査区内で最も時期が古く、大規模であり、『元文年中湊古絵図』(1730～1740年)(第5図)が描かれる以

前であることから、湊城に関連する遺構の可能性も否定できない。16号土坑は、底面が平坦で、底面中央部で木材が一ヵ所に重なるように検出された。また、1号井戸状遺構に隣接することから、同様に水汲み場もしくは水溜の施設などが考えられる。

第2節 出土遺物について

遺物の種類は、陶磁器・土製品・瓦・木製品・金属製品・銭貨などが出土している。全体の出土量は、整理作業後の収納時でコンテナ（54×34×15cm）で20箱であり、そのうち陶磁器は特に多く16箱で、全体の約80%を占める。種別ごとの機種構成や様相については、以下のように概括される。

（1）陶磁器について

陶器は灰釉や鉄釉等の施釉陶器などである。磁器は染付・色絵・青磁・白磁等である。器種構成は、碗・皿・鉢類などの食膳具、瓶・壺・甕類などの貯蔵具、火入などの火具、灯明皿などの灯火具、仏飯器などの祭祀具などがあり、多種多様なものがみられる。

陶磁器類は年代を問わず生産地の同定が可能なものについて分類を行うと、以下のようになる。

①中国産

明朝時代の中国産貿易陶磁器である。

磁器は、碗や皿の染付が遺構内外で出土しているが、他の遺物と生産時期が大分異なる。大部分が第V層検出遺構からの検出である。

②肥前系

九州肥前系地方の窯で生産されたもの、および肥前の技術・技法を直接取り入れて生産されたものである。陶磁器の中ではもっとも出土量が多く大半を占める生産地である。

陶器は、磁器に比べ出土量が少ないが、二彩唐津や刷毛目文、色絵を施したものが出土している。ほとんどが17世紀後期～18世紀前期のものである。器種構成としては、碗・皿などがある。

磁器は、17世紀後期の染付碗・皿に始まり、19世紀前期の広東碗、19世紀中期の端反碗までみられる。その中でも18～19世紀代の碗・皿が最も出土量が多い。器種構成としては、碗・皿・鉢・蓋・段重・仏飯器などがあり、豊富である。種類は、染付を主体とし、青磁・白磁がある。波佐見周辺の雑器窯の製品が多く、有田周辺窯のものも極少量みられる。

③瀬戸・美濃系

美濃を含めた愛知県瀬戸地方周辺で生産されたものである。

陶器および磁器が極少量出土している。陶器は皿が出土しているが、時期は不明である。磁器は碗蓋が出土し、19世紀のものである。

④寺内窯

秋田市寺内所在の在地の地方窯で、白岩窯から工人が移動し天明7年(1787)に陶器生産を開始したとされる。天保8年(1837)頃には肥前の技術を間接的に導入し、磁器生産も開始したとされる（小松・日野1991）。明治初め(1870年前後)頃まで操業した。陶器土瓶などが出土している。

以上のことから、各遺構面および遺構内出土遺物は肥前系陶磁器が主体となる。平成17、18年度調査区と比較すると、中国産貿易陶磁器・瀬戸美濃系陶磁器・肥前系陶器の出土量が非常に少ない傾向が見

られる。これは、調査区が湊城の内堀外側北東部にあたること、江戸時代以降、肥前系の陶磁器が日本海側の流通の中心となったことと合わせ、中世湊城に関連する遺構はなく、近世土崎湊に関連する遺構のみが存在することを裏付けている。

第3節 湊城について

平成19年度調査区の第Ⅳ層は18～19世紀、第Ⅴ層は18世紀、第Ⅵ層は18世紀以前の遺構面であることが分かったが、湊城時代の第Ⅵ層は遺物の出土量が少なく、時期の特定は困難であった。

平成17、18年度調査区では、湊城関連の遺構および近世の町屋敷跡が確認されている。また、15世紀後半～16世紀の遺物が出土し、中には中国産貿易陶磁器や京都系手づくねかわらけなど希少価値のあるものが含まれていた。しかし、今年度調査区では、明確に時期や性格を特定できる遺構はなく、遺物の量も少なく、出土した陶磁器は18世紀以降のものが大半を占めている。

これらのことから、今回の調査は湊城の内堀外側北東部の発掘調査であり、遺構・遺物ともに前回に比べて少なく、これは本調査区が中世湊城から近世土崎湊の時期を通して居住区域として使用されなかったことを示していると考えられる。また、竪穴遺構や溝跡などの性格を解明できなかったが、18世紀から19世紀にかけて当該地は畑として使用された土地であったことを確認することができた。このことは、『元文中湊古絵図』（1730～1740年）（第5図）の資料的価値を高めるものであると考えている。

今後の調査では、湊城に関する遺構の検出に努め、湊城の時期を把握していくとともに、本調査区付近が中世湊城の時代にどういった状況であったか、調査していく必要がある。

〔第3、4章引用・参考文献〕

- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 大橋康二 2000 『肥前陶磁』 ニューサイエンス社
- 加藤助吉 1941 『土崎港町史』 秋田市役所土崎出張所
- 九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
- 古泉弘 1987 『江戸の考古学』 ニューサイエンス社
- 小松正夫・日野久 1991 『寺内焼窯跡—寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査—』 秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所
- 利部修 2006 『久保田城跡・藩校明德館跡—秋田中央道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』 秋田県文化財調査報告書第412集 秋田県埋蔵文化財センター
- 利部修他 2005 『東根小屋町遺跡—秋田県教育・福祉複合施設整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』 秋田県文化財調査報告書第387集 秋田県埋蔵文化財センター
- 塩谷順耳他 1999 『秋田市史 第八巻 中世 史料編』 秋田市
- 瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史 陶磁史編4』
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 『瀬戸市史 陶磁史編6』
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2001 『瀬戸大窯とその時代』 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念企画展図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2002 『江戸時代の瀬戸窯』 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2003 『江戸時代の美濃窯』 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2004 『江戸時代の瀬戸・美濃窯』 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2006 『江戸時代の瀬戸・美濃—三都と名古屋—』 平成17年度瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 田口昭二 1983 『美濃焼』 ニューサイエンス社
- 東北陶磁文化館編 1987 『東北の近世陶磁』
- 東北中世考古学会編 2003 『中世奥羽の土器・陶磁器』 高志書院
- 東北中世考古学会編 2005 『海と城の中世』 高志書院
- 安田忠市他 2002 『藩校明德館跡—市街地再開発に伴う発掘調査報告書—』 秋田市教育委員会

写真図版



湊城跡遠景（南東から）



湊城跡全景（南から）



調査地全景（南東から）



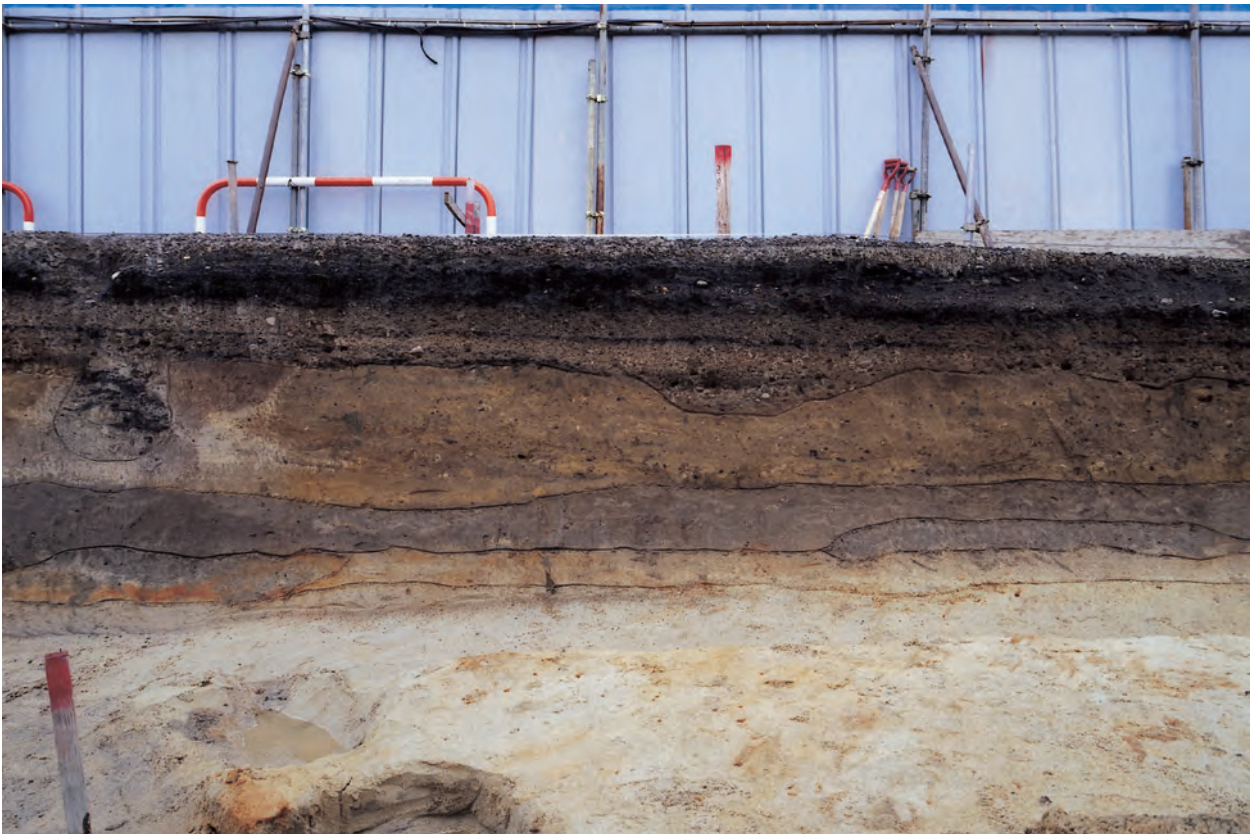
第Ⅳ層全景（南西から）



第Ⅴ層全景（南西から）



第Ⅵ層全景（南西から）



調査区南西壁土層断面（東から）



出土遺物

図版4



1号柱列完掘状況



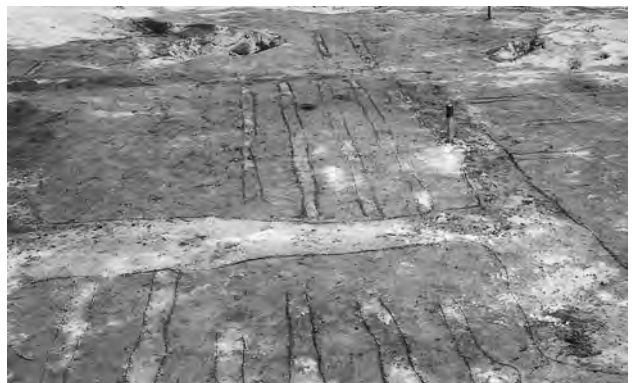
1号井戸状遺構完掘状況



1号土坑完掘状況



1号桶埋設遺構調査状況



第Ⅳ層畝跡出土状況



1号人骨出土状況



2号人骨出土状況



1号竖穴遺構調査状況



1、2号竖穴遺構完掘状況



3号竖穴遺構完掘状況



4号竖穴遺構完掘状況



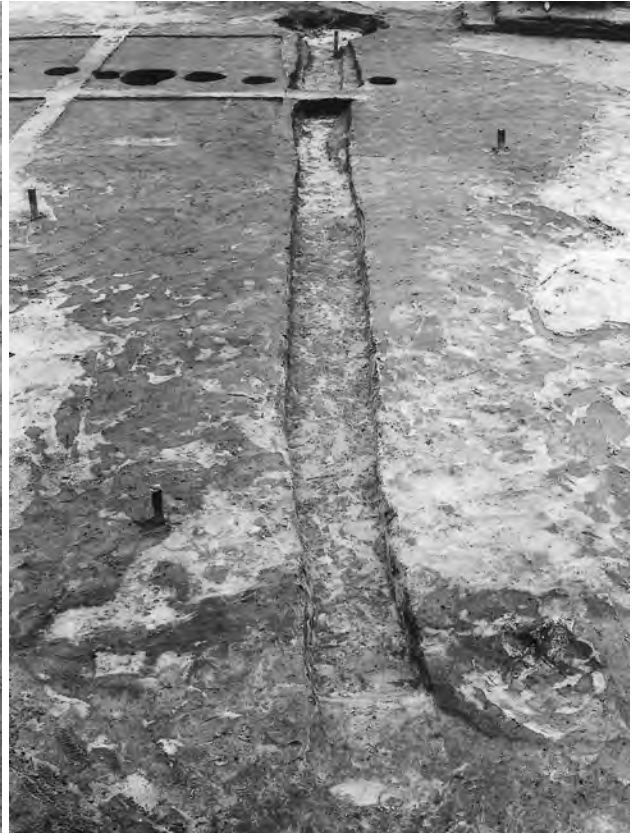
2号柱列完掘状況



3、4号柱列完掘状況



5号柱列完掘状況



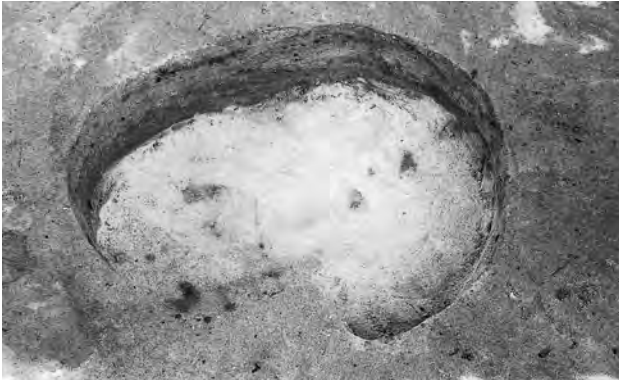
1号溝跡完掘状況



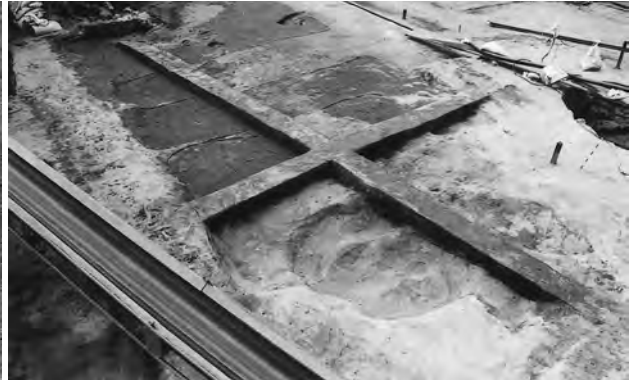
2号溝跡完掘状況



3号溝跡完掘状況



2号土坑完掘状況



3号土坑調査状況



4、5号土坑完掘状況



3、6、7号土坑完掘状況



8号土坑検出状況



4号溝跡調査状況



9号土坑完掘状況



10号土坑完掘状況



11号土坑調査状況



12号土坑調査状況



13号土坑完掘状況



14号土坑完掘状況



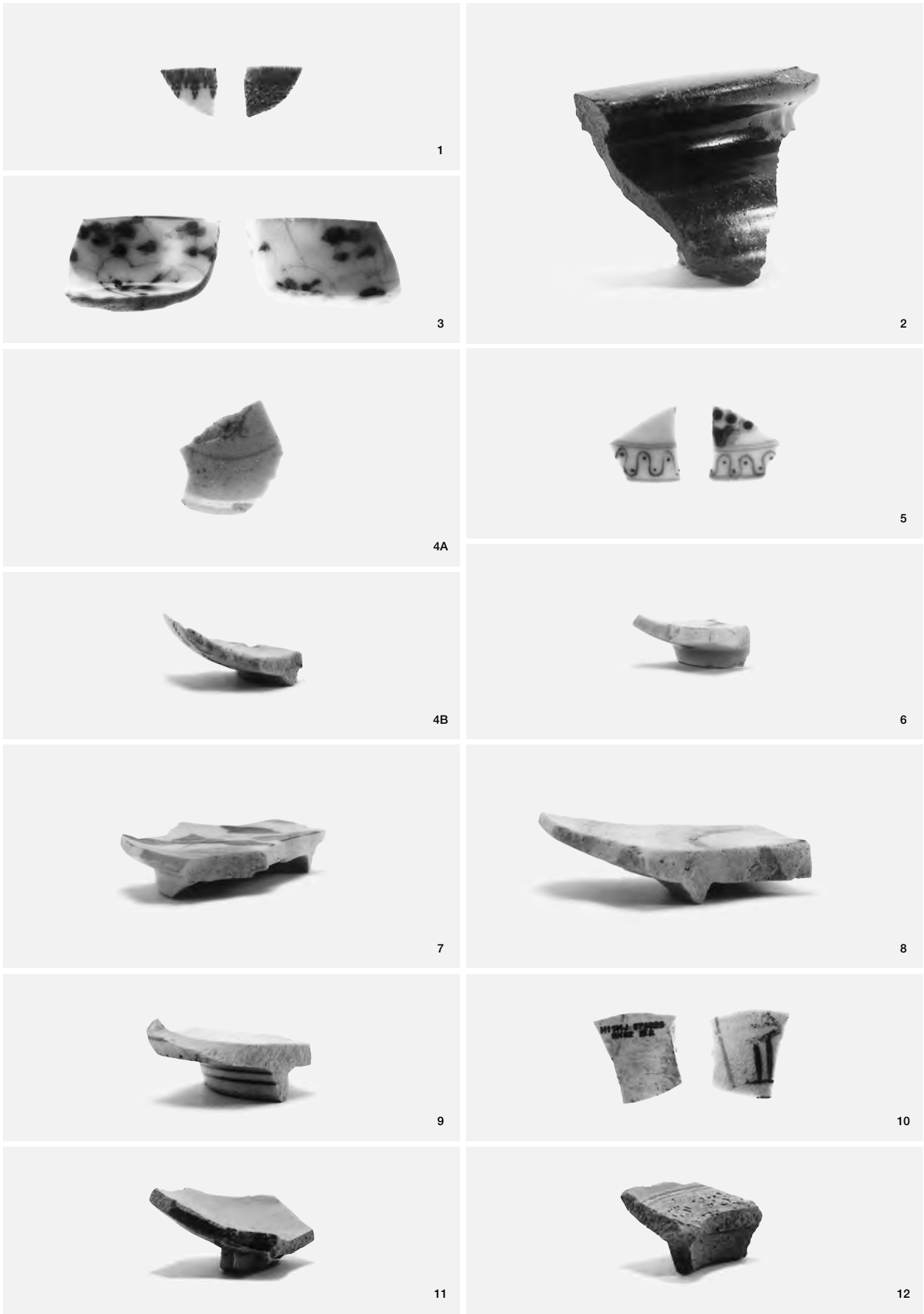
15号土坑完掘状況



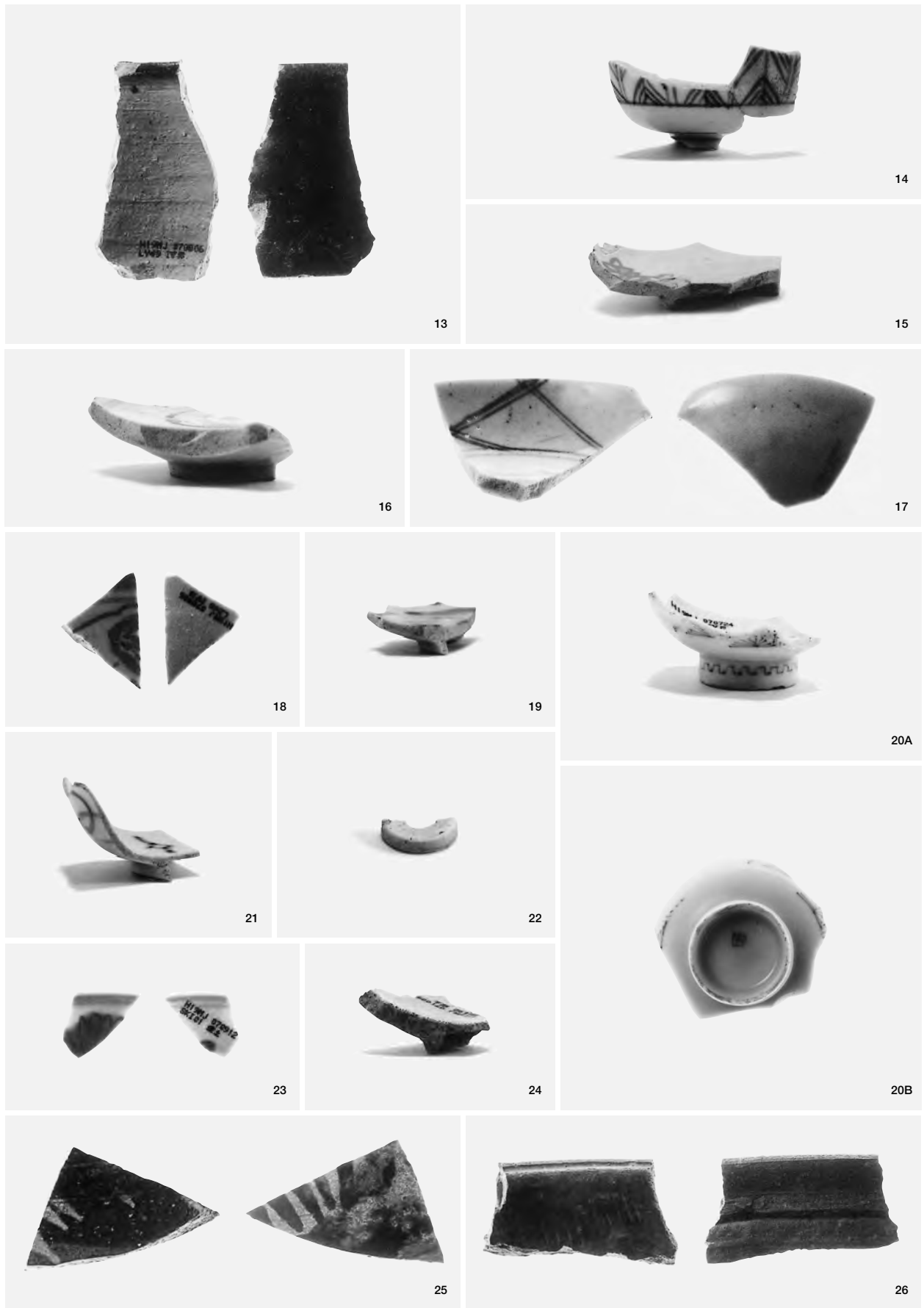
16号土坑完掘状況



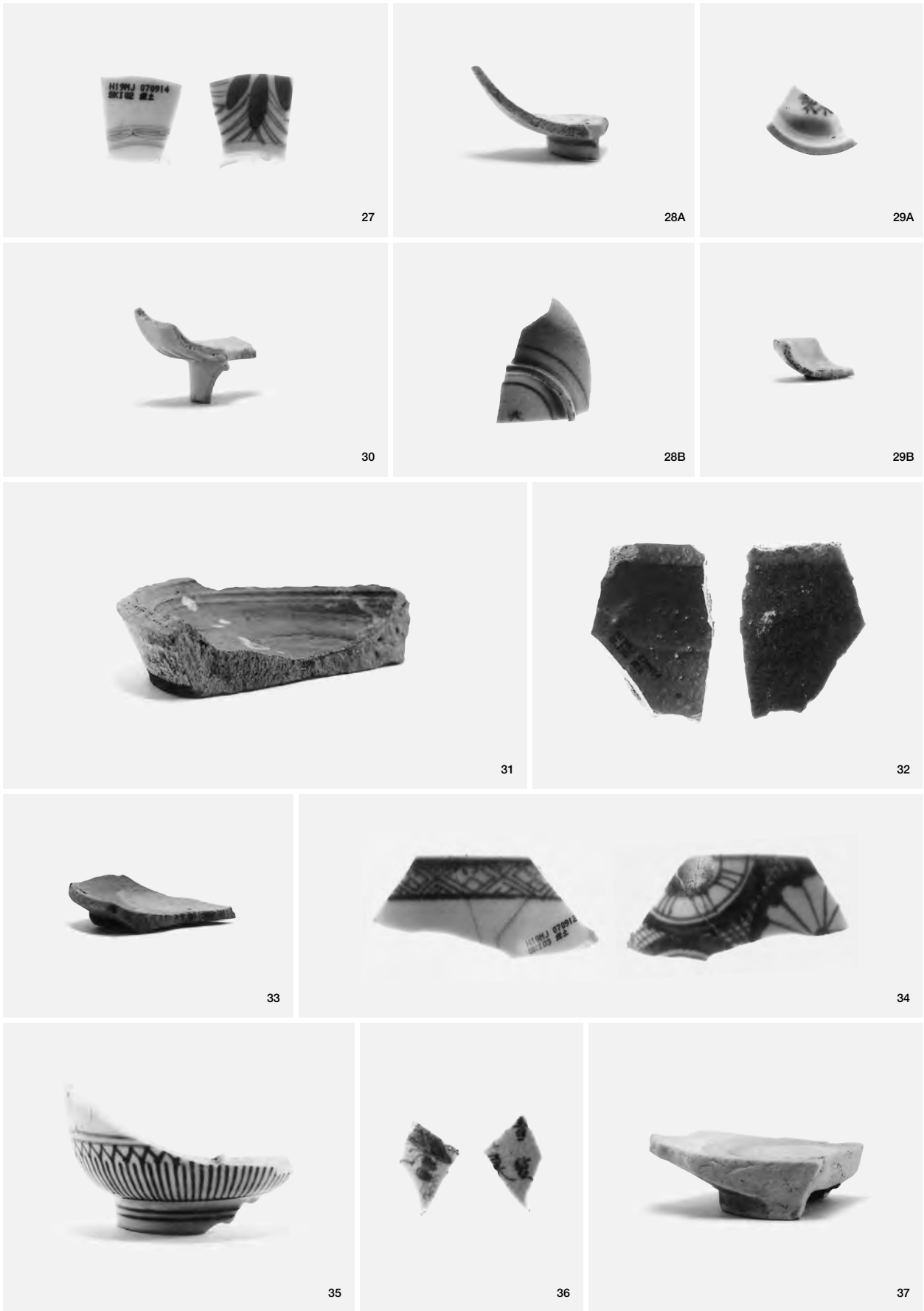
17号土坑完掘状況



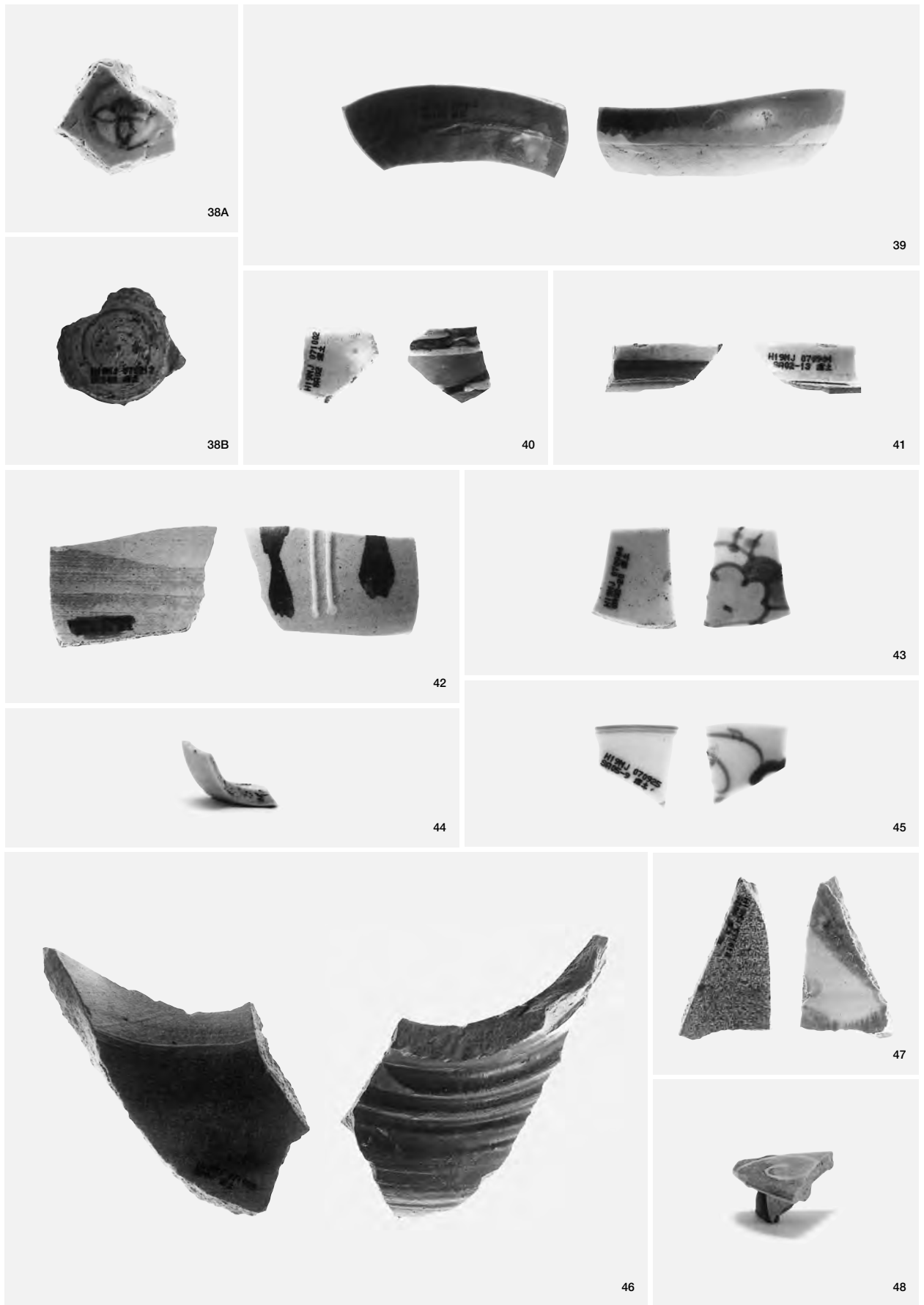
1~10 陶磁器 (第IV層遺構内)、11、12 陶磁器 (第IV層)



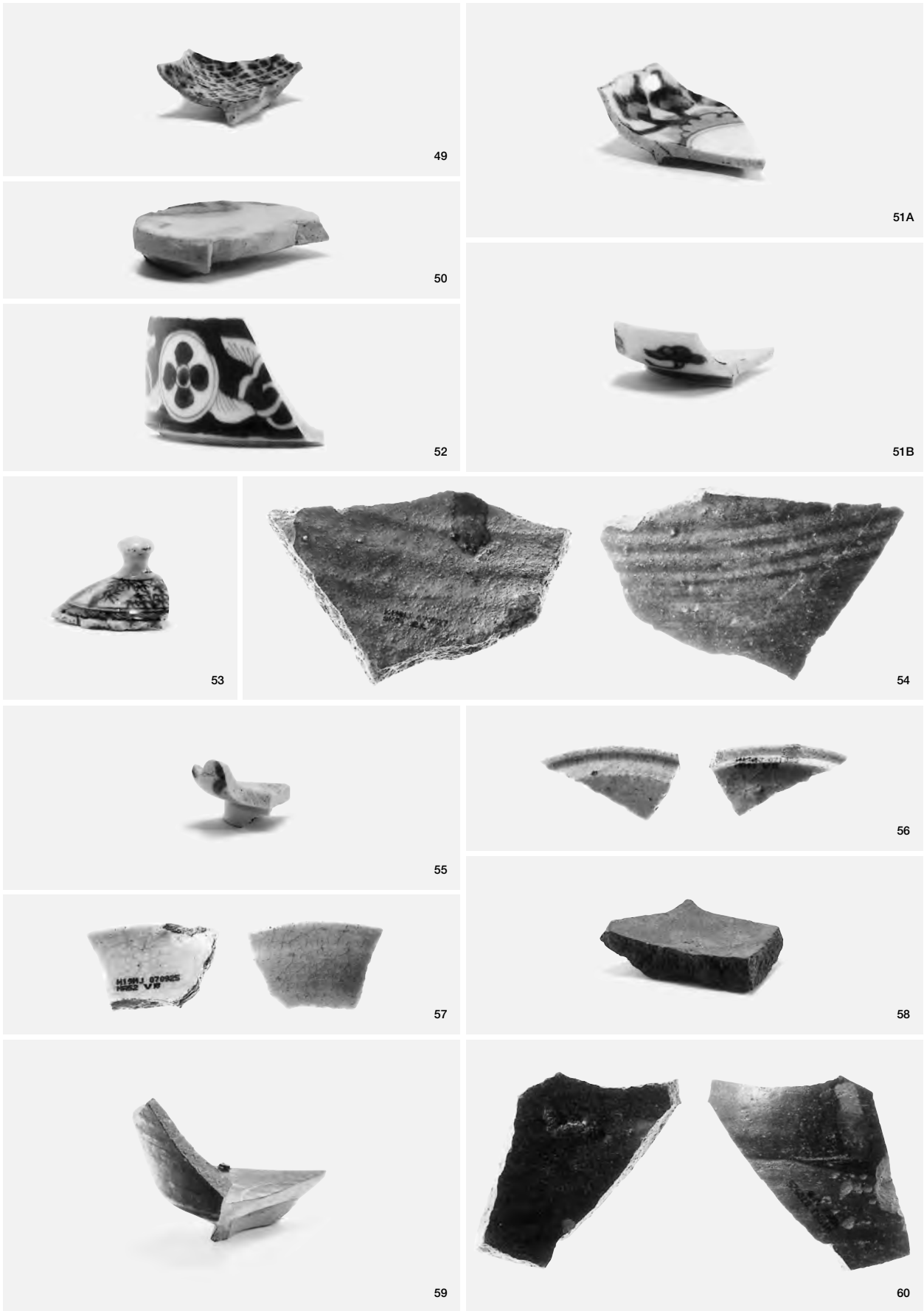
13~22 陶磁器 (第IV層)、22~26 陶磁器 (第V層遺構内)



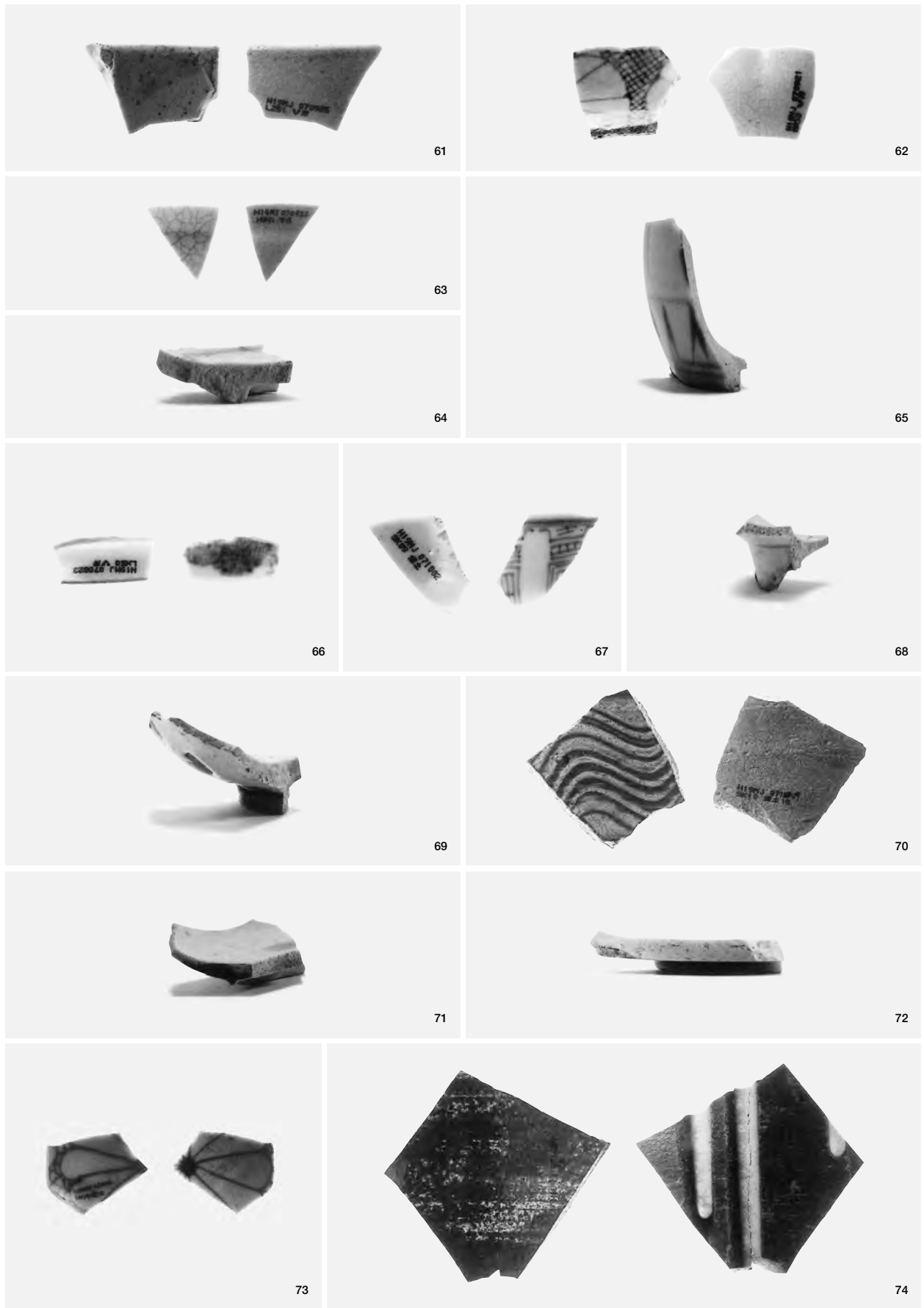
27~37 陶磁器 (第V層遺構内)



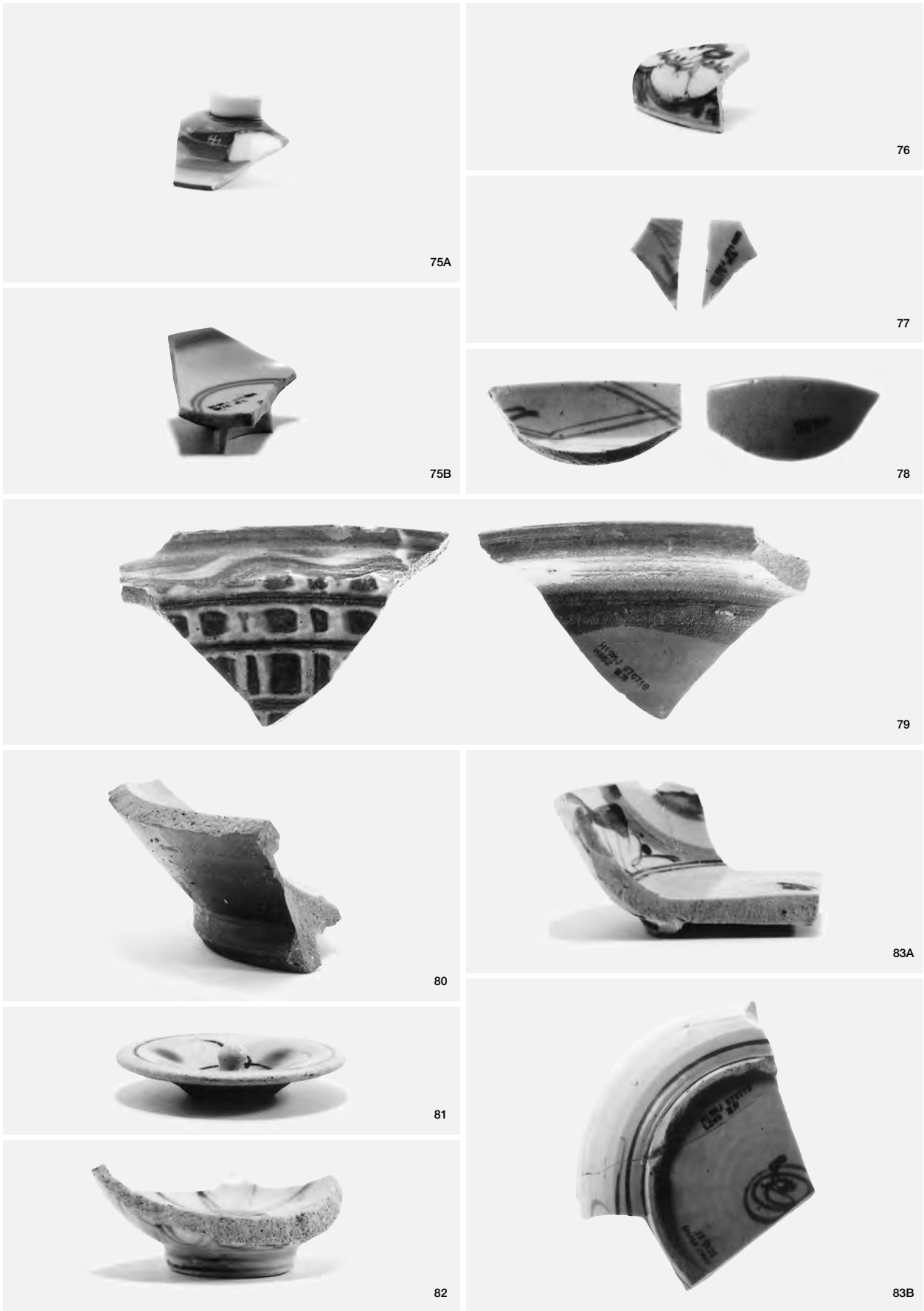
38~48 陶磁器 (第V層遺構内)



49~55 陶磁器 (第V層遺構内)、56~60 陶磁器 (第V層)



61~66 陶磁器 (第V層)、67~74 陶磁器 (第VI層遺構内)



75~77 陶磁器 (第Ⅵ層遺構内)、78 陶磁器 (第Ⅵ層)、79~83 陶磁器 (第Ⅲ層)



84



86



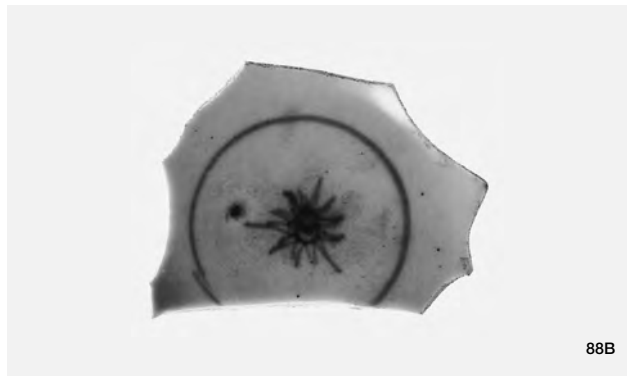
85



88A



87A



88B



87B



89A



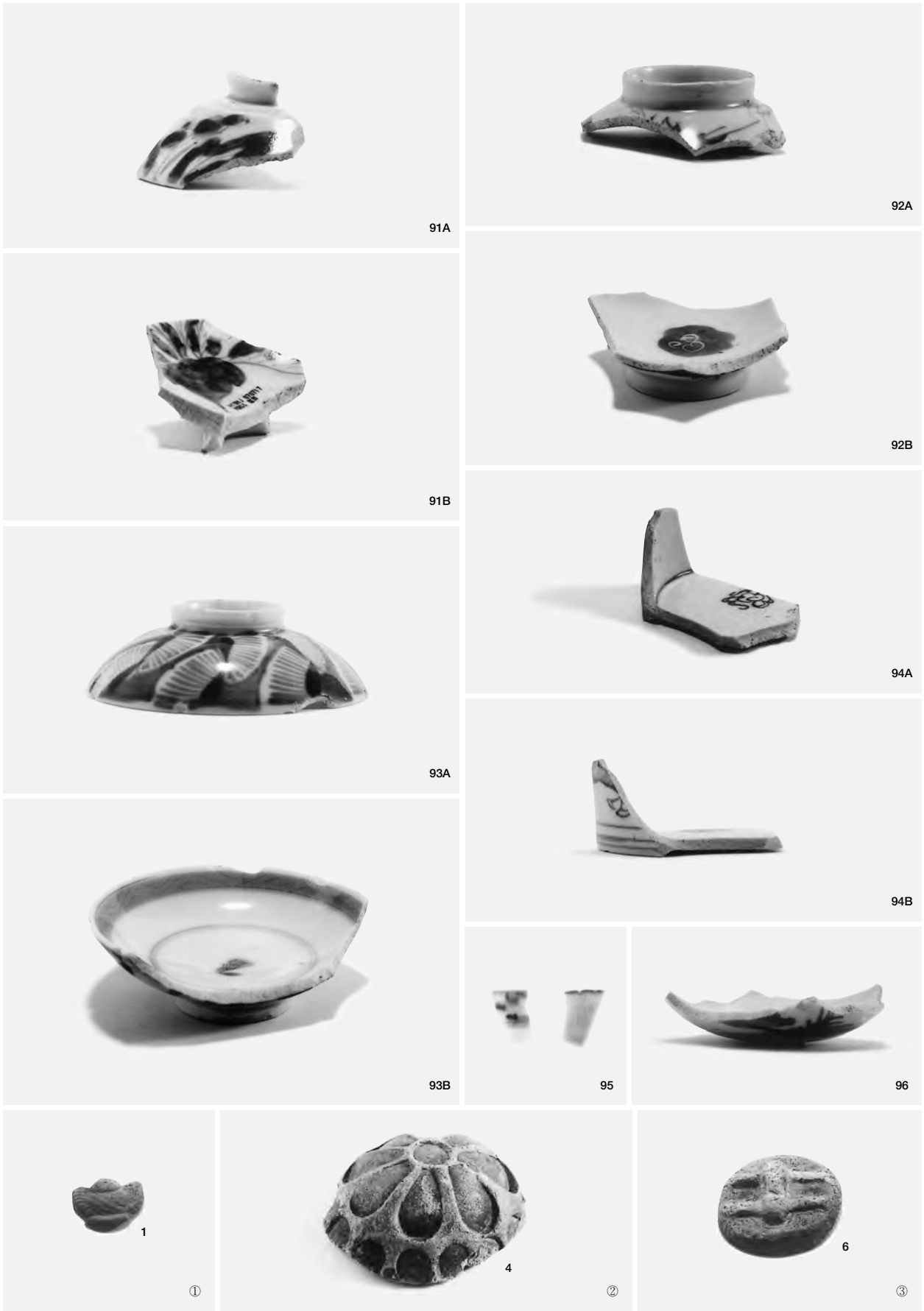
90A



89B



90B



91~93 陶磁器 (第Ⅲ層)、94~96 陶磁器 (遺構外)
 ①~③ 土製品 (第Ⅳ層・第Ⅴ層・第Ⅲ層)



① 土製品 (第Ⅳ層遺構内・第Ⅴ層・第Ⅲ層)、② 瓦
 ③、④ 木製品、⑤～⑦ 金属製品、⑧ 錢貨

報告書抄録

ふりがな	みなとじょうあと							
書名	湊城跡							
副書名	秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成19年度調査区）							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	伊藤才城							
編集機関	秋田市教育委員会							
所在地	〒010-0951 秋田県秋田市山王二丁目1番53号山王21ビル内 TEL 018-866-2246 FAX 018-866-2252							
発行年月日	2009年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
みなとじょうあと 湊城跡	あきたしつちぎきみなと 秋田市土崎港 中央六丁目地内	05201	165	39° 45' 26"	140° 4' 16"	20070702～ 20071026	681.2	道路拡幅事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
湊城跡	城郭	中世 近世	縦穴遺構	4基	陶器・磁器・土製品・	近世土崎湊に伴う 遺構・遺物が検出さ れた。		
			溝跡	4条	瓦・木製品・金属製品・			
			柱列	5条	銭貨			
			土坑	17基				
要約	<p>湊城跡は、JR土崎駅の西方約200mにある土崎神明社および土崎街区公園を中心とした地域で、現在は市街地となっている。</p> <p>中世には安東氏の居城である湊城が存在した場所であり、近世には土崎湊が存在した場所である。今回の調査では、近世土崎湊に関する遺構、遺物が確認された。</p>							

秋田市
湊 城 跡

—秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成19年度調査区）—

印刷・発行 平成21年 3 月
編集・発行 秋田市教育委員会
〒010-0951
秋田市山王二丁目 1 番53号 山王21ビル内
TEL 018-866-2246 FAX 018-866-2252
印 刷 有限会社 タイヨー商会
